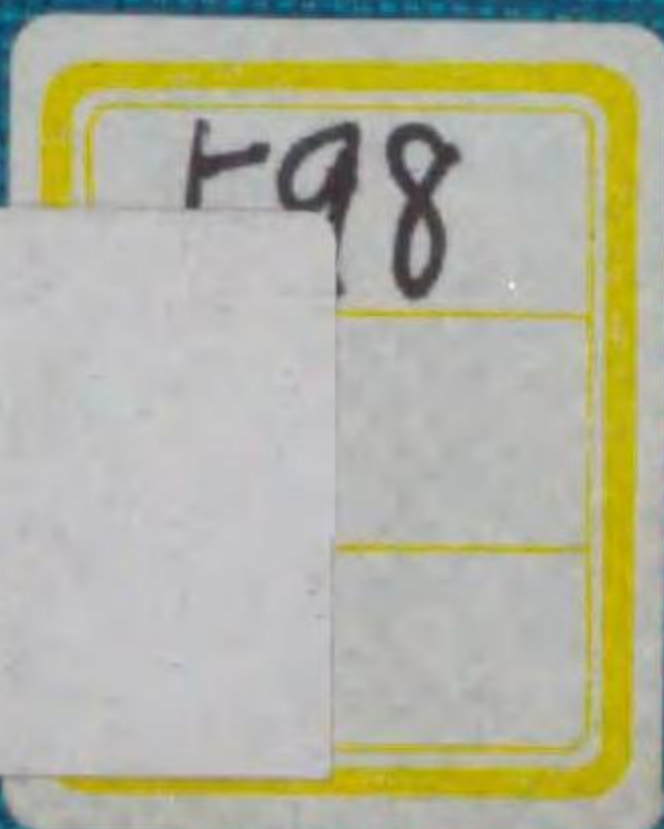
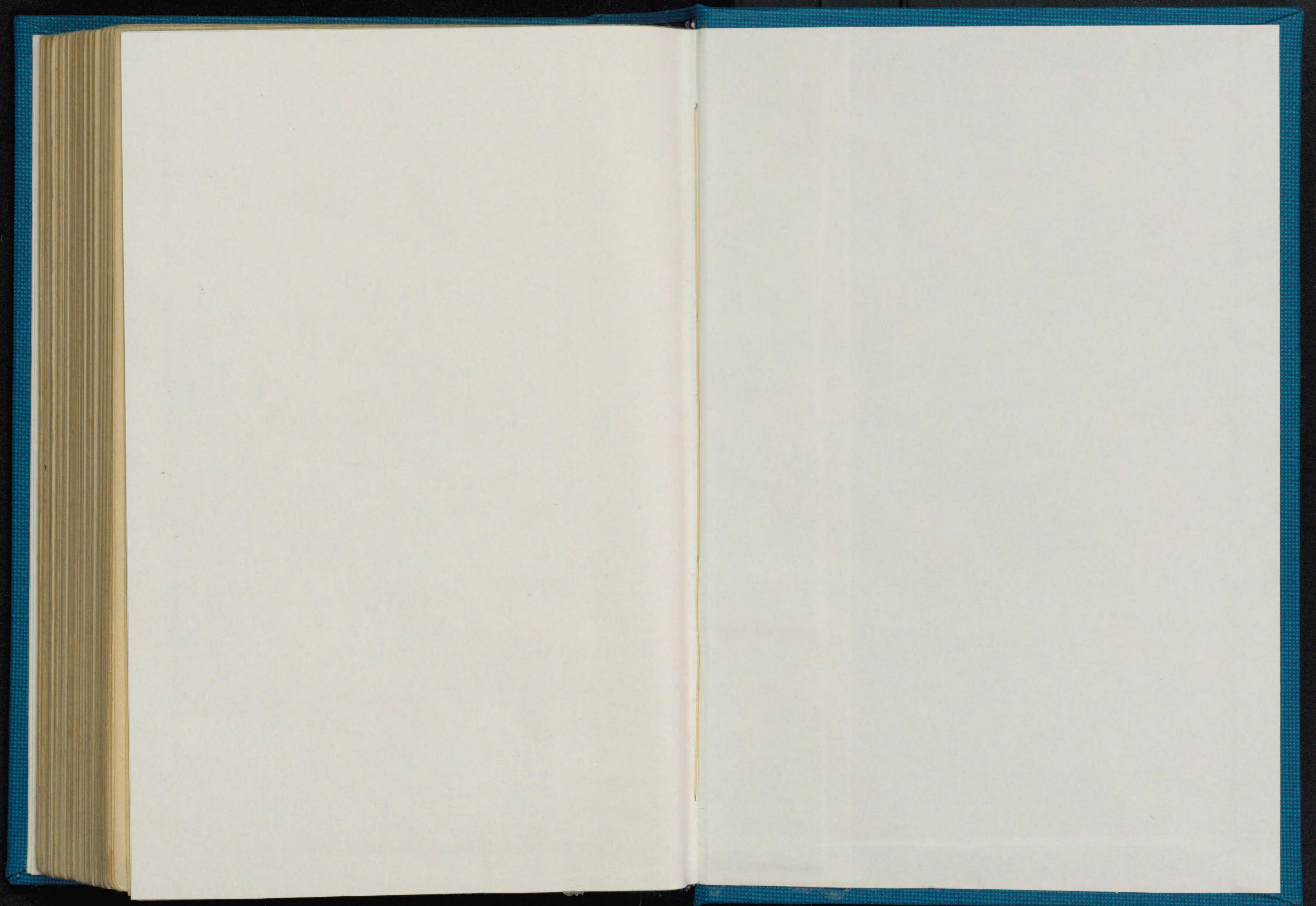


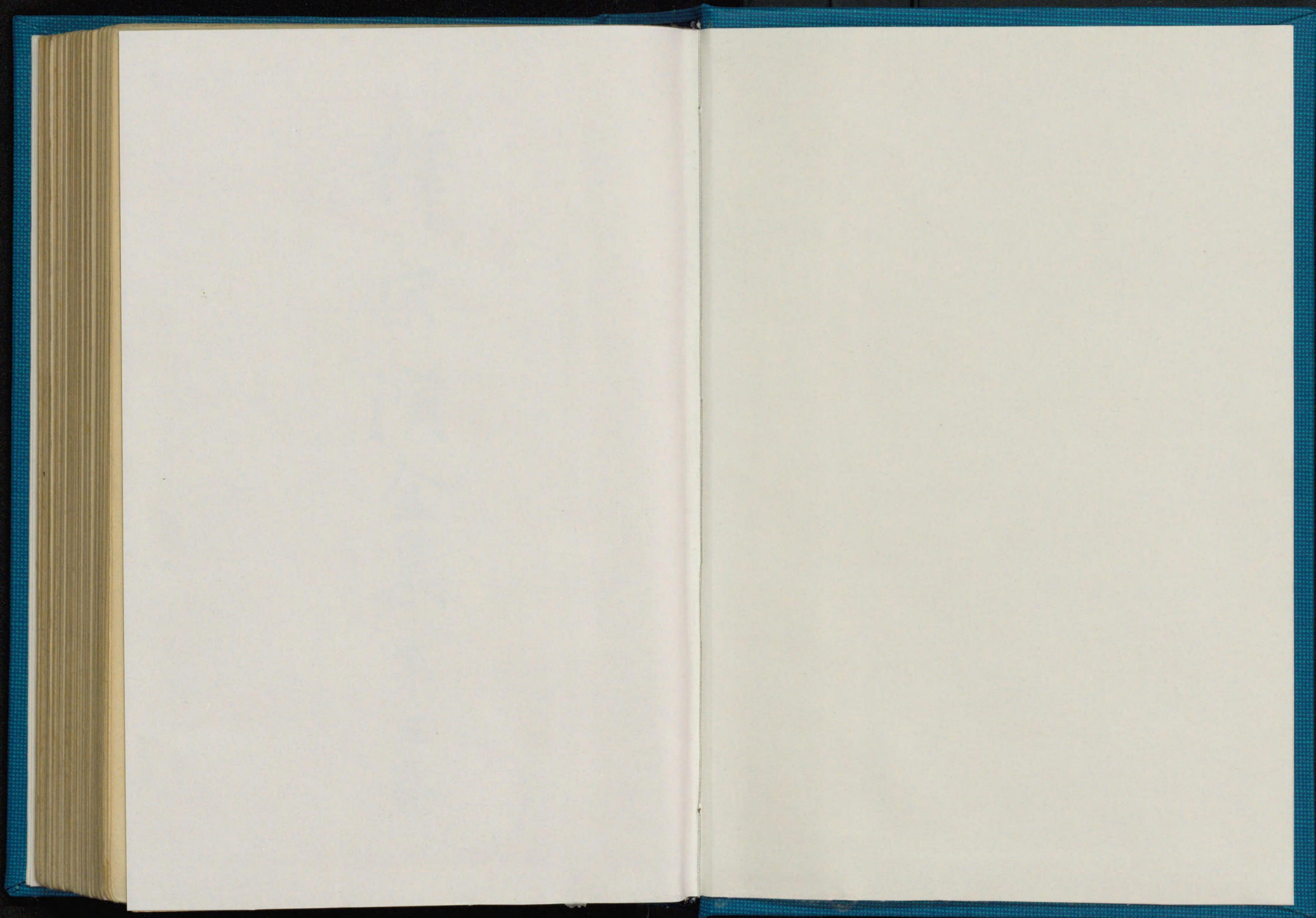
598-1



1200501528739







H10E-30



釋宗演全集 第三卷



598-1

講 述 碧 巖 錄 前篇 目次

| | |
|------------|----|
| 碧巖錄の由來 | 三 |
| 圓悟と雪竇 | 四 |
| 序 辯 | 七 |
| 第一則 武帝對達磨 | 一三 |
| 第二則 趙州至道無難 | 二九 |
| 第三則 馬大師不安 | 四 |
| 第四則 德山到滬山 | 五〇 |
| 第五則 雪峰大地撮來 | 五三 |
| 第六則 雲門十五前後 | 七 |
| 第七則 法眼慧超問佛 | 八三 |

第八則 翠 岳 夏 末.....九

第九則 趙州東門西門.....101

第十則 陸州掠虛頭漢.....107

第十一則 黃檗 瞳酒糟漢.....117

第十二則 洞山麻三斤.....117

第十三則 巴陵銀碗裏.....118

第十四則 雲門對一說.....119

第十五則 雲門倒一說.....120

第十六則 鏡 清 草 裏 漢.....127

第十七則 香林座久成勞.....127

第十八則 忠國師無縫塔.....128

第十九則 俱 眠 一 指 頭.....129

第二十則 龍牙西來無意.....130

第二十一則 智門蓮花荷葉.....110

第二十二則 雪 峰 鼈 鼻 蛇.....118

第二十三則 保 福 妙 峰 頂.....120

第二十四則 鐵 磨 到 滌 山.....127

第二十五則 蓮 華 峰 柳 標.....129

第二十六則 百 丈 奇 特 事.....129

第二十七則 雲 門 體 露 金 風.....134

第二十八則 涅 槃 不 說 底 法.....134

第二十九則 大 隋 劫 火 洞 然.....133

第三十則 趙 州 大 蘿 蔔.....129

第三十一則 麻 谷 兩 處 振 錫.....130

第三十二則 定 上 座 問 臨 濟.....130

第三十三則 陳 操 看 資 福.....130

| | | |
|-------|---------|-----|
| 第三十四則 | 仰山不遊山 | 三三〇 |
| 第三十五則 | 垂著見文殊 | 三三九 |
| 第三十六則 | 長沙遊山來 | 三五〇 |
| 第三十七則 | 盤山三界無法 | 三五七 |
| 第三十八則 | 風穴鐵牛機 | 三六六 |
| 第三十九則 | 雲門花藥欄 | 三七六 |
| 第四十則 | 南泉一株花 | 三八五 |
| 第四十一則 | 趙州大死底人 | 三九三 |
| 第四十二則 | 龐居士好雪片片 | 四〇〇 |
| 第四十三則 | 洞山寒暑到來 | 四〇八 |
| 第四十四則 | 禾山解打鼓 | 四一七 |
| 第四十五則 | 趙州萬法歸一 | 四二六 |

講述

碧巖錄

前篇

緒言

編者曰く、宗演禪師の『碧巖錄』提唱の本文に先ち、ものゝ順序として、本書の世に出た由來及び其本則と頌とを唱へた雪竇和尚と、尙ほそれに垂示と、著語と、評唱とを附した圓悟禪師の經歷を記することは、素より宗演禪師の提唱に拘る『序辯』に、其要を擧げてあるから、所謂河頭水を賣るが如く、重複の嫌ひはあるが、禪師が其『序辯』中に「固より傳記の全部ではなく、ほんの其一端であります」とあるから、補足として左に掲ぐることにした。

碧巖錄の由來

「碧巖錄」は又「碧巖集」ともいひ、宋の佛果圓悟禪師の著である。禪師が張無盡居士の請ひに依り澧州夾山靈泉禪院に住された時、雪竇重顯禪師の一百則の頌古集を把り、一則毎に初めに垂示を附し次に公案を擧し、そして句毎に著語を施し、更に評唱を下し、次に頌古の句毎に又著語を下し、尙ほ評唱を附したのが、即ち「碧巖錄」である。ところが圓悟禪師の法嗣たる大慧宗杲禪師が、學

徒に其葛藤を弄して、自分の參究を忽諸にするの弊に陥るを慨し、其刻板を火中に投じた。爾來二百年叢林に之れを見ることが能きなかつたが、本書の序文に萬里が「張煒明遠、死灰を燃りて復た板行す」と書いた通り、元の大徳中に張煒明遠が之れを重刊し、萬里、休々、三教等が序文を加へ、之れが流通を圖つたので、殆んど湮滅に歸せんとした「碧巖錄」は、再び叢林に行はるゝに至り、今日に及んだのである。そして張煒明遠が、一と度宗門第一書と稱した以來、世人をして參禪とは「碧巖錄」を讀むことだと思はしむるに至つた。

圓悟と雪竇

圓悟克勤は臨濟宗楊岐派で、字は無著、彭州の人で、姓は駱氏、幼にして祝髮し、諸尊宿を歴參して、最後に五祖法演禪師に見え、後五祖の許を去りて金山に行き、病に罹り再び五祖の許に歸り、參究契悟して其法を嗣いだ。後翰林郭知章の請ひによりて、六祖寺、及び昭覺寺に於て開法した。政和年中に南遊し、張無盡に逢ひ、華嚴の玄旨を談じた。無盡の歸依を受けて、澧州夾山の靈泉院に住し、雪竇頌古を提唱して、垂示、著語、評唱を加へ、靈泉院の方丈に掲げられた扁額中の碧巖の二文字から把つて、評題を「碧巖錄」と名づけたのである。佛果禪師の號を賜ひ、次いで金陵の蔣山に遷り更に汴京の天寧萬壽寺に轉じ、高宗建炎の初めに金山に入り、圓悟禪師の號を賜ひ、後雲居に住じ、

又昭覺に轉じ、南宋の高宗紹興五年(西曆一一三五年)八月示寂し、眞覺禪師と謚された。

雪竇重顯は雲門宗で、遂州の人、姓は李氏、名は重顯、字は隱之、宋の太宗皇帝太平興國五年に生れた。幼にして普安院仁銑上人に依つて出家し、受具の後教相を究め、南遊して智門光祚に參じ、遂に開悟して祖宗を嗣ぎ、次いで翠微峰に住し、轉じて雪竇山に住した。雪竇山は浙江省明州慶元府(甯波府)に在る山の名で、山中に資聖寺があつて、支那十刹の一である。其初め長沙景岑の資、常通の初めて禪苑を開いた所である。重顯此處に住するや、不世出の英資を具し、翰林の文才を發露し、雲門の宗風を振ふた。之れに依りて雪竇の名天下に著しかつた。其著「雪竇頌古」「祖英集」等禪林古今第一と爲す。宋の仁宗皇帝皇祐四年(西曆一〇五二年)七月七日に示寂した。壽七十三、明覺大師と謚された。

佛果園悟禪師碧巖錄

師住_ニ澧州夾山靈泉禪院、評_ニ唱雪竇顯和尚頌古語要。

(訓讀) 佛果園悟禪師碧巖錄

師澧州夾山靈泉禪院に住して、雪竇顯和尚頌古を評唱する語要。

序 辯

これぞ宗門第一の書と稱されてゐる本書の表題でありまして、其下に註を施して「師澧州夾山靈泉禪院に住して、雪竇顯和尚頌古を評唱する語要」とあります。併し初めから書物の表題などに就いて諄々しく説かないけれども、唯園悟禪師と、雪竇和尚のことは、是非とも此處で述べて置きたいのであります。固より傳記の全部ではなく、ほんの其一端であります。さて佛果、園悟共に之れ諡號であります。佛果は宋の徽宗皇帝から贈られた號で、又園悟は高宗皇帝の賜ひしところであります。園悟禪師は、臨濟宗第十世の孫で、諱は克勤、字は無著といひ、彭州崇寧縣に生れ、俗姓を駱氏といひ

ました。其生家は儒家であつて、少より師に就いて書を受くるに、日々千言を計るといふて、常に他生の群を抜いてゐました。或る日妙寂寺に遊び佛書を見て、之れを讀んで三復し、悵然として舊物を獲るが如しで、恰も置き忘れたものを見付け出したやうな様子で、

「余は殆んど過去の沙門なり」

と獨語したのであります。これが抑も出家の因縁と爲りまして、業を棄て、祝髮し、諸教論の蘊奥を究め、俄に病を得て、將に死に瀕し、

「明に道を聞いて、夕に死すとも可なり。諸佛涅槃の正路は、文句の中にあらず。」

と喝し、遂に去つて照覺寺の勝公に謁して、心要を訊きました。勝公臂を刺して血を出し、示して曰く、

「これ曹溪の一滴なり。」

と、即ちこれが六祖より傳ふところの活き血であると言ふた。併しこんなことでは、素より宗旨が現はれぬ。乃ち意に契はずと爲し、又去つて一鉢を持し、徒歩遍歴して大偽の喆禪師、晦堂心禪師等に參じ、廬山の總禪師に見え、至る所法器と呼ばれましたけれども、最後に龍舒の五祖法演禪師の許に至りて謁を乞ひました。時に使者あり、演禪師の榻下に禮して、佛法の大意を問ふた。演禪師曰く

「汝嘗て小艷の詩を讀みたりや否や」

と。蓋し此詩の兩句は、宗旨上のことに能く似てゐる。某詩に曰く、

「頻りに小玉と呼ぶも元より無事、祇だ担郎が聲を認得せんことを要す。」

と。頻りに小玉の名を呼んでゐるけれども、其名を呼ぶが主にあらず、其れが聲を認得せしむるを以て要とするのであります。禪宗に於ても然りで、既に不立文字と立てるのは、靈山拈花微笑の些子を傳へんが爲めであります。師は法演禪師の傍に侍立して、之れを聞取し、驪然として大悟したのであります。素より是れ迄には、參究に參究を重ね、大疑に大疑を積んでゐたので、所謂大疑の下に大悟有りであります。時に圓悟、法演禪師に告げて曰く、

「今日胸中の物を去却して、目前の機を喪盡し、安んずることを得たり。」

と。すると法演禪師が、圓悟に告げて曰く、

「如是如是。吾が宗既に汝を得たり、吾れ是れより高枕身を安んずべし。」

と。斯くて圓悟禪師は道に入り、一世宗旨を興隆し、紹興五年七十三歳で示寂されました。

次に雪竇和尚は、明州雪竇山第六世明覺大師と稱し、諱は重顯、字は隱之といひ、遂州の人で、俗姓は李氏、宋の太宗太、平興國五年八月を以て生れた。冥黙して眠るが如く、三日にして眼を開くといふ奇瑞がありました。幼にして戲弄を習はず、七歳の時一僧其門を過ぐるを見て、袈裟を挽持して喜ぶといふ。或は梵唄を聞いて涙を垂る。父母其故を問へば、出家を懇望す。父母之れを聽さず、師

食せざることを累日であつたと。幾許もなくして父母逝く、爰に於て宿願を成就し、遂に出家して、益州普安院仁鉄師の弟子と爲る。時に大慈寺の僧で元瑩といふ者がありまして、定慧圓覺經の疏を講じた。すると師は其席に加はつて、大義を問ふた。

『吾等本來佛である。何んぞ妄念妄想の中に在りて漂沈せんや。』

其夜再び大いに辯論し、滔々所解を述べて盡きず、遂に師匠も言句に窮し謝して曰く、

『子は教に滯るものにあらず、聞く南方に諸佛清淨法眼を得る者あり、子夫れ之れに従へよ。』

元來禪宗は、江南の方面に於て隆盛でありましたから、爰に於て去つて、石門の總和尚に謁し、居ること三年、後辭して隨州智門の祚禪師に參し、終に明州の雪竇山に移りて、大いに宗風を揚げたのでありまして、世稱して雲門の中興といふてゐます。これだけ述べて置く、唯緒だけであるけれども、これから登場する役者であるから、前以て紹介して置かねば、讀者は惑ふであらう。

序ながら尙ほ一言を加へて置く、「碧巖錄」は「碧巖集」ともいふて、此碧巖の二字は、圓悟禪師の住居された所の澧州夾山の靈泉院といふ寺の方丈に懸けてある扁額中の二字でありまして、それを取つて「碧巖錄」と名付けたのであります。此「碧巖錄」は素より圓悟禪師の手に依りて成つたものであります。元來は雪竇重顯禪師が、古人百則の公案を偈頌にせられたものを評唱せられたのでありますから、標題下に雪竇和尚頌古とあります。其古人の問答説話を指して公案とも稱し、古則とも

いふのであります。そして其詩を呼んで頌といひ、詩といふても素より世間の詩とは違ひまして、古人の公案に對して、風流中に眼目を加ふるので、敢て理窟を言はず、天然の其儘に宗旨を歌ひ出すのであります。さて其雪竇和尚の頌古は、一冊子と爲つて、夙に世に流行してゐました。ところで宋の徽宗皇帝の代に、圓悟禪師が出て、大いに雪竇頌古を愛誦し、一則毎に小序を附し、其本則及び頌の一句毎に短評を加へ、又本則及び頌に批評を附しました。其批評を呼んで評唱といひ、短評を名付けて著語と稱し、小序は即ち禪師が弟子を導かんが爲めに加ふるもので、之れを垂示といふてゐます。故に「碧巖錄」は、雪竇和尚の集めた本則と頌と、圓悟禪師の垂示と、著語と、評唱とを合したものであります。ところが圓悟禪師の法嗣に大慧宗杲禪師といふ人があつたが、此師又法中の英傑で、不立文字宗に文字は不要だといふて、折角の「碧巖錄」を爐中に投じて了つた。其後燻餘の稿を整へた者がありまして、今日に傳はつたのであるといふてあります。序辯は此位に止めて置いて、本文に移ることゝします。

編者曰く、大慧宗杲は、姓は奚氏、宣州の人で、十歳にして郷校に入り、一日嘆じて曰く「大丈夫世間の書を讀む、曷んぞ出世の法に若かんや」と、東山の慧雲院に入り、十七歳にして薙髮し、寶峰に湛堂準に謁して侍者と爲つた。湛堂威後、天寧に圓悟禪師に見えて大悟し、分座説法した。これより名聲高く、右丞相呂公の奏に依りて、紫衣及び佛日の號を賜ひ、次いで吳の虎丘に赴いた。圓悟禪師が雲居山に住するや、赴いて第一座と爲つ

た。閩に入り、庵を長樂の洋嶼に創め、又小溪の雲門庵に移つた。魏公の命に依りて徑山に住したが、道法盛んにして樂常に二千餘人に及んだと。故ありて衡州に竄せらるゝこと十年、此間『正法眼藏』六卷を撰した。尙ほ梅州に移り、孝宗帝時に恩赦あり、後朝命に依りて育王に居し徑山と改めた。孝宗帝が未だ普安王たりし時、相見して大いに歡び、妙喜庵と書して讚を制し給ひ、帝位に即くに至り、大慧禪師の號を賜ふた。南宋の孝宗帝隆興元年八月、病に罹り九日に示寂した、歳七十五、普覺禪師と諡された。師は一生涯極力曹洞の禪風を排撃し、『默照の邪禪、佛の慧命を斷ず』と絶叫した。蓋し『悟禪師の禪が、一時に振ひしは實に其力であつた。併し曹洞門下では、禪師の門風を罵りて看話禪といひ、互に相争ふに至つたのである。

第一則 武帝對達磨

垂示云、隔山見煙、早知是火、隔牆見角、便知是牛。舉一明三、目機銖兩、是納僧家尋常茶飯、至於截斷衆流、東湧西沒、逆順縱橫、與奪自在、正當恁麼時、且道是什麼人行履處、看取雪竇葛藤。

(訓讀) 垂示に云く、山を隔て、煙を見て早く是れ火なることを知り、牆を隔て、角を見て、便ち是れ牛なることを知る。舉一明三、目機銖兩、是れ納僧家尋常の茶飯。衆流を截斷するに至つては東湧西沒、逆順縱橫、與奪自在なり。正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。雪竇の葛藤を看取せよ。

(講說) 初めに圓悟禪師の垂示、垂示とは言ふまでもなく、其門下に示す爲めに垂教した所の語で『山を隔て、煙を見て早く是れ火なることを知り、牆を隔て、角を見て便ち是れ牛なることを知る』の二句は『涅槃經』に出づる所の譬へに依つて造句したのであります。凡そ見ると云ふことに就いて

二種の見があります。一は相貌見で、二は了々見であります。相貌見と云ふのは、吾々の見る所と同じく、肉眼を以て物質界を見ることで、了々見と云ふのは、肉眼以上の見であつて、心眼を以て廣く一切を了見することでありませう。山を隔て、煙を見て早く是れ火なることを知る。之れは今日吾々の行つて居る所で、あれ煙が立つ、必定火事であらうと推量する。牆を隔て、角を見て、便ち是れ牛なることを知る。今窓前に角が見えた、牛車を通るのであると推量する。随分機轉の利いた者だがまだ、浅い。「學一明三目機銖兩」一隅を示せば三隅を明らむ、一を聞いて十を推すと云ふこと。目機は目分量と云ふほどのこと、一と目見たばかりで、これは銖、彼れは兩と分る、正札なくとも、これは十錢、彼れは一圓と分る、秤にかけずとも目分量で分ると云ふこと、之れも随分伶俐な徒ではあるが「是れ衲僧家尋常の茶飯」ぢや。衲は破れ衣破れ袈裟のことで、衲僧家は總て禪宗坊主の通稱。學一明三目機銖兩は目敏いは目敏いが、こんなことは禪宗坊主は、朝飯前の御茶の子ぢや。推理や想像で行くことは世の常ぢや。「衆流を截斷するに至つては、東湧西没、逆順縱横、與奪自在」衆流とは眞如法性の一源に對した語で、現象界差別の相狀ぢや。之れを大分すれば佛界、菩薩、聲聞、緣覺、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の十界あれど、これを細分すれば無量無邊の差別がある。此無限の差別界衆流を截斷と斷ち截つて了へば、超然絶對の境である。超然絶對であるから、西かと思れば早や東に現はれ、上かと思へば下、順も逆も與も奪も、縱横自在の如くである。吾々に於ても敢て

爲し難きに非ざることだが、所謂百姓は日々に用ひて之れを知らずと云ふ底ぢや。「正當恁麼の時且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ」サア斯うなつた時は如何、是れ如何なる人の行動履踐ぞ。誰れが此與奪自在の主人公たり得るぞ。「雪竇の葛藤を看取せよ」先づ雪竇老人の葛藤があるから看よ。葛藤は言句文字を云ふのでありますが、未透の者には葛藤なり、又荆棘と云ふべし。葛藤は時とする老松をも枯死せしむる。此活佛法を枯死せしむるのも、言句文字の葛藤ぢや。近時は哲學だとか云ふやうな、西洋種の葛藤もあるぞ。先づ雪竇は何んと言つたか。

舉、梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義。磨云。廓然無聖。帝曰。對朕者誰。磨云。不識。帝不契。達磨遂渡江至魏。帝後舉問志公。志公云。陛下還識此人否。帝云。不識。志公云。此是觀音大士。傳佛心印。帝悔遂遣使去請。志公云。莫道陛下發使去取。闔國人去。佗亦不回。

(訓讀) 舉す、梁の武帝達磨大師に問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く廓然無聖。帝云く朕に對する者は誰ぞ。磨云く不識。帝契はず。達磨遂に江を渡りて魏に至る。帝後舉して志公に問ふ。志公云く、陛下還つて此の人を知るや否や。帝云く不識、志公云く、此れは是れ觀音大士佛心印を

傳ふ。帝悔いて遂に使を遣して去つて請ぜしむ。志公云く、道ふこと莫れ、陛下使を發し去つて取らむと。闔國人去るも佗亦回らず。

(講説) 梁の武帝は佛教信者として既に其名が轟いて居ます。今南史に依つて少しく武帝の性行を述べやう。梁の高祖武帝、諱は衍、字は叔達、姓は蕭氏、臨沂の人なり。帝生れた時異光有つて耀き状貌殊特であつた。又其舌に八の字が明かに現はれ、右の手には武の字を文なして居た。又幼にして空を踏んで歩行したとありますが、如何にも殊勝な歩き方であつたであらう。大極殿に於て即位式を行ふてより後は、常に六龍有つて各一柱を守り、神奇異瑞が多かつたと云ふ。實に書契あつてより以來、未だ曾て人君に有らざる所と稱讃されて居る。幼にして學を好み、六藝並びに精微を盡くすと。大位に登つた後萬機多務であつたにも拘らず、猶ほ手に卷を放たず、通史六百卷、金海三十卷、五經義注講疏等合せて二百餘卷の著述があるが之れだけでも武帝の非凡なことは分るでありませう。晩年に至つて佛道を信奉し、日に一食に止め、膳に鮮腹無く、只豆羹糲飯あるのみであつたと。「涅槃經」「大品般若經」「維摩經」等の註疏を造ること數百卷。又聽覽の餘暇には重雲殿同泰寺に於て諸經論を講述せられ、名僧碩學參議百官等皆之れを聞いたのである。帝常に布衣を著し、一冠三載、一被二年一つの冠で三年も通し、一枚の衣で二年も用ひると云ふ儉約質素、年五十より後は房室を斷ち、酒を飲まず、音樂を聽かず。唯宗廟祭祀の時のみ樂を奏すと。小殿暗室に居る時と雖も、衣冠を理へ大暑

の節と雖も未だ曾て褰袒せず。内豎小臣をも嚴賓を遇する如く、叮嚀深切禮儀を重んぜられたと云ふ。武帝のことは是れだけにして他は略するが、これを以つても其平生を窺ふに足るでありませう。次に達磨大士の事も一言陳べて置かねばならぬ。尤も達磨大士の方は、多少其面目を知られて居るから、震旦渡來前の事を少しく言はう。達磨大士は南印度香至國第三の王子にして、姓は刹帝利、名は菩提多羅と云ふ。第二十七祖般若多羅尊者行化して此國に至りし時、其王無價の寶珠を般若多羅に布施されました。すると尊者は三王子に對して其所得を試みんと欲し、布施された寶珠を示して問うたのであります。曰く

「此の珠圓明であるが、能くこれに及ぶ物ありや否や。」
と。第一、第二の王子曰く

「これは之れ無價の寶珠にして、亦これに及ぶべき物なし。」
と。然るに第三王子たる師は

「これは是れ世寶なり、未だ上とするに足らず、諸寶中法寶を上となす。これは是れ世光なり、未だ上とするに足らず、諸光中智光を上と爲す。これは是れ世明なり、未だ上とするに足らず、諸明中心明を以つて上となす。」
と。何んたる解答ぞや、僅に當年七歳の童子が答辯とも思はれませぬ、豈に大人と雖も能く此の如

き明答を提起し得る者あらうか。尊者其辯慧に驚歎し、請ふて資となし、名を改めて菩提達磨と云ふ。師般若多羅尊者に師事すること四十年一日の如かつた。尊者順世に追んで後、印度の布教は同門に譲り、自ら震旦の機縁熟し、行化の時正に到れるを念ひ、決然震旦渡航のことを定め、祖塔を辭し、同學に別れ、王所に至つて告別するに、王悲涙して曰く、

「惟願くは父母の國を忘れざれ。」

と。王即ち大船を具へ、衆寶を載せ、躬ら臣僚を率ゐて送られたのであります。師海を渡つて支那南部に達し、此處に上陸せられた。時に梁の普通元年九月二十一日でありました。廣州の刺史主禮を具して迎へ、之れを皇帝に表聞しました。其處で帝詔を齎して迎へ請せしむ。實に之れ大通元年十月二日のことでありました。佛教篤信の武帝、此新來の印度僧を招聘して、大に嶄新なる教法を聞かんと欲したのであります。梁の武帝達磨大師に問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義。佛法には眞諦門と俗諦門とある。所謂世間門と出世間門と、即ち非有を明かにする一面と、非無を明かにする一面との両面がある。然し此兩面は表裏不離の關係であるから、兩面取り離すことが能きぬ。夫れを取り離して居る間は、未だ皮相の見ぢや。此兩面不離の境、超然として此兩面を撤回した所が聖諦第一義であります。此境を得るには十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺と云ふ五十二位の階段があつて、ドエライものである。流石は梁の武帝ぢや、如何なるか是れ聖諦第一義、佛法ギリ／＼の所を承

りたいと言はれた。「磨云く廓然無聖」透き通つたものだ、障礙物なら塵一つ無いぞ、聖なく凡なく淨裸々赤洒々ぢや。これ等は字義上で言ふても駄目ぢや、文字言句は、之れ閑葛藤。人々の工夫一番を要す、眞參實究の後之れを證得すべし、磨云く「廓然無聖」實にサラリとしたもので御座ると答へた。「帝云く朕に對する者は誰ぞ」我が前に立つ者は誰れぞ、武帝もまだ芥が取れぬわい、無聖に附いて廻つて居ます。對面千里を隔つぢや。「磨云く不識」と迅雷耳を掩ふに及ばずぢや、此語實に重きこと千斤。先師洪川和尚の著語に曰く「話盡山雲海月情」と。又曰く「和盤托出夜明珠」と。「帝契はず」達磨の答が餘りに意表外であつたから、帝呆然たりぢや。「磨遂に江を渡つて魏に至る」武帝が我れに復へつた時分は、達磨は既に楊子江を渡つて魏に在りぢや。達磨は之れより嵩山の少林寺に入つて、面壁九年で人を驚すのであります。「帝後舉して志公に問ふ」此處で又志公の事を言はねばならぬ。志公諱は寶誌、金陵の人で、宋の元喜の末に東陽市古木の上、鷹巢の中に居つた。朱氏の婦、水を汲んで巢中嬰兒の啼くを聞き、遂に取つて之を育ふ。故に朱氏を以つて姓として居た。後此因縁で朱氏の宅を改めて寺とし寶林寺と呼んだ。師鏡容鳥爪凡童に類せず、七歳にして出家し道林寺に入つて法儉を師とした。禪業を修習し坐すれば旬日を逾えると云ふ。宋太始の初めに此寺を辭し、雲縱鳥跡、居止不定、常に錫杖を持つて居るが、其上に小刀、手拭、拂子、鏡帛、何と言ふことなしに、一切の所帶道具を懸けて置く、之れが一切の財産なので、常に跣足で、何んでも食ひ、何んでも飲む、髪は長

く肩に垂れ。數日食はざるも飢容なく、一日數食するも飽態なし、便利な體であります。時に詩を賦して人に與へるけれど、其語讖の如くで曉り難い、然し其語は後になると符合した驗があると云ふやうな奇蹟がある。此奇蹟と云ふことも強ち斥けられぬ。其他種々奇蹟を有つて居る。齊の武帝、師が衆を惑はすと云ふ廉を以つて獄を投じた。翌日獄吏市に出づれば、師は市中を徘徊す、怪しみ還つて獄を尋ねれば、師は儼然として居つたといふ奇蹟もあります。又一日獄吏に告ぐ、

『門外に食二車あつて金鉢に盛り、汝我が爲に之れを取れ。』

と。果して齊の文惠太子と龍陵王子とより食餉を送つて来て、其語の通りであつた。獄吏も餘り不可思議の異靈を目撃したから、之れを奏聞した。其處で帝師を内庭に迎へ、悔謝して尊敬し、以來後殿に居住せしめたといふことであります。大監十三年冬十二月、病を得て寂す。志公と云ふ人は、先づ斯んな具合であつた。『帝後學して志公に問ふ』武帝も流石に残り惜しい所があつたと見えて、達磨と問答の始末を、神變奇瑞の多い志公に尋ねられたのであります。『志公云く、陛下還て此人を識るや否や』武帝の問ひは、殆んど貧兒の舊債を思ふと云ふ様子であつたから、外さず志公中堅を突いた。陛下は一體達磨を知つて御座るが、借金抑も幾何かある。シタ、カ打たれた此一棒に、武帝もハツと思つて借金などは一文も無いと隠し立てをする。『帝云く不識。』磨云く不識、帝曰く不識、其語同じくして而かも相隔たること千萬里であります。帝云く不識、囚人悄然として法官の前に立つ底ぢや。どこ

までも隠し立てをするのを見透して『志公云く、此れは是れ觀音大士佛心印を傳ふ』陛下彼れを以つて普通の天竺坊主と思ひ給はされ、彼れは是れ實に觀音大士の垂迹で御座ると惡水を驀頭に濺いだ。武帝も觀音様と聞いて少し戀しくなつた。固より世間俗士であるから止むを得ない。ヤア然うであるかと今更のやうである。去り乍ら達磨大師こそ迷惑千萬、イヤな銘を打たれるより、胡國の一寒僧と言はれて欲しかつたであります。『帝悔いて遂に使を遣して去つて請せんとす』觀音様とは勿體ない使を遣つて喚び戻さうと云ふ騒ぎ。『志公云く、道ふこと莫れ、陛下使を發し去つて取らんと。』未練々々、そんな未練はお止めなさい。『闔國人去るも佗亦回らず』陛下は一體王者の力を以て、彼を呼び回さんとするか、假令百萬の軍を率ゐるも、そんな力で振り向く様な達磨でない。闔國の人去るも彼れ亦復び回へるまい、陛下スバリと斷念し給へ。と最後の一棒を武帝に加へて、達磨大師を須彌の頂上まで推し擧げて居るのが、即ち實誌志公であります。

聖諦廓然。何當辨的。對朕者誰。還云不識。因茲暗渡江。豈免生荆棘。闔國人追不再來。千古萬古空相憶。休相憶。清風匝地有何極。師顧視左右云。這裏還有祖師麼。自云有。喚來與老僧洗脚。

(訓讀) 聖諦廓然何ぞ當に辨すべき。朕に對する者は誰ぞ、還つて云く不識と。茲に因つて暗に江を渡る、豈に荆棘を生ずることを免れんや。闔國人追ふとも再來せず、千古萬古空く相憶ふ相憶ふことを休めよ。清風匝地何の極か有らん。師左右を顧視して云く、這裏還つて祖師有り麼。自云く有り。喚び來せ考僧が與めに洗脚せしめん。

(講説) 頌は偈頌とも頌古とも言ふが、詩に六體ある中の一體であります。然し普通の詩とは其趣を異にして居て、音に風流を叙するばかりでありませぬ、必ず宗旨の眼目を具足して居らなくてはならぬ。禪門では不立文字を宗として居て、別に文字を立てぬのであるが、文字を立てぬと言つたとて唯黙つてドン坐つて居るのが禪宗の本領ではない。夫れは無論眞理の極致に至つては、維摩も黙し、佛も語らぬのであるけれど、眞理を推究することもなく、唯頑石瓦礫の如くドン坐つて居つては所詮がない。故に古來公案も立つれば、垂示もする。評唱もすれば着語もする。頌も其の謂で出來て居るので、宇宙萬象の眞理を、自然の音樂の様に歌ひ出すのであります。故に如何なる頌でも此宗旨の眼目の具備して居らぬのではないのであります。而して此頌の如きは、碧巖百則中に於ても、最も力を竭した頌で、雪竇の力が充溢して居る。「聖諦廓然、何ぞ當に辨すべき、朕に對する者は誰ぞ、還つて云く不識」此の四句を見るに第一句と、第三句と、第四句とが、共に本則其儘を出したので、第二句のみは著語體に出來て居るのである。而して此第二句は上の一句と下の二句とに貫通し、又第一

句には問と答とを兼ね、第三と第四とに問と答とを分けてある、其造句の巧妙なる、凡人の倣ふことが能きぬ所でありませぬ。此四句で古則を十分頌出し盡して居ます。之れより後は其餘韻であります。圓悟は此頌を評して、大阿の寶劍を取つて振り廻す様なもので、如何にも痛快であると言つて居ます。如何なるか是れ聖諦第一義、磨曰く廓然無聖、其儘拈出して聖諦廓然といふ、問髪を入れざる様子で、其機合が實に電光石火の如くであります。雪竇が折角滿身の力を出して拈じた一句に對して、圓悟が鼻でフ、ンと挨拶つて居る有様の着語がある。「何ぞの辨すべき」武帝が百斤の鐵棒を大上段に振り翳して、佛法ギリ／＼の所如何と問ひ詰めたが、達磨はそんな物は毛の先ほども無いぞと一と箭を放つた。扱て其箭は果して何れへ落ちたであらう。其落ち所が解らぬだらう。武帝もキヨロツとして了つた。的は端的で、廓然無聖の端的が解るまいぞと第一句を承けて、第三句を起するのであります。「朕に對する者は誰ぞ、還つて云く不識」第三句も武帝と達磨の問答を其儘此處へ持ち出したが、其處が雪竇の手並であります。帝と達磨の言葉を、雪竇は自物の物にして自問自答の體に、古人の腹を見せてゐる。此處は多辯を用ひぬ「聖諦廓然、何ぞ當に辨すべき、朕に對する者は誰ぞ、還つて云く不識」と。之れだけで可い、著語も要らぬ、提唱も要らぬ、何が無くとも立派な頌古であつて又此の四句だけで足る。外には何にも言ふに及ばない。「茲に因て遂に江を渡る、豈荆棘を生ずることを免れんや」達磨大士は梁に停ること僅に十九日間のみ、武帝の未だ度し難く、機縁熟せざるを看破

するや、サツサと梁の國を辭し、楊子江を渡つて、北の方魏の國に赴き、嵩山の少林寺に入つたのであります。見送る者もなく歓迎するものもなく、唯だ獨り蕭然として行くのであります。遂に印度國より大法を宣傳せんが爲めに來り、而も纔に武帝と二三の往復問答を試みたばかりで、別に何等の弘教もなく、一葉の蘆に乗つて江を渡り山に入つたのであります。之れが抑も荆棘の初めであつて、以心傳心だの不立文字だの、或は坐禪だの、公案だのと云ふ荆棘を生じたのであります。一休和尚が

釋迦と云ふいたづら者が世に出で、

多くの人を迷はするかな

と言つた如く、何んだ釋迦などが生れて、小乗だの、大乘だの、實教だの、權教だの、或は頓だの慚だのと色々な事を言つたものだから、多くの人も迷はされて了つた、故に釋迦がギヤツと生れた其時に打ち殺して瘦せ犬にでも食はせて了へば、佛法だの禪宗だのと云ふ面倒も厄介もなかつたのにと云つて居る雲門大師すらあるのであります。今も其通りで、達磨のやうな厄介者が印度くんだりからノコノコやつて來て、而かも無功德だの無聖だの、不識だのと言ひ立つて、揚句の果ては黙つて去つて山に隠れるなんてことをするから、古則も出來てくるし、垂示も要るし、頌古も出來る。こんな下だらぬ納のやうな、提唱もせねばならぬやうになつて來るのであります。實に本則を初めとして、千七百の古則公案總て皆是れ荆棘ならざるはない、用心せざれば脚跟を損傷するのであらう。支那に於て

も五家七宗と分かれ、禪門系統甚だ複雑し、嘗に西天の四七、唐土の二三に止まらぬ。遠く我國までも其累を及ぼし、二十四流の禪と分れ、三國は荆棘の藪だらけである。「闔國人追ふとも再來せず」此第七句も本則その儘であるが、志公が彼れは之れ觀音大士と、達磨の廣告をしたので、武帝は漸く其の買ひ損じたのに氣付いたのであります。然し今更追ふは女々しいぢやないか。又國人を擧げて追つ駈けたとて、還つて來るやうな達磨でもない。「千古萬古空しく相憶ふ」で、古往今來未だ達磨を呼び戻す底の者もなく、徒らに蔭口を吐いて居るばかりだ、女々しき輩ばかりである。彼の朝顔とやらいふ盲婦が、大井川の川留めにあつて

「そりや聞えませぬ天道様」

と泣き口説いたやうなものであります。「相憶ふことを休めよ」此第九句は三字一句ぢや、此句に依つて舞臺は早變りギイツと廻はつて了ふ、背景も道具立ても凡て違つて了つた。流石の圓悟も聊か怪んで什麼と道ふぞと言つて居る、實に雪竇が芝居をやらせて居るやうなものだ。「清風匝地何の極まりかあらん」と、第十句になつては、全く別天地を見るの感があります、又雪竇の活禪活力を示して居る所でもあります。人間到る處青山ありて、三千世界清風明月のあらざる所あらんやぢや、何處へ行つても清風もあれば明月も懸つて居る。裏長屋の嬢も清風を得れば、五條橋下の乞食も明月を觀る。玄關も座敷も臺所も奥庭も、皆之れ達磨だらけなど、言つては露骨で妙趣がないが、清風匝地何の極か

あらむと言ふと餘裕があつて美しい。クヨク思ふな彼の赤鬚の達磨は嵩山に入つたけれど、天地山河は達磨だらけでゴロ／＼して居る。視聽嗅味一切達磨であるぞ。何んぞ知らむ雪竇自ら其達磨たることを。師左右を顧視して云く、這裏還つて祖師ありや。這の裏に達磨が居るか、居るなら出て来いと云ふ見幕。前には相憶ふことを休めよと言つて置きながら、雪竇自ら達磨の蹤を追つて居るのであります。故に圓悟禪師も、汝番款を待つ那、猶ほ這の去就を作すかと評して居るが、力ある評であります。番款は番は翻に音通じて翻款のことでもあります。而して款は罪人が裁判官の前で白状した時の書付のことでもあります。今雪竇も前の白状を翻して居るぞ、相憶ふことを休めよと言ひ、或は清風匝地何の極かあらむと言ひながら、今更達磨を追求するとは何んぞ、矢張り雪竇もこんな振舞をするのかと評したのであります。自ら云く有り、喚び來れ老僧の與めに洗脚せしめん。雪竇益々力んで居ます、達磨が居るぞ、引き出して來い、此老僧の足を洗はしてやるから連れて來いと云ふ。達磨に茶を汲ませると言ふも同じぢや。實に活禪であります。然しながら能く注意しなくてはならぬ。實に活禪活劇ではあるが、只其文字言句の上面ばかり見て居ては言句に捕へられて了ふ。雪竇はこれ丈け力み反つて居るのは、全く雪竇の全身達磨に成り切つて居るからであります。言々句々皆是れ達磨の肺腑から出て居るのであります。團十郎が石川五右衛門をする時は、古今の大惡漢たる石川五右衛門になり切つて了ふ。これに初めて觀客の感情を動かし惡き惡漢めと思はするのであります。何んでも其通

り釋迦を談する時は釋迦に爲り切り、達磨を語る時は達磨に爲り切らなくては話が活きない。今雪竇老人も全身之れ達磨に爲り切つて居るから何んと言つても敢へて達磨を貶黜したことはない、却つて達磨を高めて居るのであります。これが達磨に對しての孝道であります、これが其儘祖師への忠義であります。何んぞ其言句の上を以て誹謗の罪を加へんや。又唯た世間通途の芝居を觀て居る心地ではならぬ。聽く者も眞個達磨に爲り、雪竇に爲り、初めて廓然無聖を悟る事が能きるのであります。古徳達磨大士を評して曰く

「吾が祖の中國に入るや初より放光動地の祥なく、亦雨法如雲の益なく、又世に俯仰の事なし。當時之れを望んで指して壁觀婆羅門と爲すに過ぎず。空拳を奮つて實効を求むるに及んでは、有獲の力、孟賁の勇有るも、百の摩騰竺法蘭と雖も、爾く較べざるなり。」

と。實に然り。達磨震旦に來るも、一武帝を化し得ずして少林山に入つて了ひ、而かも九年間もドン坐つて爲す無きを見た當時の者は、彼れは壁觀婆羅門であると謂つて嘲けたのであります。然しながら彼れは空拳を揮つて實効を擧げて居るのであります。九年間かゝつて漸く一人の求道熱烈なる慧可を獲たではありませぬか、摩騰や竺法蘭は佛法を支那に傳へた効少しとしないけれど、百の摩騰、竺法蘭があつても、達磨一人の効には及ばないのであります。何んでも禪宗と云ふと、一喝を吐いたり、三十棒を振つたりすれば、それで事十分と思ふ者があるが、禪宗には一喝も要らぬ、三十棒も要

らぬ、空拳くうけんでよろしい。棒喝ぼうかくは只ただ之これれ方便ほうべん警策けいさくである、實じつは空拳くうけんでよろしい。然しかしながら此この空拳くうけんを揮ふらば須彌しゆみをも動うごかし得えべき空拳くうけんを有もたねばならぬ。即すなはち一面いめんに於おいて實行じつぎやうの伴ともはない空拳くうけんでは、塵ちり一つ動うごかすことが能できぬ。宜よろしく空拳くうけんを揮ふるつて實効じつかうを求もとむべきであります。今いまの禪ぜんを求もとむる者は、實効じつかうの添そはざる空拳くうけんではならぬ。之これが抑おさも危険きけんなので、往々むろく淺草公園あさくさこうえんなどで空拳くうけんを奮ふるふ活劇くわくぎを新聞しんぶんで認みめる。今いま此この雪竇せつどうの頌古しやうこを看みよ。雪竇老人せつどうらうじん亦また空拳くうけんを奮ふるつて居ゐます、達磨だつまも驚おどろかさざるを得えまい。去さりながら之これれ亦また、淺草公園遊徒あさくさこうえんゆうとの空拳くうけんと同日どうじつでない。這裏しやうり還かへつて祖師そし有りや、有り、喚よび來きたつて老僧らうそうが爲ために洗脚せんきゃくせしめん。

第二則 趙州至道無難

垂示云。乾坤窄、日月星辰一時黑。直饒棒如雨點、喝似雷奔。也未當得向上宗乘中事。設使三世諸佛、只可自知、歷代祖師、全提不起。一大藏教、詮註不及、明眼衲僧、自救不了。到這裏作麼生請益。道箇佛字、拖泥帶水。道箇禪字、滿面慚惶。久參上士、不待言之、後學初機、直須究取。

(訓讀) 垂示に云く、乾坤窄く、日月星辰一時に黒し。直饒棒雨點の如く、喝雷奔に似たるも、也未だ向上宗乘中の事に當得せず。設使三世の諸佛も、只自知す可く、歴代の祖師も全提不起、一大藏教も詮註し及ぼさず、明眼の衲僧も自救不了。這裏に到つて作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも拖泥帶水。箇の禪の字を道ふも、滿面慚惶。久參の上士は之れを言ふことを待たず、後學初機は直に究取すべし。

(講說) 第二則は趙州至道無難の一則で、宗門上に於ても大切に居ます。元來趙州和尚と云

へば、八十歳まで行脚したと云ふ程ありまして、古徳中に於ても、宗旨を現はす言句に最も圓熟して居るのであります。敢て一喝を用ひず、三十棒を加へず、而かも能く其言句を以て擧揚するのであります。故に其提唱も、他師と大いに異なり、一種の異彩を放つて居ます。傳は「五灯會元」に載せてあるから、委しい事は傳に就いて調べるが可い。先づ趙州和尚、南泉入門の一話を以て、其全般を推知するが可い。趙州初め南泉和尚に參ず、時に南泉和尚は偃息して居つた、安樂椅子か何かに倚つて、休息すると云ふ有様。和尚問ふて曰く
「近離麼の處ぞ。」
何處から御座つた、州曰く

「瑞像。」

瑞像と云ふは、日本で云へば奈良の大佛のやうな處、鎌倉でも可い、奈良から來ましたと答へました。和尚曰く

「還つて瑞像を見るや。」

鎌倉の大佛を見て來たかと問ひ返された。州其時、

「瑞像を見ず、祇臥如來を見る。」

とやつた。常人には答へられぬことぢや、奈良の大佛は見ませんが、今此現前に臥佛を見ます。すら

すらと答へた、豫め考へて置いた答でない。南泉和尚も此答に一寸と驚いたと見え、ムク／＼と起き上り

「汝は是れ有主の沙彌か、無主の沙彌か」

師匠があるか、無いかと問ふ。州曰く、

「有主の沙彌。」

和尚曰く

「那箇か是れ彌が主」

趙州合掌禮して曰く

「仲冬嚴寒伏して惟れば、和尚尊候萬福。」

と答へた。實に驚くべしだ、師匠は誰かと問はれたのに、却つて南泉和尚の健康を祈つて居ます。南泉和尚も此小僧は法器であると見込んで、入室を許されたと云ふ一話があります。或る時趙州南泉和尚に問ふて曰く

「如何なるか是れ道。」

和尚曰く

「平帝心是れ道。」

「道は遠きに求むべからず、喫茶喫飯是れ道。」
と。州曰く

「還て趣向すべきや、得て求むべきや。」

と。和尚曰く

「向はんと擬すれば即ち乖く。」

捉へんと欲すれば即ち逃ぐ、坐禪しやうと思へば、心坐禪にあらずで、道に向はんとすれば道に背くと。趙州曰く

「擬せざれば争か是れ道を知らん。」

求めざれば道も得ようが有りますまい。和尚曰く

「道は知にも屬せず、不知にも屬せず、知は是れ妄覺、不知は是れ無記、若し眞に不疑の道に達すれば、猶ほ大虚の廓然蕩豁たるが如し、豈強て是非せんや。」

と。趙州も却々理窟を以つて喰つてかゝつたから、和尚最後に、知は是れ妄覺、理窟は駄目ぢや、理窟で立てたものは理窟で破壊される、妄覺は頼むべからず。不知は何うか、之れも無記で、洞穴の暗黒の如しぢや。知不知に屬せずして、眞實大信心底より得たる大道にあらざれば駄目ぢや。若し眞實不疑の大道に到達すれば、寔に大空のやうなもので、曠くして際涯なく何れの時何れの處にも遍満實

在すると接得されました。趙州も此語に於て大悟したと云ふことであります。後衆の請ひに依つて趙州の觀音院に住した、依つて趙州と呼ぶ、諱は從諱曹州郝郷の人。唐の乾寧四年十一月二日、右脇にして圓寂す、時に年百廿歳、諡して眞際大師と云ふのであります。「垂示に云く、乾坤窄く、日月星辰一時に黒し」禪宗では敢て奇言を弄び、寓語を好むのでない、文字言句は之れカスで眞意の存する所を抽取すべしぢや。殊に垂示などは當なしには言ふて居らぬ、本則は的として放つ箭であります。先づ大なる活眼を開いて觀よ、此天地乾坤、無邊底の大字宙も、芥子粒程も無いぞ。日月星辰大明一時に暗黒となつて了ふ。地球上でも晝夜は同時に存す、半面明なれば半面暗なりと云ふが、それ位のことでない。明即暗、暗即明ぢや、明暗一時に到る境界ぢや。柳は緑、花は紅と見るは常のこと、柳は緑ならず、花亦紅ならず、男剛ならず、女柔ならずと云ふ有様、向上宗乗中の事は實に絶待無限大で亦無限明であるぞ。「直饒棒雨點の如く、喝雷奔に似たるも、也た未だ向上宗乗中の事に當得せず」其廣大なる大光明を言ひ現はさんとして言葉盡き、徳山の三十棒を飛雨の如くに振り廻しても駄目なこと。臨濟和尚の眞似をして、大口開いてカーイツとやつても駄目なこと。こんなことでは向上宗乗中の事は得られない。「設使三世の諸佛も只自知すべし」三世三千の諸佛がズラリと居竝らんでも、石佛と同じこと、口以て説くべからず、以心傳心、只自知自得するばかり、教へることも、説くことも能きぬ。實に不可説不可言ぢや。「歴代の祖師も全提不起」此向上の宗乗ばかりは、歴代の祖師強力

なりと言ふも、其儘提げやうとしても力及ばず、起つことができぬ。『一大藏教も詮註し及ぼさず』釋迦の説教一代五千餘卷、經律論の三藏に、縦説横説到れり盡せりと教相家は喜ぶけれど、一代の説法も詮註及ぼさず、文字言句は未顯眞實、我が向上の宗乘はそんな上では現はし盡されない。『明眼の衲僧も自救不了』況んや明眼など自惚れた坊様などをや、自ら自らを救はず、何んぞ却つて他人を救はんやぢや。『這裏に到つて作麼生か請益せん』此場になつては何うしたものぢや。請益と云ふ語は『論語』から出て居ます、教示を請ふと云ふ意味、一轉して質問論究と云ふ意味に爲つた。さア此場合に立ち到つては、研究も何うしたらよいか。『箇の佛の字を道ふも拖泥帶水』何んぞと云へば佛だの菩薩だの、眞如だの法界だの、絶待だとか實在だとか言ひたがるが、佛のブの字でも口に出したら口が汚される。拖泥は泥を引くこと、帶水は水を引きかぶること、泥水を頭下しに引き被ぶつて居るやうな鹽梅で、觀るに忍びない。『箇の禪の字を道ふも、滿面慚惶』禪の字を言ひ出して同じこと、言句の及ぶ所でない。若し言ひ出せば赤ツ恥をか、ねばならぬぞ。『久參の士は之れを言ふことを待たず』久しく向上宗乘中のことに參究證得した上々根の士は、言ふに當らぬ、合點であらうが。『後學の初機は直に須く究取すべし』後學初心の根機は、直ちに宗乘を實究せよ、言句に泥まらず、理窟に陥らず懸命以て進め、其處に趙州至道無難の門戸があるぞ。

舉趙州示衆云、至道無難、唯嫌揀擇。纔有語言、是揀擇、是明白。老僧不在明白裏。是汝還護惜、也無。時有僧問、既不在明白裏、護惜箇什麼。州云、我亦不知。僧云、和尚既不知、爲什麼却道不在明白裏。州云、問事即得、禮拜了退。

(訓讀) 舉す、趙州衆に示して云く、至道無難、唯揀擇を嫌ふ。纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在らず、是汝還つて護惜すや、也た無や。時に僧在り問ふ、既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。州曰く、我も亦知らず。僧云く、和尚既に知らず、什麼としてか却て道ふ、明白裏に在らずと。州云く、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退け。

(講説) 『趙州衆に示して曰く、至道無難、唯揀擇を嫌ふ纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白』本則は實に容易ならぬ一則であります。依つて雪竇も碧巖第五十七則五十八則と、重ねて三度まで提唱して居ます。今此容易ならざる一則に對して辯を加へ語言を施すは、全く蛇足であるけれど、さりとて之れも亦已むを得ざることに、言句は之れ方便、決して言句に泥んではならぬ、四句百非を離れた所に妙味がある。扱て此至道無難は敢て趙州の新發明ではありませぬ。これは第三祖鑑智禪師が『信心銘』の中に述べられたのが最初であります。其文に四句あつて



『至道無難、唯嫌二揀擇、但無二憎愛、洞然明白。』

と述べて居るが、今其二句を出して、後二句は趙州の言葉中に含まれて了つた。固より趙州は此至道無難を鑑智禪師から盗み取つたのでもなければ、一時借り來つたのでもない、全く趙州自己の物として、其臍腑中より取り出したのであります。至道は至極の大道、即ち向上の宗乗ぢや。迷悟染淨、生死去來を離れた大道ぢや。坐臥動靜、折旋俯仰を貫く眞理の當體である。無理は即ち無易で此森羅の現象界に往來して居る眞理は然かく困難なことではない、唯眞實ありのまゝである。揀擇は何れもえらび取ると云ふ字で、迷を去つて悟を求め、煩惱を斷じて涅槃を證する、之れが抑も揀擇である。花は紅なら紅のまゝ、柳は綠なら綠のまゝ、敢て揀擇を用ひて、差別しない、相對して是非善惡美醜好惡を言はないのである。『纔に語言あれば、是れ揀擇、是れ明白』揀擇は差別、明白は平等、差別と平等。纔に語言を加へ、佛のホの字を言つても、揀擇か明白に墮する。一念起り來れば、其處に必ず揀擇存し、明白起るのである。明白のことを白隱和尚は『乞食歌』に

『好きも悪きも皆打すて、木地の白地で月日を送れ、障りや濁るぞ溪河の水、問ふな學ぶな手出しをするな。是れがまことの禪法だほどに、見ぬが佛ぞ知らぬが神よ。』

等と言つて居られます。尤も禪門の修行者に、二つの病弊があつて、一を昏沈病と云ひ、二を散亂病と云つて居ます。今吾々の知慮分別を加へれば、眞に此病に羅つて、揀擇だとか、明白だとか、やれ

差別だとか平等だとか分けて、其何れかに墮落するのであります。『老僧は明白裏に在らず』揀擇と明白とを比較すれば、明白が可いと思ふは普通であるけれど、此趙州老僧は明白には居らぬぞ、と澄ました顔で言つて居る。若し之れに著語すれば、

『金龍は寒潭を守らず。』

と云ふべきぢや。『是れ汝還て護惜するや、也た無きや』大衆汝此明白を護惜し大切にするかどうぢや。唯之れを一の網である、釣針であるとのみ見ては不可ぬが、それでも此網にかゝり、此針に釣り上げられた者がある。『時に僧ありて問ふ、既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん』大衆中にスツと起つた一僧がある、理窟を以て趙州和尚に喰つてかゝつた。既に和尚明白裏に在らずと言はるゝでないか、其處には護惜すべき者のあらう道理がない、何をか求め何をか惜まん。和尚平然として云く『我も亦知らず』そりや私も知らぬと平氣なもので濟し込んで居る。此理窟屋の一僧却々承知すればこそ『和尚既に知らずんば、什麼としてか却つて、明白裏に在らずと道ふ』かと益々理窟を以て詰め寄るのである。和尚知らぬと言はれるが、知らぬなら何故老僧は明白裏に在らずと言はれたのである、一向合點がいかねと問ひ詰める。趙州は老練だけあつて『事を問ふことは即ち得たり、禮拜して退け』と云はれた。一寸其僧を批評すれば『天上の月を貪り見て掌中の珠を失却す』とでも言ふべきか。和尚云く、問ふだけ問ふたら引つ込め引つ込め、要するに至道は無難であるし、又無易である。

揀擇の差別見を以てするも當らず、明白の平等見を以てするも當らない。差別平等を超越したところ
でなくてはならぬ、それから室内の調べごとぢや。

至道無難、言端語端、一有多種、二無兩般。天際日上下、檻前山深水寒、鬪
體識盡喜何立、枯木龍吟銷未乾、揀擇明白君自看。

(訓讀) 至道無難、言端語端、一に多種あり、二に兩般無し。天際日上れば月下り、檻前山深けれ
ば水寒し。鬪體識盡きて喜何ぞ立せん、枯木龍吟銷して未だ乾かず、揀擇明白君自ら看よ。

(講説) 此頌も雪竇の力で、本則の眼目要語を其儘持ち來たして第一句に置いてあります「至道無
難」春來れば百花自ら開き、秋至れば萬木葉落す、揀擇の風波も無ければ、明白の太平も無しと云
ふ有様。而かも至道其處に塞がつて古今不改東西不變ぢや。圓悟著語して曰く「三重の公案」と、三
祖大師の至道無難を持ち來たして衆に示せしは、趙州和尚、趙州の示した語を再び持ち出したのは雪
竇禪師、之れ三重の公案ぢや、然し満口に霜を含むで、三人は三人とも、言はんとして言ひ得ず。示
さんとして示し得ず。然し趙州も雪竇も三祖大師の口吻を眞似て居るのでない。各々自己の胸襟より
流出し、將ち來たしてゐる、皆之れ其心血である「言端語端」端は正なり、一字一句皆千金の價値あ

りぢや、片言隻語皆な至道の端的ならぬものはない。春花秋葉風雨雪霜に至るまで、至道の端的なら
ぬものはない、此處が雪竇の力であります。趙州は纔に語言あれば揀擇明白と言つたのを、反對に言
端語端總て至道の端的と言ふ。「一に多種あり」一は明白平等で多種は揀擇差別であつて、一即三、三
即一、平等即差別、差別即平等と云ふことぢやが、之れも理論的で面白く無い。總て語句に示し、文
字に表はすと力が抜ける、言語文字は丁度冷飯のやうなものぢや。衲共の様な者が提唱しても、其提
唱の筆記を後で見ると、冷飯のやうに思はれてならぬ。然し人に示すには、此冷飯も已むを得ない、
唯此冷飯を以て無上の珍膳としてはならぬ。一に多種あり、一に無量を具し、無量中に一を具す「二
に兩般無し」多種無量と言へば直ぐ揀擇するから、二と云ふても兩般がないぞと斷はつた、一多の境
は如々であるぞと注意した、深切過ぎて馬鹿氣で居る。既に至道至難で公案は濟んで居るのに、雪竇
は若干の葛藤を加へました。「天際日上れば月下る」鶏聲遠く聞ゆれば、乾坤眠りより覺めて東天忽ち
紅なりとでも言はうか、至極の大道觀面に現る。惟れ揀擇底か惟れ明白底か、こんな事を言つても
偈中の眞意は現はれない、偈は矢張吟じて居るが一番よい。講釋では迂遠ぢや、砂糖の味は嘗めて知
れ。檻前山深ければ水寒し」此句も前句と同意ぢや。天際と云ふと大に聞え、檻前と云へば手近いけ
れど、至道の端的は此山深水寒の四字でゾツとする。「鬪體識盡きて喜何ぞ立せん」此句に就いては古
人の問答も少くはない、評中にも擧げてあるから披いて見て置くがよい。句の意は識即ち俗に所謂

魂が無くなつた體には、喜怒哀樂の情もないと云ふことぢやが、これでは未だ解るまい。つまり此句は大死一番の境界を云ふたのぢや。虎穴に入らざれば虎兒を得ず、死地に陥らざれば大活なし。ボンヤリ者では駄目である。古人の古則公案を百萬陀羅看でも、九年十年の坐禪をしても、大死一番の境迄進まなければ、大活現前せず、究め究め盡して其奥に大光明あるを認むるのであります。古則公案の古道具を弄る斗りなら、市中骨董舖の主人と更に擇ぶ所がない。須らく大死一番の境に至つて、大活現前せしめよ。『枯木龍吟鎖して未だ乾かず』此句は正しく大活現前の有様で、枯木の中から龍が吼え出した。所謂枯木に花ぢや。先師洪川評して云く

『有多種の二句は至道を頌し、天際云々の二句は無難を頌し、體體云々の二句は揀擇を頌す。一あれは二生じ、二あれば三を生ず。萬般の事紛々として生じ、諸法實相と現れる。又萬般事物の上に至道無難の體、唯嫌揀擇の徳は隠し得ぬぢや。』

と。難々二字で一句であるが、今までは三祖も趙州竇も雪も、皆な至道無難と言ひ來つたのに、雪竇此處に至つて槍頭を捩轉して難々と切つて放した難々、實に大難であるぞと云ふ。『揀擇明白自ら看よ』結句甚だ力あり、此一句で從頭の八句を一串に穿却した其意は揀擇底明白何れを取るも勝手次第ぢや。取る者は自ら手を出して取れ、看る者は自ら眼を開いて看よ、自分々々の力次第ぢや。此頌古は却々八釜敷いから、評の方も看て置くが可い、ゴテ／＼言ふのは止めて置く。

第三則 馬大師不安

垂示云、一機一境、一言一句、且圖有箇入處、好肉上剗瘡成窠成窟。大用現前不存軌則、且圖知有向上事、蓋天蓋地、又摸索不着。恁麼也得、不恁麼也得、太孤危生。不涉二途如何即是、請試學看。

(訓讀) 垂示に云く一機一境、一言一句、且く箇の入處あることを圖る、好肉上に瘡を剗る窠と成し窟と成す。大用現前軌則を存せず、且く向上の事有るを知らしめんことを圖る、蓋天蓋地又摸索不着。恁麼も也得たり不恁麼も也得たり、太孤危生。恁麼も也得ず、不恁麼も也得ず、太孤危生。二途に涉らず、如何が即ち是ならむ、請ふ試に學す看よ。

(講說) 第三に馬大師不安の一則。馬大師の傳は『會元』に載せてあるが、此馬大師は我が禪宗に於ては、忘るべからざる所の一人であります。即ち我が禪門法燈の上に於ても、西天の四七、唐土の

二三と謂つて、印度では釋迦より數へて二十八祖、支那にては達磨大士より第六祖慧能禪師に至る間は、其嫡々相承する様子が、一器の水を一器に移すが如くであつて、恰も大道坦々として砥の如しと云はるか、春の海波穩かにして漁翁舟に眠る底で、極めて、平和なるものであつた。然るに六祖門下に於て南岳、石頭の兩雄現はれ、又南岳下に於ては平時に波瀾を起すが如く、勃如として、活禪風を興したのであります。即ち南岳門下の馬大師は所謂馬駒踏殺天下人で八十餘員の善知識を叩き出した如きは、吾が宗史上特筆大書すべきことであります。斯る歴史上の問題を攻究するも興味ある問題であるけれど、今は其方面まで談じて居られぬ。扱て馬大師諱は道一、江西に住す。俗姓は馬氏、故に時人其徳を稱して馬大師と云ふ。漢州什邡縣の人、本昌羅漢寺に於て出家す。容貌奇異、牛の如く行き、虎の如く視る、其舌を出せば鼻を過ぐと云ふ。初め律を修め、後禪門に入り、衡岳山中に於て座禪を行つて居た。偶々南岳讓和尚此衡岳山の般若寺に錫を留め、山中多年座禪工夫する者があると聞きて、一日其僧即ち馬大師を尋ねた。和尚問ふて曰く、

「大德坐禪して甚麼をか圖る。」

と。馬大師答ふ、

「作佛を圖る。」

と。和尚乃ち一片の輓を取つて、彼れが庵前の石上で磨いた。馬大師怪みて問ふ、

「磨して甚麼をか作す。」

と。大師曰く、

「磨して鏡と作さん。」

と。馬曰く、

「磨するも輓豈に鏡と成ることを得んや。」

和尚曰く、

「輓既に鏡と成らずんば、坐禪豈に作佛を得んや。」

馬大師多年の修行坐禪も是に於てか破れんとするので、所謂死水に波を立つとは此事であります。

然し馬大師の如き實地の修行功を累ねた者は、只徒らに腦裡を攪亂し去られはしない。馬問ふて曰く

「如何んが即ち是なるか。」

と、和尚例示して曰く、

「牛に車を駕するが如し、車若し行かずんば車を打する即ち是か、牛を打する即ち是か。」

何れを打たばよいか。此教示に依つて省あり、馬大師も目が覺めたのであります。之れより後南岳

讓和尚の門に於て、大に實究眞參し、馬祖道一禪師とて、大活禪を現出するに至つたのであります。

「垂示に云く、一機一境、一言一句、且く箇の入處有ることを圖る、好肉上に瘡を剜り、窠と成し窟

「成す」一機一境一言一句とは、機は心の働きて、境は心に對して居る外界の物であります。見る物と見らるゝ物と謂つてもよい。喩へば鏡の内へスウツと影を寫した所が境で、それを人と見、花と見るのが機であります。一言一句、一機一境、すべて之れ等は對機應接の上に表した所の爲人手段であります。宗師家何を爲しても、一機一境にあらざれば、必ず一言一句であります。武帝に對して達磨大士が「廓然無聖」と喝したのも「不識」と云つて魏に去つたのも、皆之れ一機一境一言一句であります。然しこれ等機境言句は手段であつて、之れ文だけでは満足能きぬ。且らく入處ある所を示すに過ぎぬ、入口だけ一寸見せたまでのことでありませぬ。其入口をも見せねば可かつたが、見せれば忽ち好肉上に瘡を剗り策と成し窟と成すぢや。瘡は疵なり、窟も窟も理窟の穴であります。立派な顔に瘡を附け、大きな窟窟を造つて了ふ。學者が其一機一境一言一句に依つて、禪だの非禪だの、無念だの無想だの、哲學だの倫理だのと、實に大策を明けて、理窟を押し立てる。大死一番大活現前底の者に至つては、機境言句に依つて、支配を受けらるゝやうなことはない。故に「大用現前軌則を存せず、且く向上の事有るを知らしめんことを圖る、蓋天蓋地又模索不着」である。大用現前底の者には軌則は要らぬ。何んでも禪と云へば、一喝を吐いたり棒でも振つたりするのが活禪だと思つて居る輩があるが禪にはそんな軌則はない、疊を打つたり、布團を蹴つたりしなくとも、眞の活禪は現はれる。即ち大用現前の者ならば、飯を喰ひ茶を喫して居る其間に現はれる。禪は兎かく軌則を以て現はれるやうな

四角四面の者でない、實に多角多面である、否圓轉滑脱なものである。圓轉滑脱に手に持つて居る物其儘で、何んでも示すのであるが、之れも亦且く向上の一事あることを示すまでである。向上とは世間で云ふやうな、單なる進歩發展でない。宗門に於て謂ふ所の向上は、迷を轉じて悟を開くなど迂遠なことでない。所謂上求菩提で、迷悟を脱却して驀然心光を見んとするのが向上で、下化衆生と和光同塵の有様が向下である。向上の一事は天を蓋ひ地を蓋ふて、實に宇宙に彌綸して居るけれど、學者も全く模索不着である。模索不着とは一言に云へば盲目の牆覘きである。捕へんとしても捉ふることができぬ。「恁麼も也た得たり不恁麼も也た得たり太廉纖生」恁麼は「然り」とか「如是」とか云ふ位の俗語ぢや。向上の一段には常に把住と放行とがある、言を換へて肯定と否定と云つても分らう。太廉纖生は綿密なこと。恁麼と云つても可い、不恁麼と云つても可い、何れも皆是で、其儘大用現前である、細いものぢや、捨つべきものは一つも無い。「恁麼も也た得ず不恁麼も也た得ず大孤生」之れは上の反對で、恁麼と云つても駄目、不恁麼と云つても駄目である。何と云つても駄目ぢや不是不是、大孤危生は孤危嶮峻と云ふことで、釋迦、達磨も寄せつけぬ當體ぢや。「二途に涉らず如何か即ち是ならむ請ふ試みに擧す看よ」物はすべて二途何れかである、是と非、可と不可、肯と否、諾と不諾、恁麼と不恁麼、と云ふやうなものだが、此二途と二に分けることは許さぬぞ。二途に分けずば、果して如何にしたら可いぞ。マア管々しく言ふに及ばぬ、馬大師の話を擧示するから、心を入れて看よ。

舉、馬大師不安。院主問、和尚近日尊候如何。大師云、日面佛月面佛。

(訓讀) 舉す、馬大師不安。院主問ふ、和尚近日尊候如何。大師云く日面佛、月面佛。

(講説) 「馬大師」は前に演べた馬祖山の道一禪師のことで、「不安」は不例とか不快などと同じく、病氣のことであります。馬大師が病氣で休んで御座ると、馬祖山の院主の役を勤めて居る一僧が、和尚の病氣を聞いて見舞に来つたのであります。扱て和尚の病氣は何病であるか、圓悟は「四百四病一時に發る」と評しました。「院主問ふ、和尚近日尊候如何」之れが院主の見舞の辭ぢや。和尚近日頃御病氣の様だと承りましたが、御容體は如何で御座るか、實に平凡な見舞方でありませう。之れ位の事なら長屋の娘でも言ふが、今吾々ならば何んと見舞ふか。院主は今朝の御容體は如何で御座ると見舞つた辭は、之れ丈けで仁義は盡して居る、人道は完いが、安んぞ知らん、見舞ふ院主が大病抱へて居らうとは。院主自身は勿論知るまいが、馬大師の眼から見れば憐むべし、難治の病を身に有つて居るのであります。扱て諸君は如何。自ら病なきことを保すや。故に圓悟が、「三日の後に亡僧を送らざれば是れ好手」と着語した。之れは馬祖にも院主にもかゝる。三日を待たずして葬式を出さねば好いが、今日の容體では危いものぢやと。圓悟は能くも言つて呉れた、實に好評ぢや。「大師云く、日面佛月面佛。」何んと云ふ挨拶であらう。病氣を見舞ふた辭に對して、恰も木に竹を接いだやうに、日面佛月面佛とは何んの事であらう。之れを愚僧共が眼を怒らし、眉を揚げて眞似しても眞似であつて、本物で

ない。是れが垂示に所謂大用現前の有様である。若し徒らに其形式を執り來れば好肉瘡を剝り窠と成し窟と成すのであります。馬大師不安。院主問ふ、和尚近日尊候如何。大師云く、日面佛月面佛。之れ丈けでよい。が、最う言はれない。之れ以上老婆心を以て言つて見たいが最う言はれない。若し親參實究を累ねた上士ならば、其意も自知することであらう。古人も此則は、難信難入底の大難則ぢや流石の雪竇も生膽をぬかれたと見えて、頷には格別力を盡して居ると謂つて居る。

日面佛月面佛。五帝三皇是何物。二十年來曾苦辛。爲君幾下蒼龍窟。屈堪述。明眼衲僧莫輕忽。

(訓讀) 日面佛月面佛。五帝三皇は何物ぞ。二十年來曾て苦辛す。君が爲めに幾か蒼龍窟に下る。窟。述るに堪へたり。明眼の衲僧も輕忽すること莫れ。

(講説) 「日面佛月面佛」本則其儘を持ち來つて頷にするのが、殆んど、雪竇の慣用手段の如くであるけれど、雪竇は亦雪竇の獨特の工夫があります。雪竇が日面佛、月面佛と切り出したところを見るがよい、龍袖發開して全體現するの趣があります。白隱禪師も、

「隻手の聲を聞かねば、日面佛月面佛を見ることはならぬ、一度見得すると三千世界皆吾物になる豈に五帝三皇のみならんや、三世諸佛梵天帝釋も冠をぬぐ場がある。」

と言はれました。「五帝三皇是れ何物ぞ」支那に於て伏羲、神農、黃帝之れを三皇と謂ひ、少昊、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜之れを五帝と稱するのであります。三皇五帝は支那最初の帝王であつて、其徳最高至尊、實に天地に貫く所の聖王とされてゐます。其三皇五帝も、是れ何物ぞと貶して了つた。此中に於て宗旨を現はし、些の悪意なきものであるが、宗教を解する事なき者に至つては、是れが亦大問題となるのであります。即ち此一語に依つて不敬事件が出来たのであります。支那宋朝の代に於て「續藏經」編纂の際、此「碧巖錄」に唯此「五帝三皇は何物ぞ」とある一句によりて、時の神宗皇帝の疑ひを招き、終に「續藏」中に編入されなかつたのであります。故に「碧巖錄」以下の格にある書物が編入されたにも拘はらず、此「碧巖錄」が編入されなかつたのであります。然し「碧巖錄」が「續藏」中に編入されなかつたとて、此書の價值に些の變動はありませぬ。それのみか、此語によつて、かゝる事件の出来たことは、却つて吾々に尊敬の念を深からしむるのであります。餘事はさて置き日面佛月面佛、五帝三皇是れ何物ぞ。世間の俗情を以てすれば別問題であるが、今宗旨眼を以てすれば、五帝三皇如何に聖なりと雖も、屋裡の天真佛には及ぶまいぞ。「二十年來曾て苦辛す」之れからは雪竇の餘裕である、亦老婆心に近しぢや。雪竇も此公案に就いては、凡そ二十年來苦辛慘澹して參究の心血を濺いだ。血の涙玉の汗でやつたと、雪竇自身の昔話を初めるのである。「君か爲に幾か蒼龍窟に下る」今、日面佛月面佛と憚りなく言ひ得るのも、幾度か蒼龍窟に下つたからであるぞ。蒼龍窟

下の珠を得んがためには、命掛けて、幾度か蒼龍の巖窟に尋ね入らねばならぬ。所謂虎穴に入らざれば虎兒を得ずと同じぢや。「屈」と、此れは一字で一句であります。噫實に苦屈であつた。其事を想ひ出しても、身の毛が慄立と述懐して居る。豈に夫れ雪竇のみならんや、吾々でも恰も戀人の爲に浮身を寢すが如く、熱烈に探求せざれば、日面佛は拜めぬ。雪竇も斯く苦心したればこそ「述ぶるに堪へたり」と喜んで居ます。諸君は即今、日面佛の様子を述ぶることが能きるや。「明眼の衲僧も輕忽すること莫れ」我れこそと思ふ禪客でも、此一事はかりは輕忽にしてならぬ。自ら悟つたなど謂つて居ても、疊の上の水練では、實際に逢着すると、前の悟が間に合はぬ。そんな事では不可ぬ。眞實大悟の地に至れば、解脱自在である。如何なる難題を提起するも、七縱八横である。故に小悟小成に安んぜず致々兀々として參究せなくてはならぬ。

第四則 德山到瀉山

垂示云、青天白日、不可更指東劃西。時節因緣、亦須應病與藥。且道放行好、把定好。試舉看。

(訓讀) 垂示に云く青天白日、更に東を指し、西を劃す可からず。時節因緣、亦須らく病に應じて藥を與ふべし。且く道へ放行するが好き、把定するか好き。試みに舉す看よ。

(講說) 『德山到瀉山』の一則。『青天白日、更に東を指し、西を劃すべからず』隅から隅まで隈なく晴れ渡つた有様であります。白隠和尚は、

『八識田に一刀を下す、殺盡掃蕩して、見はらしきつた奈落の底まで。』

と評して居られます。意識の根元に向つて、一刀を下した時は、十界は平等で、掌上を見來たるが如き有様であります。更に指すべき東もなく、劃すべき西もない。迷ひもなく悟りもなく、地獄もなく極樂もなく、凡もなく聖もなく、天際見渡す限り、片翳をも留めざるをいふ。『時節因緣、亦須らく

病に應じて藥を與ふべし』時節因緣の語は『法華經』に、

『佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因緣を觀すべし』

とあるのが本で、無差別の平等は、佛敎の眞意でないから、平等に即した建立差別門を開くが此一句であります。前の青天白日は掃蕩門、此時節因緣は建立門であります。一切萬象羅々森々として差別す、西あり東あり、鬼あり佛あり、生死あり涅槃あり、煩惱あり菩提あります。差別あるから病に應じて藥を與ふることもあります。佛は大醫王なり、病に應じて藥を與ふるとは、此建立門より云ふのであります。一面より見れば一切衆生悉有佛生などと言ふけれども、他の一面より見れば、此世界は實に病人を以て埋められて居る。『且く道へ放行するが好き、把定するが好き』放行と許してやるが好いか、把定と奪ふて了ふが好いか、放行か把定か、瀉山は其の何れを執つて、德山に接したか『試みに舉す看よ』

舉德山到瀉山、挾複子於法堂上、從東過西、從西過東、顧視云、無無。便出。雪竇著語云、勘破了也。德山至門首、却云、也不得草草、便具威儀。再入相見。瀉山坐次、德山提起坐具云、和尚。瀉山擬取拂子。德山便喝、拂

袖而出。雪竇著語云、勘破了也。德山背却法堂、著草鞋、便行。瀉山至晚問首座、適來新到在什麼處。首座云、當時背却法堂、著草鞋、出去也。瀉山云、此子已後向孤峰頂上、盤結草庵、呵佛罵祖、去在。雪竇著語云、雪上加霜。

(訓讀) 舉す、德山瀉山に到る。複子を挾んで法堂上に於て東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、顧視して云く、無無と、便ち出づ。雪竇著語して云く、勘破了也。德山門首に至り、却つて云く、也た草々なることを得すと、便ち威儀を具し、再び入つて相見す。瀉山坐する次、德山坐具を提起して云く、和尚。瀉山拂子を取らんと擬す、德山便ち喝して、拂袖して出づ。雪竇著語して云く、勘破了也。德山法堂を背却して、草鞋を着けて、便ち行く。瀉山晚に至つて首座に問ふ、適來の新到、什麼の處にか在る。首座云く、當時法堂を背却して、草鞋を着けて、出で去れり。瀉山云く、此子已後、孤峰頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り、去ること所在らん。雪竇著語して云く、雪上に霜を加ふと。

(講説) 先づ本則に入るに先だちて、德山瀉山に到る因縁を述べなくては、本則も自然分り難い。德山も瀉山も、共に宗門に於ては大切なる祖師であります。此兩雄相見の事蹟は、亦興味ある因縁で

あります。德山は本是れ法相宗の講學僧、西蜀に在つて『金剛經』を講ず。此『金剛經』法説の義に因れば、金剛喻定、後得智を以て、千劫に佛の威儀を學び、萬劫に佛の細行を修め、然る後成佛すと説いてある。當時支那南方に於て禪宗甚だ盛んである。然るに南方の魔禪客、即心是佛と説く、魔説に非ずして何んぞやと、德山大に發憤し『金剛經』の疏鈔を擔ひ、這の魔子の輩を破らんと、南方に向つたのであります。其勢ひ果して如何ばかりであつたでありませう。初め體州に到り、路上一婆子あり、油糍を賣るを見て、疏鈔を放下して、お小食を喫らうと思つた。油糍は團子か焼餅の類であります。此茶屋の婆々云く、

『重さうに擔つて御座るものは何んぞいの。』
德山云く、

『金剛經の疏鈔』フ、ン婆子などに分るものと云ふ高調子。婆云く、

『我に一間あり、尊者若し答へ得ば油糍を布施ませう、茶代は要りませぬ、思ふ存分食つて往かつしやれ、若し答へ得ざれば別處に往つて買はつしやれ、團子は一つも賣りません。』

と、婆子は却々剛の者ぢや、德山果して婆子の團子を食ひ得るや否や。德山云く、

『但だ問へ。』
婆云く、

「金剛經に云く、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得と、上座那箇の心をか點ぜんと欲するか。」

と、堂々たる問題であります。此婆子果して何者ぞ、元來此地方は、禪風が盛んであるから、是れ位の事は茶店の婆様でも言ひ得る。點心とは「むなやすめ」で、約りお小食のことである。徳山無語。流石の徳山和尚も、此一問には、ウンと詰まつて了つて一言の答へなし。然し一路傍の茶屋の婆様すら是れ位の事を云ふ、我は常に「金剛經」を講じて其義理に明かであるけれど、恚う實際問題に當て箝められては、何んの答へやうもない、必ず此近邊に大徳の化を布いて居る者があらうと婆子に尋ねた。婆子指し示して龍潭禪師に參ぜしめたのであります。徳山驀然として龍潭の許に至り、纔に門を跨いて便ち問ふ。

「久しく龍潭と響く、到來するに及んで、潭も也た見ず、龍も也た現はれず。」

と、龍潭の名は、路傍の婆子の邊まで響いてゐるが、來て見れば龍潭らしいものも見えぬと。これは最初發憤して「金剛經」を擔ぎ出した意氣の現はれであります。其時龍潭和尚は、屏風の後ろから、身を伸べて云く、

「子親しく龍潭に到れり。」

と。其處が龍潭の入り口であるぞ。要があるなら上らつしやいといふ按排、徳山乃ち禮を爲して、一

端寮舎に退き、其夜和尚の室に入り、侍立し深更に及んだ。潭云く、

「何んぞ去らざる。」

と。大分夜が更けたから、下つて寝ぬかと。すると徳山簾を掲げ出て、外面の暗きを見て、却回して云く

「門外暗し。」

と。其處で潭は紙燭を點じて山に與へた。山將に之れを受けんとする時、早くも潭は紙燭を吹き消して了つた。山則ち豁然として大悟し、師を禮拜した。潭云く

「子箇の什麼を見てか便ち禮拜する。」

と。山云く

「某甲自今已後、更に天下の老和尚の舌頭を疑はず。」

と、爰に於て徳山は、大潭に入つて大龍を獲たのであります。其翌日龍潭和尚上堂して、大衆に告げて曰く

「此中に牙は劍樹の如く、口は血盆に似たる一箇の漢あり。一棒に打つとも、頭を回へさず、他時異日、孤峰頂上に向つて、吾が道を立し去ることあらん。」

と。徳山は恚く大衆の面前で披露されては、黙々として坐してゐる譯には行かぬので、虎の子の如く

大切に、遙々擔ひ來つた所の「金剛經」の疏鈔を、堂前に持ち出し、火を放ちて焼き捨てたのであります。そして

「諸の玄辨を究むるも、一毫も太虚に置くが若く、世の桐機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たり。」

と言ふたが、實に痛快極まるではないか、哲學、科學の理窟は、畢竟何等の要をか爲す、一掬の冷水却つて渴を醫するに足る。後徳山は、瀧山和尚の化を盛んにするを聞き、其道場に至つたのであります。『學す徳山瀧山に到る、複子を挾んで法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、顧視して云く無々と、便ち出づ』徳山が初め龍潭の門に於て、修行した得力を試みんとて、瀧山和尚を訪ふたのでありまして、門を入り、荷物を擔いだ儘、法堂に上り、東より西へ、西より東へと見回へり、顧視して、

「瀧山らしき和尚も居らぬわい。」

と言ふて、便ち出で去つた。旅装束の儘で、法堂に上るさえ、既に無禮なる振舞であるに、而かも家探しをして、無々と言ふて出で去るとは、何んたる無禮者であらう。其傲然たる状は、上に釋迦なく、達磨なき勢ひで、傍若無人の所作とは此事でありませう。其眼に見るところ、一物の障礙なく、實に青天白日で、天に片雲なく、地に寸草なき有様であります。併し之れ徳山内に自ら信ずる所あるから

自然と外に其自信の色が現はれたのであります。瀧山々々と豪らさうに言ふが、那箇か之れ瀧山、更に瀧山らしい坊主も居らぬわいと言ふて、相見もせず出て行きました。『雪竇著語して云く、勘破了也。』雪竇も堪らなくなつて著語した。勘破了也、徳山和尚何をする、肚のドン底まで看破つたぞ。徳山門首に至りて却つて云く、也た草々なることを得ざれと。『徳山迅雷の勢ひを以て、法堂を下り去りましたが、門首まで行つて獨語しました。』

「逸まつたことをしてはならぬ、粗忽をしてはならぬ。」

と言ふて引き返へしました。此處が又大いに味はふべきところで、瀧山の徳、彼れを縛して去らしめざる所であります。『便ち威儀を具し、再び入りて相見す。』全く初めの勢ひとは雲泥の差があります。生れ變つたやうであります。禪宗坊主は禪宗坊主で、それ〴〵師を訪ふには、師を訪ふだけの禮式作法があります。徳山初めには作法も禮儀もなく、獅子奮迅の勢ひでありました。瀧山和尚が方丈で其所作を見てゐると、今度は別人の如き有様で、再び來り、禮を厚うし、辭を卑うし、以て謁を乞ひ瀧山の室に於て相見したのであります。瀧山坐する次、徳山坐具を提起して云く、和尚、瀧山拂子を取らんと擬す。徳山便ち喝して、拂袖して出づ。『兩雄碁を圍むが如く、パチ〴〵と石を投するけれど徳山は常に先手を取るが如く見える。乃ち坐具を提起して和尚と呼んだ、實に霹靂一聲天地を動かすぢや。けれども瀧山の様子は「其時義經少しも騒がず。」と云ふ風でありました。瀧山が拂子を取らう

と手を伸ぶれば、徳山却つてカーツと一喝を下した、落雷は果して何處ぞ、遠雷ありと云ふ様子で、瀉山は更に先を争はない。之れが却つて瀉山の大きな所でありませぬ。徳山は喝して置いて、後をも振り向かず、袖を拂つて室を出たが餘裕が無い。雪寶著語して云く、勘破了也。雪寶は此處でも亦堪らなくなつて、徳山和尚、五臟六腑は見すかしたぞ、と著語した。雪寶の徹見したとは、如何に徹見したのであるか、這は室内の調べであります。『徳山法堂を背却して、草鞋を着けて便ち行く。』最初法堂に旅装束で上つた時と能く似て居ます。草鞋を穿くのも、もどかしい位に、法堂を背却して、サツサと出て行つたのであります。背却の二字味ふべしぢや。『瀉山晚に至つて首座に問ふ。適來の新到什麼の處にか在る。』瀉山が其晩に首座を呼んで、今日珍客があつたが、彼の坊主は何處へ行つたかと尋ねた。『首座云く、當時法堂を背却して、草鞋を着けて出で去れり。』彼の僧で御座るか、彼は疾うの昔に振り向きもせんで出で行きました。却々豪者のやうで御座ります。『瀉山云く、此の子已後孤峰頂上に向つて、草庵を盤結し、佛を呵し祖を罵り去ること、在らん。』瀉山初めて語を爲し、而かも遠く徳山を縛す、徳山走ると雖も、亦去ること能はずぢや。此語即ち徳山を嘆稱するが如くであるけれども、實は然うでありませぬ。徳山は中堅を衝いて、凱歌を奏して退いたのであるけれど、何んぞ知らん、瀉山は遠く伏兵を備へて、敵の歸りを待つと云ふ有様で、徳山に對しては洗へども落ちざる記別を與へて居るものであります。即ち彼の坊主は大方孤危峻峻たる山の頂上に、草庵を盤結して、佛を呵し

祖を罵るであらうと、大なる焼印を彼れが尻に捺し附けたのであります。瀉山の先見の如く、果して事實として現はれました。傳に云く、

『徳山偶々唐の武宗廢佛の難に遇ひ、避けて羅瀉山の石堂に住す。大中の初め太守の歸依を受け、太守の建立せる古徳禪院に入り、遂に山を下らず。』

と。斯る事實は兎も角、瀉山に焼印を捺されてより以後は、流石の徳山も奈何ともする能はず、笑止千萬であります。『雪寶著語して云く、雪上に霜を加ふ。』雪寶も三遍まで著語を加へて居る、實に堪らなかつたと見える。夫れも其雪寶は此巖巖百則の公案を集め、心血を濺いで其眞意を尋求し、一々頌を附したのであるが、其苦心慘澹、實參實究、思ひやらるゝのであります。然れば一頌を作す毎に必ず禮拜したと傳へられて居ます。洵に懸命是れに當つたのであります。今亦著語して曰く、雪上に霜を加ふと、他語すれば猿の尻笑ひぢや。徳山に繩を入れた瀉山の手前も、此雪寶が見抜いたぞよ。然し之れは雪寶自ら胸を裂いて出した血である、敢て妄評を下すべきでない。扱て徳山對瀉山の公案に對して、諸君は何等の見處がある、且く道へ、且く道へ。頌に曰く。

一勘破、二勘破。雪上加霜、曾嶮墮。飛騎將軍入虜庭。再得完全能幾箇。急走過。不放過。孤峰頂上草裏坐。咄。

(訓讀) 一勘破、二勘破。雪上に霜を加ふ會て峻墮す。飛騎將軍虜庭に入る。再び完全を得る能く幾箇ぞ。急に走過す。放過せず。孤峰頂上草裏に坐す。咄。

(講説) 雪竇百則の公案を頌するに、一則々々香を焚き、禮拜して拈出するといふ、如何にも崇仰すべき行ひであります。故に此頌の如きは、其赤心も顯はれて居るので、圓悟も、兩重の公案と著語して居ます。「一勘破、二勘破。」と山踰せば又一と山一と山々々々別ではあるが、終始一貫して居る。「雪上に霜を加ふ、會て峻墮す。」徳山和尚初めに無々と云つた、既に此時から危険の地に臨んで居た。「飛騎將軍虜庭に入る。」飛騎將軍とは評にも一寸出て居るが、漢の將軍李廣のことであります。「李將軍騎を善くす。將軍會て鴈門に出で、匈奴を撃つ、匈奴兵多くして將軍敗北し、遂に虜となる。將軍行く行く傷を病み、途次詐りて死を装ふ。傍に一胡兒ありて監督す、其馬甚だ善し。乃ち將軍身を騰げて、胡兒を推墮し、自らの馬に跨り、胡兒の弓を奪つて馬に鞭ち、南に馳せて脱するを得たれば、匈奴之れを聞きて、漢の飛騎將軍と云ふ。」

と、「史記」に出て居ます。飛騎將軍虜庭に入る、徳山も門首に至り、却回して瀉山の室に入つた、全くの捕虜であるぞ。「再び完全を得る能く幾箇ぞ。」大概の奴は一と度び捕虜と爲れば、それきりぢや敵將の前に引き出されて、生き恥かゝねばならぬ。自ら活路を開きて再び歸り來る者、飛騎將軍を除きて、抑も幾箇かある。唯此處に一徳山和尚を見るのみ。「急に走過す。」徳山も拂袖して出で、法堂を

背却して去つた、却々の豪者であるぞ。「放過せず。」此徳山も、瀉山に逢つては赤兒の如しぢや、却々放しはせぬぞ、忽ち伏兵を張つて之れを保つ。徳山も是に至つては、飛騎將軍の比にあらずぢや。「孤峰頂上草裏に坐す。」瀉山は此子已後孤峰頂上に草庵を盤結すと焼印を打つたが、之れに依つて遠く走ること能はず、同じく虜者である。孤峰頂上の草裏に坐したきり動けぬのである。草裏に坐すとは面白い。眞實悟りの眼より見れば、萬年寸草無しであるが、徳山は悟り臭い、ムサ／＼しい草裏に坐して居ると、雪竇徳山を抑えれば、圓悟亦相鎚を打つて、果然と云ふ。雪竇亦堪まり兼ねて咄破するのであります。「咄」此一字で、徳山も瀉山も一括にして咄破したのであります。咄。

第五則 雪峰大地撮來

垂示云、大凡扶_レ豎_二宗教_一、須_レ是英靈底漢、有_レ殺_レ人不_レ貶_レ眼底手脚、方可_二立地成_一佛。所以照用同時、卷舒齊唱、理事不二、權實並行。放_二過一著_一、建_二立第二義門_一、直下截_二斷葛藤_一、後學初機、難_レ爲湊泊。昨日恁麼、事不_レ獲_レ已、今日又恁麼、罪過彌天、若是明眼漢、一點謾_レ他不得、其或未_レ然虎口裏橫_レ身、不免_二喪身失命_一、試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、大凡宗教を扶豎せんには、須らく是れ英靈底の漢なるべし。人を殺すに眼を貶せざる底の手脚有りて、方に立地に成佛せしむ可し。所以に照用同時、卷舒齊しく唱へ、理事不二、權實並べ行ふ。一著を放過して第二義門を建立す。直下に葛藤を截斷せば、後學初機、湊泊するに難爲ならん。昨日も恁麼、事已むことを得ず、今日も又恁麼、罪過彌天、若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を謾することを得ず、其れ或は未だ然らずんば、虎口裏に身を横へて、喪身失命を

免れず。試みに舉す看よ。

(講説) 「垂示に云く、大凡宗教を扶豎せんには、須らく是れ英靈底の漢なるべし、人を殺すに眼を貶せざる底の手脚有りて、方に立地に成佛せしむ可し。」之れまでが第一段であります。先づ宗教を扶豎することは甚だ困難で、古來の祖師の傳記などをみると、不慮の災厄迫害を蒙り、其間此宗教を扶豎されたのであります。今日僧侶の數幾十萬と稱するも、果して宗教を扶豎する者は幾人かある。其大部分は佛を食ひ、祖を食つて居る、拙衲なども、夫れ或は其一人であらう慚愧の至りである。實に祖師方は萬難を排して、宗教を扶豎された、其艱苦を想へば、感慨に堪へぬのであります。大凡宗教を扶豎せんには、須らく是れ英靈底の漢で、圖拔けた者でなくては駄目であります。千人に勝れたるを英と云ひ、萬人に優るを傑と云ふのであるから、千萬人に勝れたる英雄豪傑でなければ、宗教の扶豎は出来ぬのであります。人を殺すに眼を貶せざる底の漢、之れが即ち英靈の漢であります。如何なる大人物でも、人を殺さんとする時は、眼をバツとする。貶するは瞬きすることでありませう。今白双を眉間に衝き付けんとする刹那、アツとする氣色もない者こそ、眞に成佛せしむべきであります。斯くの如き大英靈底の漢、果して何處に居るぞ。所以に照用同時、卷舒齊しく唱へ、理事不二、權實並べ行ふ。之れが第二段で、英靈の漢の機用自在の有様を云ふのであります。照用同時とは、人の機を鑑するを照と云ひ、機に應ずるを用と云ふので、其照用が同時に自由自在に行へる者を照用同時と云

ふ。臨濟は之れを四照用に分別して居られる。

「前照後用、前用後照、照用同時、照用不同時。」

之れが臨濟の四照用であります。言句に現はせば、時間に前後があるけれど、之れは説事次第で、其精神作用の上に於て、山と思ふ時樹を思つて居るやうに照用同時で、間髪を容れざる働きであります。卷舒は與奪と同じく、卷は奪ふ方で、舒は與ふる方でありませう。此與奪も同時で齊しく唱へるのであります。其間に時間を隔てず、同時に唱へて、而かも與とも奪とも片寄らぬものであります。即ち把住放行同時に行ふことでもあります。其他類似の用語を以て云へば理事不二、權實並行杯と云ふことがあります。理論と事實と二つに分けず、理事不二同時存在であります。權假も、眞實も二にして二に非ず、並行同時であります。皆照用同時と同じ意味であつて、之が英靈の漢の働き振りであります。「一著を放過して第二義門を建立し、直下に葛藤を截斷せば、後學初機湊泊するに難爲ならん。」照用同時迷悟不二は、向上の大事であつて、碁に所謂一著である。此の向上の一著では却々分らぬから、之れを放過して第二義門に下り、葛藤を截斷するものであります。葛藤は文字言句を云ふので、松柏も此葛藤によりて、往々枯死せしめらるゝのであります。向上の一著も葛藤に巻き附かれては、何んとも仕方がないから、第二義門を示して、葛藤を截斷するのであります。然らざれば後學初機、並大抵の者は湊泊することが困難であります。湊泊は大海を航行する船の湊り泊まる場所であります。次

に第四段に移つて「昨日も恁麼、已むことを得ず、今日も又恁麼、罪過彌天、若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を謾することを得ず、其れ或は未だ然らず、虎口裏に身を横へ、喪身失命を免れず。圓悟禪師が、昨日も下らぬ提唱をした。今日も亦同じく講筵を開いた事、已むを得ずとは云へ、第一著向上の大事より言へば、罪過天に彌つる。若し明眼の者ならば、此圓悟も佛祖も、何ともすることが能きない。若し然うでなかつたなら、此圓悟に喰ひ殺されるぞ、恐ろしいことを言つたものぢや。然し師家も學人の虎口に身を横たへ、一生懸命に説示するから、學人も師家の虎口裏に身を任せて、一度は喰ひ殺されなくてはならぬ、身を捨てこそ浮ぶ瀬もありぢや。扱て眞實宗教を扶堅する所の、英靈底の漢とは誰そ、試みに擧す看よ。

擧、雪峰示衆云、盡大地、撮來如粟米粒大。抛向面前、漆桶不會、打鼓普請看。

(訓讀) 擧す雪峰衆に示して云く、盡大地撮し來るに粟米粒の大きさの如し。面前に抛向し、漆桶不會、鼓を打つて普請して看よ。

(講說) 雪峰和尚は、徳山禪師の法嗣で、次の六則に出る雲門大師に取つては、師匠に當るのであります。雪峰人に接する峻峻、一步も許さざる師家であつたけれど、其所謂修養時代に於ては、洵に深重なる願心があつて、而かも能く陰徳を積んだ大徳であります。此陰徳を積むと云ふことは、世間

の語にも、積善の家には餘慶ありなど、云つて、勸勵して居るのであるけれど、禪家に於ては、殊に陰徳を積むことを修養させるのであります。尤も斯う云ふことは、自然叢林自治の基礎を成して居るのであらうが、人の見ない所に於て善をなす、敢て自ら其善を作したることを語らぬのである。先づ雪峰和尚の願心の深かつたことは、三度投子に上り、九度び洞山に到つて修行したことで明かであります。和尚洞山下に在る時、飯頭を務めて居た、即ち炊事係であります。禪宗に於ては、唯坐禪ばかりして、手も濡らさぬ者は、眞實の修行者としませぬ。禪は坐作進退一舉手一投足の中に在るのであるから、叢林等に於ては何でも作務するのであります。一日洞山和尚炊事頭の雪峰を見て問ふた。

「汝什麼をか作す。」

雪峰答へて曰く、

「米を淘る。」米中の砂を分けて居りますと。洞山云く、

「砂を淘りて米を去るか、米を淘りて砂を去るか。」

どちらであるか。雪峰云く、

「砂米一齊に去る。」

米も砂も一緒に淘り分けれます。洞山云く、

「大衆箇の什麼をか喫せん。」

米も砂も淘り去つては、一山の大家何を食ふぞ、今日から飢渴にならうぞ。此時雪峰は手に持つた米の盆を覆り返へして、米を其處にバラ撒いて了つた。却々手に餘る腕白小僧に似たりじや、如何なる意趣あつて、敢て此事を爲たのか、凡眼を以つては見る事が能きぬ。洞山云く、

「子が縁、徳山に在り。」

手に負へぬ奴ぢや、徳山の所へ行けと謂つて、添書でも附けて徳山の手に渡した。徳山は前則にも出た、有名の棒遣ひであるから、斯る強情者には、眞向から二十棒三十棒を加へて、言ひ得るも三十棒道ひ得ざるも三十棒と、實に手荒な接待をする師家である。雪峰洞山を辭して徳山に到り、纔に數日にして問ふて曰く、

「從上宗乘中の事、學人還つて分ありや、也た無きや。」

と、今日迄傳はつた宗乘甚深の義、私の如き者にも聞取修學することが能きませうかと、問ひを發するや否、果然一棒を喰つた。徳山一棒して云く、

「什麼と道ふぞ。」

小癩な奴ぢやと。雪峰これに由つて省悟しました。後鰲山に行き、雪に阻められて逗留した時に、巖頭和尚に向つて、

「我れ當時徳山の門下に在りて、一棒を喰ひ、桶の底の脱けたやうに悟り、痛快言ふべからざるも

のがありました。』
と語つた。すると巖頭喝して云く、

『備道ふことを見ずや、門より入る者は家珍にあらずと、須らく是れ自己胸中より流出して、蓋天蓋地方に少分の相應あるべし。』

人より聞いて悟るの、打たれて悟ると云ふのは、門より擔ぎ込んだ物のやうで、其家の珍寶什器でない、我が胸を割いて出した血でなくては、痛さは分るまいと勘破され、此處に忽然として大悟しました。雪峰便ち巖頭を禮拜して、

『師兄、今日始めて是れ鰲山成道。』

と謝したといふが、斯くの如く實際修行を重ねたから、終に名匠と爲ることができて、其門下中よりも亦多くの善知識を出したのであります。『學す雪峰衆に示して云く、盡大地撮し來るに、粟米粒の大ききの如し。』一日雪峰和尚大衆に示して、盡大地といへば、如何にも大きいやうであるけれども、撮んで見れば米粒位しかないぞ。盡大地は宇宙法界のこと、或は三千大千世界といふても可く、此天地四海のことで、粟は日本の粟ではなく、米の粳のことであるから、矢張米粒のことでもあります。天地大なりといへども、指の先きで撮み上げられるホンの此位のものぞと云ふて、撮んで見せられたが見えぬ。『面前に抛向す。』で、これが見えないかと言ふて、其面前に抛り出された。『漆桶不會』漆桶は漆

桶のことで、眞黒々といふことで、不會は合點の行かぬことで、即ち漆桶不會少しも分らぬ。是れ此通りであるぞと眼の前に投げ出されても、凡情が之れを隔て、少しも分らぬ。『鼓を打ちて普請して看よ』これが分らなければ、皆一緒に、鐘や太鼓で探して看よ。普請といふ語は、矢張り佛語から來た語で、今では多少意味が違つてゐますが、地方などで道普請をするといふて、伍長が法螺の貝を吹き立て、村中の者を集めて、道路の修繕に取りかゝる、恚うした場合に使ふ語であります。禪宗の叢林等に於ては、多くの雲水が共同生活を營んで居るから、事があれば、共同して事を作す、其時に普請すと云ふので皆な行つて呉れと云ふことであります。今盡大地が米粒位に爲つて、庭前に抛げ出されてあるが、これが見付からぬと云ふから、鐘や太鼓で探し出せと垂語されたのであります。一心専念、之れを尋求して止まされば、到底見付からぬぞ、道は近きに在り、遠く求むべからずであります。扱て大衆諸君、此粟米粒の盡大地を見付け得たりや、將た漆桶不會か。圓悟禪師著語して云く『一盲衆盲を引くと。』雪峰彼れ此れ謂ふが、矢張一盲衆盲を引いて居る、御自身も分るまい、之れは圓悟の力であつて、盲者盲者を嗤ふか、又知るべからずぢや。

牛頭没、馬頭回、曹溪鏡裏絶ニ塵埃、打鼓看來君不見、百花春至爲誰開。

(訓讀) 牛頭没し、馬頭回る曹溪鏡裏塵埃を絶す、鼓を打つて看せしめ來れども君見ず、百花春至

りて誰れが爲めにか開く。

講説)「牛頭没し馬頭回る。」は頓機の働きを示すので、雪峰の手並の勝れて居る所を云ふのであります。牛頭と馬頭、没すと回ると、何れも兩極端を示して居るのであります。或は海邊に寄せては返へす男波女波と云ふても可い。盡大地直ちに粟米粒となる、迅速測り難い。圓悟は著語して「閃電に相似たり、蹉過了。」と云ひ、或は「撃石火の如し。」とも云つて居ます。實に電光石火、キラ／＼ピカピカと云ふ早業であります。此雪峰和尚の提唱が分れば、六祖大師の鏡の中も分るのであります。「曹溪鏡裏塵埃を絶す。」曹溪は六祖大師のことで、五祖下に於て神秀と六祖慧能大師と法流の分れたことは、一の鏡に依ること禪宗中有名な話であります。六祖大師慧能は「菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃。」の一偈を呈して、法燈を繼いだ。吾々も亦此曹溪の流を受けて居るが、曹溪の宗旨では、眼に一塵を留めぬ。若し夫れ曹溪鏡裏に塵埃を絶すれば、自ら雪峰の粟米粒も見得べく、雪峰の意が分れば、亦曹溪鏡裏に拂ふべき塵埃をも認めぬであらう。「鼓を打つて看しめ來たれども君見ず。」鐘や太鼓で探しても見付からぬとあつては致し方はない。盲人月影を見ずで、見ざるは盲たる者の咎で、何んとも仕方がないのであります。雪峰の老婆深切も、爰に至つては届かぬ。然し近からん者は目にも見よ、遠からん者は音にも聞けと、大音聲に呼び立てた、馬鹿深切の雪竇和尚あつて、「百花春至りて誰が爲にか開く。」と又々注意を加へた。深切も爰に至つては、至れり盡せりでありま

す。「柳櫻をこぎまぜて、都ぞ春の錦なりけり」それ見えたか樂屋丸出しだぞ。まだか／＼「無一物處無盡藏、有花有月有樓臺」ぢや。

第六則 雲門十五前後

舉、雲門垂語云、十五日已前、不問汝、十五日已後、道將一句來。自代云、日是好日。

(訓讀) 舉す雲門垂語して云く、十五日已前は汝に問はず、十五日已後、一句を道ひ將ち來れ。自ら代つて云く、日々是好日。

(講說) 本則は圓悟の垂示が無くて、直に雲門大師の垂語を出してあります。素より此「碧巖錄」が熾厄を蒙らざる前には、垂示も備はつて居たのであらうが、厄後編輯の時、既に焼失して居たのであります。扱て雲門大師諱は文偃、支那に於て雲門宗の一家風を興した高僧であります。固より禪宗の根本に於ては異なる所がないのであるけれど、各々其家風を異にする故に、支那の禪宗に五家七宗の別派を生じました。五家とは禪仰宗、臨濟宗、曹洞宗、雲門宗、法眼宗で、七宗は臨濟下に於て楊岐黃龍と分れたのであります。其中雲門大師の家風を傳へた者を雲門宗と稱し來つたのであるが、其祖

雲門大師の家風とは「紅旗閃爍」と謂つて、向山の頂上に錦の旗が翻々として居るが、見えては居れど却々至られない、麗しいけれど高く手が届かぬと云ふ様子であります。其語巧妙にして意亦甚深と云ふ風であります。雲門初めて睦州禪師に參じた。睦州禪師は有名な孤危嶮峻な師家であつて、普通の者なら寄せ付けぬ。先づ參禪する者あれば、直ちに其胸倉を引捉えて、道へ道へと急速に逼り、若し擬議する時は、門外に突き出し、秦時の轆轤鑽と罵倒して、戸をピシヤリと閉て、了ふと云ふ手荒い遣り方でありました。轆轤鑽は秦の始皇帝が、彼の阿房宮を建てた時に用ひたと云ふ、非常に大きな釘のことで、外へ持つて行つても間に合はぬと云ふことであります。俗に言ふ獨活の大本など、同じ。此嶮峻な睦州禪師の處へ、雲門が尋ねて行かれたが、果して秦時の轆轤鑽と罵られながら、門外に突き出された。再び訪ねて再び罵られた。三度目には今度こそと思ひ、門をコツ／＼敲くと、門内より禪師誰れかと問ふ。雲門答へて文偃と言つたれば、纔に其門戸を開いた。雲門此處ぞと跳り込んだ。睦州搗住して道へ道へと迫まられたけれど、雲門又擬議した。爰に於て睦州は彼れを門外に押し出さうとするけれど、彼れ亦大に抵抗しつゝ、遂に門外に突き出され、其機會に片足を挟まれたかから堪まらない、片足を折つて了つた。然し雲門は忍痛の語を發し、痛いと言つた時に大悟したのであります。眞實法を求むる者は、一臂半脚を亡ふ位のこと覚悟の前であります。慧可は片臂を斷つて法を求め、雲門は半脚を折つて悟に入つたのであつて、古來好一對の美談として貽つて居るのであり

ます。其後雲門が陳操尙書の處に三年住したと云ふが、陳操尙書は支那の居士中にも却々勝れた人で、學者で官吏であつたが、其初め禪に入つた時の話が、亦頗る趣味があります。雲門睦州の處を辭して、雲水の風で陳操尙書の宅を訪ふた。陳操尙書は普通の雲水坊主と思つたから、最初より馬鹿にしてかゝつて居ます。即ち陳操尙書が雲門に問ふて曰く、
「敢て儒書中のことは問はない、又佛教でも三乘十二分經の教相上のことは且く措く、如何なるか 衲僧行脚の事。」

お前の御修行は何うで御座るか。雲門云く、
「且く幾人に問ふ。」

そんな問題を何人位に尋ねましたかと。陳操尙書急ぎ込んで、

「即今上坐に問ふ。」

雲門云く、そんなことは何うでも可い

「先づ問ふ、如何なるか是れ教意。」

と。足下は三乘十二分經を丸呑みにして居らるゝが、佛一代の教意果して如何と。陳操尙書答へて

「黄卷赤軸。」

と言ふ。雲門之れを聞き咎め、

「黄卷赤軸這箇は是れ文字語言、如何なるか是れ教意。」
と重ねて詰め寄りました。操遂に窮して、

「口談ぜんと欲して辭喪び、心縁ぜんと欲して慮忘す。」

と答へました。末后其れ何んぞ處女の如くなるや、初めの元氣何處へやらであります。雲門云く、

「口談ぜんと欲して辭喪きは、有言に對するが爲めなり。心縁ぜんと欲して慮忘するは、妄想に對するが爲めなり。如何なるか是れ教意。」

と。爰に於てか陳操は、遂に雪隠詰にされて了つて、何んとも一言を發し得ませぬ。雲門重ねて云く、

「凡そ師僧三經五論を抛却して叢林に入り、十年二十年奈何ともせず、然るに一巻二巻の經論を看て、得たりとするは誤りも甚し。」

と。瘦せ坊主の雲門が、恠く傍若無人の言を吐けども、陳操争ふこと能はず、氣の毒な次第であります。併し陳操は多少の修養がありましたから、自己の非を飾らず、

「某甲の罪科なり。」

と言ふて禮拜したのであります。恠くて雲門は、陳操の家に三年間も留つて、操と共に禪道を修めたのであります。其後雲門は、又睦州の指令に依りて、雪峰和尚に參じました。乃ち雪峰の許に至りて問ふ。



「如何なるか是れ佛。」

と。雪峰曰く、

「寝語を言ふな。」

と。雲門便ち禮拜す。之れより後三年、一日雪峰問ふて曰く、

「近日子の見處如何。」

と。雲門云く、

「某甲が見處、從上の諸聖と一糸毫許りも移易せず。」

と。此處まで進めば、雪峰も最う安心でありませう。其後一世の波瀾頗る多いことであるが、傳は略すとして、『雲門錄』に就いて見れば、其「紅旗閃爍」なる所も窺はれますが、今試みに本則を擧す看よ。「擧す雲門垂語し云く、十五日已前は汝に問はず、十五日已後一句を道ひ將ち來れ。」雲門或る年の四月八日、即ち釋尊降誕の聖日に上堂して大衆に示した垂語であるといふ。從つて其八日と云ふ八の數に付き廻り、或は十五日と云ふ十五の數に付き廻はつて、彼れ此れと説を立てる者があるが、何れも斯る數字に限られて居ては眞意は撮れぬ。十五日前のことは問はないぞ、十五日後何んとか言つて見よ、反對に十五日後のことは敢て問はず、十五日前一句を持ち來たれでも可い。去年のことは何うでも可い、今年一言を呈せよでも可い。生れぬ前のことは問はず、生れてからのことを聞きたいでも

可い。然し今手近く十五日前は問はず、十五日已後一句を道ひ將ち來たれと垂語された。こんなに近い問題だけれど、大衆中一言を陳べる者もない。一座水を打ちし如く靜まり返つて、遠く參詣者の打つ鰐口の音を聞くばかりである。雲門已むを得ず「自ら代つて云く、日々是れ好日」師家の慈悲ぢや如何にも慈愛溢るゝばかりではないか。何か圖抜けたことでも言はれるかと思つたら、日々是れ好日實に易々と言ひ抜けた。然し之れが常人に言はれやうか。而して顧るに、世相日々變移して留まらず、生るゝ者死する者、吉日あれば凶日次ぎ、佛滅大安と續き、今日は旅行に善くない、明日の縁組は見合はずしなど言つて居る所に、雲門大師は日々是れ好日と言はれた、果して何れの邊を見言はれたものぞ。雲門の口先を眞似るなら、誰れでも言ふが、言つた口の動いて居る中に、泣いたり笑つたりしては、言ひ甲斐がない。若し夫れこの日々是れ好日の境に至れば、四季春にして百鳥熙々然として和することも了得せらるゝであらう。然し雲門大師の意果して何れに存するか、千思萬考を要する所であります。

去却一、拈得七、上下四維無等匹。徐行踏斷流水聲、縱觀寫出飛禽跡、草茸々煙冪々、空生巖畔花狼籍、彈指堪悲舜、若多、莫動着、動着二十棒。

(訓讀) 一を去却し七を拈得す、上下四維等匹無し。徐に行いて踏斷す、流水の聲、縱に觀て寫

し出す飛禽の跡、草茸を煙霧々。空生巖畔花狼籍、彈指して悲しむに堪へたり舜若多。動着すること莫れ、動着せば三十棒。

(講説)「一を去却し、七を拈得す」此六字中に雲門大師の示衆全體を提起して餘蘊がない。雪竇百則の公案を頌出するに當り、直ちに冒頭の一句に宗旨を全提する。此頌も雪竇が最初の六字を以て本則を提起し、而かも大刀を大上段に振り翳して、一刀兩斷に截ち切るが如き趣がある。扱て此と云ひ、七と云ふより、多くの者は數に付き廻つて、これは四月八日の示衆であるからなどと云ふが、斯かる數字的のものでない。元來數字は表號であつて、實質でない、逆も表號のみに依つて、顯はし盡される者でない。「去却」は取り退けること、「拈得」は取り上げることぢや。雲門が十五日の前後を云つて居るから、自然兩端にかけて言つたまで、敢て七に限らない、八でも九でもよい。燈火を持ち來たれば、室内の闇黒同時に徹却される、故に明を拈得し闇を去却すと謂つてもよいが、未だ至らぬ。此「拈得」は取り拂ふ意味に取つた方が強くて深い、一だの七だの、明だの闇だのと言ふ一切の差別見を掃盡すれば、日々是れ好日の平和な境が、自然に實現されるのであります。彼此我他の差別見に住すれば、愛憎取捨の雲霧、明月を覆ふて了ふ。然し一と度び此我他彼此の差別、一と七、十五日前後等の差別を泯亡すれば、明月皎々として、四時常に春であります。此一句で既に本則は十分頌出し盡したのであつて、之れより以下は雪竇の餘裕であります。此に第一句を受けて、「四維上下

等匹無し」と出たのであります。東西南北四維上下、此世界に在つて立つ我もなく他もなく、更に等匹と比較すべき一物をも認めないのであります。見渡す限り際なく續く大空に、只磨き澄ました鏡の如き秋月の懸つて居るばかりであります。これが即ち天上天下唯我獨尊の境界であります。一を去却し、七を拈得すれば、四維上下等匹なし、如何にもサラツとした者であります。所謂碧潭皎潔で、金波銀波の漣漪も無い。心に掛る雲の影もない當體ぢや。「徐に行いて踏斷す流水の聲、縦まゝに觀て寫し出す飛禽の跡」此二句は亦前句を承けて、且つ無効用現前、自由の行動を吟出したのであります。吾々が雲水をして居る時代には、袈裟文庫を肩にして、長き谷間などを歩行して居ると、通る旅人も無ければ、山は前面を掩ふて萬木茂り、脚下には晝夜を分たす流るゝ谷川の水があつて、ドウ／＼と絶えず流れ去る聲を聞くのである。實に斯かる場合には、恍惚として旅中に在る我れを忘れ、覺えず歩を停めて、此山川に同化し去られんとするのであります。併しながら吾々は未だ其景を我れに同化し去るの力が無い、却つて景に同化し去られんとするのであります。故に徐るに行いて流水の聲を踏斷するやうな自由な働きは能きぬのであります。若しそれ四維上下等匹無きの境を得ば、此谷川の水の音を踏斷する位のことは何んでも無きことである。白隱和尚が「淀川の走り舟を止めて見よ」「川向の喧嘩を止めよ」などと言はれたのも、皆此無功用の上のこと、唯口で言ふばかりでない。親しく調べて見て、全く我が物に爲り切つた時、此境涯が自ら現はれるのであります。只文字上のことに附

き廻はつて居ては、何時になつても、其意は獲られない。如何に繪畫に巧みな者でも、飛んだ禽の跡を寫し出せとの注文には應じ難い。然し雲門大師の如く、四維上下に等匹なく、日々是れ好日で過して行く者になれば、力を勞せずして、思ふ様飛んだ鳥の跡を見届けて、而かも之れを能く描出することが能きるのであります。「草茸々煙霧々」と次の句に至つて、此四維上下の句を貶却するので、これは又雪竇の力であります。天上 下唯我獨尊と云ふけれど、雪竇の前面には草茸々として生ひ茂り、煙霧々として地を覆ひ、ムサ／＼しくして見るに堪へぬと云ふ見識である。圓悟禪師も白隱和尚も然う解して居る。それは雪竇の力で、始めは揚げて終りは抑えた。「空生巖畔花狼籍」空生は釋尊十大弟子の一人で、解空第一の須菩提尊者のことであります。十大弟子は釋尊の弟子何千人中最も勝れたる者十人のことで、十大弟子には各々其特長があつて、多聞第一の阿難尊者とか、上行第一の迦葉尊者とか、智慧第一の舍利弗尊者と云つて、各々得意とする所がある。今須菩提尊者は解空第一で、般若の空理を證得したる點に於て、他に勝れて居るものである。此須菩提尊者が、或る時巖窟中に在つて眞空三昧に入つて居られると、帝釋が現はれて、大地を六種に震動せしめ、華を雨ふらして讚歎し初めた、其處で須菩提が帝釋天の供養讚歎するのを見て、

「我れは只坐禪をして居るだけで、未だ般若を説かないのである。我れ未だ曾て一字も般若を説かないのである。我れ未だ曾て一字も般若を説かず、然るに汝來つて我れを讚歎するは何故ぞ。」

と咎めた。其時帝釋天答へて、

「尊者無説、我亦無聞、無説無聞是れ眞の般若。」

と言つて、復た地を動し、華を雨ふらしたといふ故事があるので、今之れを引いて居るのであります。須菩提般若を了解したと云ふけれども、實は帝釋天に讚歎されたのでなくて、調戲はれた様なものであると雪竇は抑えた。巖畔雨華狼籍の有様を見よと、之れも第二句四維上下等匹無しなど言つては居るけれども、草茸々煙霧々たること、彼の空生巖畔花狼籍たるよりも劣らぬと前句を受けて居るのであります。「彈指して悲むに堪へたり舜若多」舜若多は印度で古く言つて居つた虚空神のことである。此舜若多は虚空を以て身と爲し、其虚空の外に身體が無いと云ふ神様であつた。彈指するとは指をバチリ／＼と弾いて、手を清める意ぢや。乃ち此舜若多が虚空を以て身として辛ふじて、佛の光に遇ふて其身を現するを云ふ、悲しいことを彈き落すのぢや。言ひ換へれば、彈指して悲しむに堪へたり、四維上下等匹無しの境である。未だ眞空に入らず、又眞證を得ざれば、彼の須菩提の如く、又此舜若多の如くである。「動著すること莫れ、動著せば三十棒」動著すること莫れの一句頗る妙である。動著は心の動き廻つて確信なき貌であるが、其用ひ方が面白い。親が子供の泣きを止めやうとする時、泣くな／＼と言へば泣き更に止まない。其時却つて泣け／＼決して黙るなど、反意に言ふ時は、泣きを止めるものである。今動著すること莫れの一句は、それであつて、偏つた悟りに落ち付いて居つては

可愛想である、故に空生巖畔花狼籍と云ひ、或は彈指して悲しむに境へたり舜若多と教へても、尙ほ其泣きを止めないのである。慈悲ある親は一轉して、泣け、其偏空の場より一步も退くなど反意に言ひ動きでもすれば三十棒だぞと勸誡する。それが即ち警策であつて、之れに依つて初めて氣付き動き出すのであります。然れば此警策の一語、痛きこと三十棒に齊しと謂ふべきぢや。

第七則 法眼慧超問佛

垂示云、聲前一句、千聖不傳、未會親觀、如隔大千、設使向聲前、辨得截斷天下舌頭、亦未是性燥漢。所以道、天不能蓋、地不能載、虛空不能容、日月不能照。無佛處獨稱尊、始較些子、其或未然、於一毫頭上透得、放大光明、七縱八橫、於法自在自由、信手拈來、無有不是。且道得箇什麼、如此奇特。復云、大衆會麼、從前汗馬無人識、只要重論蓋代功、即今事且致、雪竇公案、又作麼生、看取下文。

(訓讀) 垂示に云く、聲前の一句、千聖不傳、未だ會て親觀せざれば、大千を隔つるが如し。設使聲前に向つて辨得し、天下の舌頭を截斷するも、亦是れ性燥の漢にあらず。所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すこと能はず、虚空も容ること能はず、日月も照らすこと能はず。無佛の處獨り尊と稱して、始めて些子に較れり。其れ或は未だ然らず、一毫頭上に於て透得して、大光明

を放ち、七縦八横、法に於て自在自由にして、手に信せて拈じ來るに不是有ること無けん。且く道へ箇の什麼を得てか、此の如く奇特なる。復云く、大衆會す麼。從前の汗馬人の識る無し、只重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。即今の事は且く致く。雪竇の公案又作麼生、下文を看取せよ。

(講説) 法眼慧超問佛の一則で、本則は短い、垂示は長い、されば其要點果して何れに存するやを捉へて置かねば、本則も自然解らない。『聲前の一句千聖不傳』凡そ言句に顯はされるには、先づ聲あり、其聲前に於ける一句、抑も如何なる一句であらう。所謂那一句であります。生前の父母と謂はるか、乾元の一氣と謂はるか、佛とも法とも聲に現れぬ前で、フツと一念起らぬ先の處である。此那一句に至つては、古來三世三千の諸佛諸聖出で來るも、之れを傳ふることが能きぬ。即ち釋迦が來ても傳ふることが能きぬば、達磨が來ても駄目なこと。之ればかりは親知らず子知らずである。解つたなどと早合點するも不是。解らぬと云ふも不是。把住放行共に不是である。『未だ會て親觀せざれば、大千を隔つるが如し。』親觀の觀の字は、諸侯が天子に朝拜する時に用ふる字で、今は相見と同じ位に見て置けばよい。未だ會つて親しく相見せざれば、設使面と面と對つて居ても萬里を隔つちや。然らば何に親觀するか、これは考ふべきことであつて、又言ふべき問題でない。面と對つて話したこと無の輩は、大千を隔つ。大千は大千世界のこと、之れは教相家の説に隨ふと、非常に大なることで、千里や萬里でない。先づ一寸言つて見ると斯うである。太陽を中心とした、遊星だとか何んだと

か云ふ星が、夜に入ると一時に光り出して天を蓋ふ。此太陽系を指して小千世界と云ひ、之れを千倍したるを中千世界と稱し、更に之れを千倍したるを大千世界と呼ぶ、其小中大の三世界を合したるを三千大千世界と云ふのであります。或は略して三千世界とも言つて居る。『三千世界に唯ひとり』など言ふと、實に仇や愚な話でない。阿彌陀佛の極樂淨土なども、西方十萬億土を過ぎて向ふに在ると言ふけれど、若し親觀すれば此處を去ること遠からずである。『設使聲前に向つて辨得して、天下人の舌頭を截斷するも、亦未だ是れ性慥の漢にあらず』然らば其聲前の一句を辨得して、三世の諸聖にウンともスンとも言はさぬ位に悟つたら佳いか。所謂宇宙の本體を看破し來つて、天下の人にグーの音も出させず、其舌の根を斷ち截つても、まだ性慥の漢とは言はれぬと、之れを抑え付けて、百斤の石を乗せたのであります。性慥は其性質の鋭敏なる者で、所謂伶俐の漢と同じこと。以所に道ふ天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、虚空も容るゝこと能はず、日月も照らすこと能はず。一切を蓋ふは天で、一切を載せるは地である。又一切を包容するは虚空で、一切を照らすは日月である。然るに其天地を離れ、虚空を脱し、日月を絶した所があつて、其處に佛が御座ると云ふのであります。『無佛の處、獨り尊と稱して、始めて些子に較れり。』無佛の處は無衆生の處で、迷悟もなく、染淨もなく、天地を離れ、日月を絶して居る。その處に向つて獨り尊と稱して絶對の境地、唯我獨尊と言ひ得る者なら、少しは較つて居る。此處が即ち本則に向つて放つ箭であつて又此垂示の眼目でありま

す。其れ或は未だ然らず、一毫頭上に於て透得して大光明を放ち、七縱八横、法に於て自在自由に、手に信せて拈じ來たるに、不是有ること無けん」然らば、ウの毛一本の上に於ても、聲前の一句を辨得することが能きる。之れさえ透得すれば、草木國土悉皆成佛、大光明は日月以上に輝き、自由自在の働きも現はれる。故に何を爲やうと、何を言はうと御勝手である。又何んと言つても、何をしても、決して法に背いたことは無くて、常に是である、不可あることなしぢや。且く道へ箇の什麼を得てか、此くの如く奇特なる」これは又何うした譯か、自由自在の妙用を得たる境界に爲ると云ふも、敢て好んで大言壯語を吐いて居るのでない、須らく是性の眼を開いて、トツクリ見るが好い。復云く大衆會す麼」復た云はく、圓悟が前の垂示を終つた後、良久あつて大衆の様子を見て、重ねて垂示するので、何うぢや皆解つたか、合點が行つたかと尋ね。從前の汗馬人の識る無し、只重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す」と語を次がれた。之れは「東山外集」に、

『六國平來一瞬中、心王不動通八方、從前汗馬無三人識、只要重論蓋代功。』

とある轉結二句を取り出し來つたので、將軍が馬に汗をかゝせて働くやうに、從前の命がげの修行、煩惱の魔軍と戦つたことを誰れも知るまい。親しく天下の大將軍に見參して、古今無比の大功を賞めて貰はねばならぬ。先づ其蓋代の功を立てた者と謂へば、恐らく今將に擧示せんとする慧超和尚の如き者であらう。即今の事は且く致く雪寶の公案また作麼生」人々即今の事も大事なれど、それは且く

置く、雪寶が公案此處に在り。下文を看取せよ」先づ本文を見るが好い。

擧僧問法眼、慧超咨和尚、如何是佛。法眼云、汝是慧超。

(訓讀) 擧す僧法眼に問ふ、慧超、和尚に咨す、如何なるか是れ佛。法眼云く、汝は是れ慧超。

(講説) 法眼文益禪師は餘杭の人、嘗て途に地癡桂琛禪師に遇ふて、豁然として開悟し、之れより身を以て師事し、後臨川に到つて崇壽院に住した。四方より其徳を聞いて來集する禪客、常に五百人以上もあつたと云ふ。後建康の清凉院に遷り、大に雪峰、玄沙の道を宣揚された。此法眼文益禪師は遷化の後、朝廷より大法眼禪師の諡號を賜つた。そして、其禪風は一家を爲して居つた故に、法眼宗の一派を出し、五家の一となつたのであります。五家各々其家風を異にするが、此法眼宗の特色とする所は、箭鋒相拄と云ふことである。擧す僧法眼に問ふ」或る時法眼門下の一衲僧が出で來つて法眼に問ふた。此の僧は却々の癖者で、到底一筋繩では行かぬ。先づ誰れであるかを能く見れば、此僧は即ち慧超でありました。慧超和尚に咨す如何なるか是れ佛」慧超の私が今改めて和尚にお尋ね致します。全體佛とはドンナものでござる。然しその佛とは果して如何なる佛を問ふか、木佛か石佛か將た金佛か、さては法身佛か何佛か。慧超が此問ひを提起するまでには餘程考へたに違ひない。法眼云く、汝は是れ慧超」此法眼の面目を看よ、實に老練なものぢや。お前は慧超でないかと無造作に答

へられた切りであります。之れを義解して佛とは外でない。汝の身に具する所の一切の慧超其儘が佛である。汝は是れ慧超、慧超即ち是れ佛と、持ち廻して考察を加へる者があるが之れは可くない。汝は是れ慧超、お前は慧超でないかと、是れはく〜と計り花の吉野山ぢや、其上の事は言ふことが能いぬ。之れが即ち千聖不傳の聲前一句である。慧超に七縦八横自由自在の妙用がないから、此一言で頭を引き込ませて了つた。殆んど龜の如き有様であります。法眼和尚の接得の仕方は、大抵此やうである。或る時和尚上堂すれば、一僧あり問ふて曰く、

「如何なるか是れ曹源の一滴水。」

和尚答へて曰く、

「是れ曹源の一滴水。」

と。是れが所謂箭鋒相拄の宗旨ぢや。是等は理窟や教相では分らぬ。此千聖不傳の那一句は、眞實商量し參究する時に、耳底に響くべき聲前の聲であります。故に圓悟も「鐵餛飩」と著語した。「鐵餛飩」とは、鐵で作つた所の餛飩で、鐵製の餛飩は堅くて喰べられぬ。齒も立たぬとは此のことであらう。

江國春風吹不起、鷓鴣啼在深花裡、三級浪高魚化龍、癡人猶辱夜塘水。

(訓讀) 江國の春風吹き起す、鷓鴣啼いて深花裡に在り。三級浪高うして魚龍と化す。癡人猶辱む夜塘の水。

(講説) 七言絶句の體を以て雪竇が頌出した。「江國の春風吹き起たす」法眼の居つた清凉山は、楊子江に近い故、江國と言つたが、今は江東でも向島でも何處でもよい。時は恰も彌生三月の頃であつて、風は吹くとしもなく、天地霞み渡りて、正に之れ春色駘蕩である。「鷓鴣啼いて深花裡に在り」此百花爛漫の中で、鷓鴣と云ふ鳥が、節面白く歌ふて居る。其姿形は花深き所に在つて見えないけれど、其聲の玉を轉がすが如く聞える所から、鷓鴣鳥の居ることが分る。「心ある人に見せばや津の國の、難波あたりの春の景色を」と云ふ古歌の有様であります。之れ法眼和尚の佛凡の境を超脱して居る有様ぢや。此二句で本則は既に頌し盡してあつて、後の二句は餘裕である。慧超は牛に騎して居ながら、其牛を覚めて居る、百花爛漫たる中に在りて、猶ほ春を探がさんとして居るが、春は枝頭に在つて既に十分である。法眼和尚は、江國の春風吹き起たぬ處に、鷓鴣の花裡に轉ずるを聞いて、樂んで居る。先づ再三再四吟誦して、其聲前の一句に觸るゝがよい、總て頌は幾度か吟誦する中に、其玄旨に觸るゝ時があるから、其玄旨に觸るゝまで飽かず吟誦するがよい。「三級浪高うして魚龍と化す」此句は龍門の故事を引き來つて、宗旨を示したので、往昔、夏の禹王が水を治むる時、河南府龍門縣の龍門山の瀑布を、三段に切り落して、其水を排除した。故に之れを三級と云ふのであります。そし

て此三級に就いて又俗説が附いて居るので、其三級を飛び超えて、溯り得る魚は化して龍と爲り昇天するを得る、所謂鯉の溜上りであります。今慧超が三級の瀑下に来つたけれど、果して龍と化するを得るや否や。三級の浪は高い故、普通の魚では飛び超えることは能きぬ。然し之れを飛び超えればグズ／＼して居らぬ。直ちに雲を呼んで昇天し、自由自在の力を得るのであります。『癡人尙ほ辱む夜塘の水。』これは鯉魚既に龍門を超えて昇天したのも知らずに、夜中松明振り立てながら、士手下に降つて鯉魚を穿索して居るやうな馬鹿者もある。此公案本則の言語に就き纏ひ、佛だの、慧超だの佛凡不二だの、即身是佛だの、佛臭い者を見付けやうとして、汗水流して尋ねて居る輩がある。癡人には鯉魚のやうなものは見付かりやしない、恰も痴人夜暗堤塘の水を辱んで、鯉を頻りに搜して居るに似たりぢや。柳の下には何時でも鱸が居らぬぞ、間違々々して幽霊にでも出會はぬやうに注意するが可い、三級浪高うして魚龍と化す、癡人は尙ほ辱む夜塘の水。

第八則 翠 岳 夏 末

垂示云、會則途中受用、如龍得水、似虎靠山。不會則世諦流布、羝羊觸藩、守株待兔。有時一句如踞地獅子。有時一句、如金剛王寶劍。有時一句、坐斷天下人舌頭。有時一句、隨波逐浪。若也途中受用、遇知音、別機宜。識休咎、相共證明。若也世諦流布、具一隻眼、可以坐斷十方、壁立千仞。所以道、大用現前、不存軌則。有時將一莖草、作丈六金身用。有時將丈六金身、作一莖草用。且道憑箇什麼道理、還委悉麼、試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、會する時は則ち途中受用、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。會せざる時は則ち世諦流布。羝羊藩に觸れ、株を守つて兔を待つ。有時の一句は、踞地獅子の如く、有時の一句は、金剛王寶劍の如く、有時の一句は、天下の人の舌頭を坐斷し、有時の一句は、隨波逐浪。若し也た途中受用ならば、知音に遇ふて、機宜を別ち、休咎を識つて相共に證明せん。

若し也た世諦流布ならば、一隻眼を具して、以て十方を坐斷して、壁立千仞なる可し。所以に道ふ大用現前軌則を存せず、有る時は一莖草を將て丈六の金身と作して、用ひ。有る時は丈六の金身を將て、一莖草と作して用ふ。且く道へ、箇の什麼の道理にか憑る、還つて委悉す麼、試みに擧す看よ。

(講説) 第八翠巖夏末の一則を前に置いての垂示。「會する時は、途中受用。」途中とは、常に家舎と對した語となつて居る。家舎とは自受用底で、向上修養門であつて、途中とは他受用底で、向下布教門と謂ふてもよい。或は上求菩提は家舎で、下化衆生は途中であると云つてもよい。會するとは、會得で、合點したと云ふ程の意である。一步進んで悟りの開けた所と謂つてもよい。悟りの開けた時は何うかと云ふに、其向下布教の活動、下化衆生の働きの初まつて、大用自在の活動が現はるゝのである。其大用の現前する状態は「龍の水を得るが如く、虎の山に靠るにも似たり」である。龍は剛い動物であるけれども、水なき所には働けない。虎も猛々しい動物であるけれども、水中に在つては如何ともする能はずである。即ち悟りの開けた後は、龍の水を得たる如く、猛虎の山に靠るが如くである。然らば「會せざる時は世諦流布」で、世諦は俗諦と云ふも同じであつて、所謂世俗である。世諦流布は凡情に墮落すること、凡そ卑力の菩薩衆生を救はんとして、却つて溺ることがあるが、全く之れである。解脱自在の有様とは全く反對である。即ち「羝羊藩に觸れ、株を守つて兔を待つ」と謂ふべし

羝羊觸藩は「易經」に出て居ること、羝羊は羊の一種であつて、其角甚だしく曲つて居る。若し猛獸の襲來すれば、忽ち木に登りて角を枝に懸け、以て其難を免れると云ふ利口な羊であるが、一と度び此角を藩の間に突き込む時は、其頭を引き出すことが能きぬ。故に羝羊藩に觸るとは進退全く谷まき、二進も三進も動かぬ貌であります。又或る百姓が、或る時木の伐り株にて、兔を見附けて捕えたそれより毎日其株を守つて兔の來るを待つたと云ふ話があるが、實に琴柱に膠するとは之れを言ふべきか、其働きの無い有様は笑ふに堪へて居る。我が國でも、柳の下には毎も鱈は居らぬ、と云ふ。然るに會せざる者に爲ると、羝羊の藩に觸るゝが如く、柳の下に鱈を追ふが如きことをして居るのである。以上は第一段で、第二段に至つては、開悟した師家の弟子を接得する状態を述ぶるのであります。「或る時の一句は、踞地獅子の如く有る時の一句は、金剛王寶劍の如く有る時の一句は、天下の人の舌頭を坐斷するが如く、有る時の一句は隨波逐浪」茲に四句出て居るが、之れは臨濟の四喝と同じで句と云ふも敢て言句のみを指すに非ず。或る場合には其接得の様は、恰も獅子奮迅の勢を示しつゝ踞坐して居るやうなことがある。又或る場合には金剛王の寶劍の如く、其銳利なること傍へも寄せぬ有様である。普通の劍でも、ウツかり鞘は拂はれない。況んや金剛王の持つて居る寶劍であるから、一と度び之れを揮れば、八萬四千の煩惱一時に截斷されるのである。又或る場合には一言を以て示せば、天下の人にはウンとも言はせぬ妙言を吐き出すのである。天下一人として其舌根を斷たれざる者

なく、天下の人一時に嘔すると云ふ有様。實に其師家の接得に遇はゞ、誰れが能く邪執を止めん。以
 上の三句は把住し奪ふのであるが、師家の撻着する所は、唯奪ふのみを以て能とせな、或は放行を
 與へて、其繩を弛ぶる場合もある。即ち第四句の場合此放行の有様であつて、隨波逐浪と示された
 のである。放す時も亦自由自在なもので、海岸濱邊で、寄せては返へず大浪小波があるが、其浪に隨
 つて行つて、而かも波に濡れぬのである。或は之れを和泥合水とも和光同塵とも云ふのである。次に
 第三段になると、第一段を承けて「若し也た途中受用ならば、知音に遇ふて機宜を別ち、休咎を識つ
 て相共に證明せん」と示す。所謂途中受用底で會得して居る者ならば、知音に遇ふたのであるから、
 互に其大用の機宜に應じて居るか否かを分別し、又互に其休と善い方も、咎と惡い方も、知り合つ
 て居て、證明するのである。知音は互に知り合つた者のこと。然し之れと反對に「若し也た世諦流布
 ならば、一隻眼を具して、以て十方を坐斷して壁立千仞なる可し」世諦流布と開悟に至らざる者には
 師家も一隻眼を以て睨み付けるのである。眼は通例二つある、兩眼なき者は片目であつて役に立たぬ。
 處が摩醯首羅の如きは三目八臂あると云ひ、兩眼の外に堅に一目あつて、恐ろしき貌をして居る。印
 度の神様もあるが、今悟りの眼は一隻眼でよい、二眼も三眼も要らぬ。右に偏せず、左に偏せざる、
 唯一目のみを具することが必要である。其上十方を坐斷して、佛も外魔も睨ふ能はざるやうにする
 ので、手の付けやうもないのである。壁立千仞も同じこと、前句は平面的に示し、此句は堅立的に示

したので、其眞直ぐに突立つた有様は、斷崖削壁の如くであつて、爪もかゝらぬ有様である。如何に
 愚鈍漢と雖も、師家より此くの如く峻巖なる接得を蒙りては、ウンと再び首を擡げて、參禪しやうと
 云ふ勇氣も起きて來るのである。實に第二段に説いたやうな師家に爲れば、途中受用底の者にはそれ
 なりに、又世諦流布の徒にはそれなりに、自由自在の活作用を示して接得するのである。次は第四段
 となる。「所以に道ふ大用現前軌則を存せず、有る時は一莖草を將つて丈六の金身と作して用ふ」故に
 師家が接得する時は、上に示したる如く、一定の規則に依つて居らぬ。凡そ佛祖が衆生に向ふ時は、
 隨類應機で、斯くせざるべからずとか、斯くすべしとか、軌則に依らず、自由自在に其衆生を化益せ
 らるゝのであります。一定の軌則に拘泥して居るやうでは、決して眞實の悟りでない。されば有る時
 には一莖草を取つて、直ちに一丈六尺の金軀の佛身として用ゐる、經文に依ると、一日釋迦如來が須
 達長者と共に、一伽藍を造營すべき敷地を見て廻はつたことがあります。其時或る空地があつて、如
 何にも佳い場所であつたから、須達長者が、此處が好い場所だと思つて眺めて居ると、釋迦如來が、
 一莖の草を引き抜いて、之れを立て、

「既に梵刹を建て畢んぬ。」

と言はれたが、大用現前底の時は、實にこんなものであります。唯一莖草を以て金軀とするばかりで
 ない、其反對の活用も有るのであります。「有る時は丈六の金身を將つて、一莖草と作して用ふ」此自

由自在の大有が無くば、師家たるの資格が無い。鐵を點じて金とすることも得れば、金を點じて鐵とすることも能きねばならぬ。建立門も掃蕩門も共に能きねば大師家となれぬ。然るに途中受用底の師家は、實に活用自在無礙である。且く道へ箇の什麼の道理に憑る、還つて委悉す麼試に擧す看よ」これは一體什麼云ふ譯でさうなるのか、知つて居るか、分かつたか。マ一看よ翠巖の一則を。

擧翠岳夏末示衆云、一夏以來、爲兄弟説話、看翠岳眉毛在麼。保福云、作賊人心虛。長慶云、生也。雲門云、關。

(訓讀) 擧す翠巖夏末に衆に示して曰く、一夏以來、兄弟の爲に説話す、看よ翠巖が眉毛在り麼。保福云く、賊と作る人心虚す。長慶云く、生ぜり。雲門云く關。

(講説) 翠巖和尚とは、雪峰和尚の法嗣で、明州翠巖に住して居られ、諱は令修と云はれた禪師である、傳は「傳燈」十八に載つて居ます。「翠巖夏末に衆に示して云く」夏末と云ふも、單に夏の終りと思ふと違ふ。印度では夏は禁足護生で夏安居と云ふ修行する。此間は最も生物蟲類の發生する時であるから、一夏九十日間禁足して修行し、以て一方蟲類の生命を護るのであります。外出すれば不知不識の間に殺生罪を犯すからであります。此安居の期間も「圓覺經」等に依れば、大夏百二十日、中夏百日、小夏九十日としてあるけれど、先づ三ヶ月以上の修行をするのであります。此示衆は夏安居

の末日に及んでの示衆である。「一夏以來兄弟が爲に説話す、看よ翠巖が眉毛在り麼」一夏の間兄弟諸子の爲に説法したが、山僧の眉毛が未だ有るかないか見て呉れよと云ふ。之れは佛法を説くにも、誤つて説いた者は、其罰で眉鬚墮落すると云ふ故事も有るのであります。此故事に依つて、翠巖が語を作つたのであります。一體全體佛敎と云ふものは、只言句を以て説き示すべきものではない、それを一夏の間説きつゞけたのである。故に誤つた邊もあるかも知れぬと云ふは、只其語の表面のみのところである。翠巖和尚の眞意に至つては、容易に知り得べきものでない。宜しく室内にて研鑽すべきであります。去りながら此鉤に釣り上げられた三人あつて、各々其所見を述べて居る。勿論一隻眼を以て見届けたのであらう。若し人間普通の兩眼を以て、是非したならば、忽ち形式上の弊に墮するのである。翠巖和尚は、俺も一夏九十日間馬鹿な饒舌をしたが、眉毛が有るか無いか、トツクリ見て呉れと顔を突き出したのである。「保福云く賊を作すの人心虚す」保福も、長慶も、雲門も、共に雪峰門下であると云へば、各々所見を一時に見ることが能きて、百花一時に開くの感がある。虚すとはビクツクと云ふことで、盜視、をする人の心はビク／＼して居る。翠巖も賊徒と見做されたわい。何を見て保福は恚く言ふか。「長慶云く生ぜり」長慶は又挨拶して云く、生ぜり、フサ／＼と生えて居ます、美事なものですと。「雲門云く關」雲門に至つては、尙ほ更分らない挨拶をして居る。關と云へば昔は箱根の關とか、或は白川の關とか色々の關があつたが、此關は却々雞鳴狗盜では透れぬぞ、衲僧の胸ふく

病ぢや。何れも室内に於て調ぶべきことであります。先づ諸子は、茲で翠巖和尚に眉毛の有無を問はれたなら、何んと答へるか、一つ力を入れて答へて見るがよい。此關の字の如きも、只全身の力を用ひて、大聲一番關と云つた丈で、夫れでよい杯と思ふ輩は、大なる誤りである。白隠禪師なども此公案に就いては、能く／＼骨折られたものであります。故に此關の字に著語して、

「瞋拳笑面を打せず。」

と云はれた。鐵拳を揮つても、笑つて居る赤兒の顔に打たれぬわいと言はれた、此著語が分らなければ、無論關の字は通れない、難關であります。

翠岳示徒、千古無對關字相酬、失錢遭罪、潦倒保福、抑揚難得嘮嘮翠岳、分明是賊、白圭無玷、誰辨眞假、長慶相諍、眉毛生也。

(訓讀) 翠巖徒に示す、千古對無し。關字相酬ゆ失錢遭罪。潦倒たる保福、抑揚得難し。嘮々たる

翠巖、分明に是れ賊。白圭玷無し、誰か眞假を辨ぜん。長慶相諍んず。眉毛生也。

(講說) 「翠巖徒に示す、千古對無し」翠巖和尚の示衆は、實に千古比類の無い所の示衆であると、

翠巖和尚を、先づ須彌の頂上まで卓上したのであります。若し對へんと欲する者は、速に出で來れと、雪竇和尚大音聲に呼び立て、居る趣が見える。諸子先づ問ふ、果して對へ得るや否や。關字

相酬ゆ失錢遭罪」雲門は對へたには對へたが、失錢遭罪ぢや。唐の時代だけに金錢を失つた者は罪科に處せらるゝと云ふ法律が出た、何んといふ割の悪い法律であらう。日本でも酒盛つて尻切られたと云ふことがある。之れと同じ譯だ。雲門が失錢遭罪したものが、翠巖が失錢遭罪したものが、何れであらう。「潦倒たる保福、抑揚得難し」潦倒は老倒と同じく老耄した老いぼれのことである。然し此潦倒も今は反意で取るのである。表面的の老いぼれ爺の保福めがではない。反對に無上に讚歎する時の意になつて居ます。能く斯う云ふことがあるものだ。譬へば友人などで、實に我が意を得た事を仕た時などに「野郎仕居つたなとか、畜生行つたぞ」など云ふことがある、其野郎や畜生と同じく、反意で、却つて賞める時の意になつて居る。ウヌ老いぼれ保福めか、賊を作す人の心虚すと云つたが、抑えたのやら、揚げたのやら、少しも分らぬ。何處までも雪竇は褒めて居る。然し此潦倒たる保福の言に心許すと、スカタンを喰ふぞ、壺被るぞ、注意せざるべからずとの意もある。唯夫れ雪竇位の研鑽を経て居れば、滅多なことはないぞ。「嘮々たる翠巖、分明に是れ賊」嘮々たるとはガヤ／＼多言を吐くと云ふことで、彼のガヤ／＼坊主の翠巖は、疑ひもなく是れ賊で、眉毛が有るか、無いかなど、言つて居るが、その胸を見よビク／＼して居ることの通りぞや。「白圭玷なし誰れか眞假を辨ぜん」然し此白圭は更に玷がないから、眞とも假とも辨別し難い。「長慶相諍んず眉毛生也」長慶は何を諍んじて居るのであらう、白圭玷なきことか、眉毛生也で、フツサリと生へて居ますとやつた。白隠は此

生也に著語して、

「將に雨らんとすれば山色甚だ近し」

と言つて居る。要するに文字を解し、文字を用ひても駄目なこと、宜しく一隻眼を以て、古人の精神を徹見せざるべからず。理窟をコネ廻しても、今微動せる地震に飛び上るやうでは、未だし。大に修養に修養を重ね、活潑々地の妙用自在の身とならねばならぬのであります。

第九則 趙州東門西門

垂示云、明鏡當臺、妍醜自辨、鑊錮在手、殺活臨時。漢去胡來、胡去漢來、死中得活、活中得死。且道到這裏又作麼生。若無透關底眼、轉身處、到這裏灼然不奈何。且道如何是透關底眼、轉身處、試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、明鏡臺に當つて、妍醜自ら辨ず、鑊錮手に在り、殺活時に臨む。漢去り胡來り、胡來り、漢去る、死中に活を得、活中に死を得る。且く道へ這裏に到つて又作麼生。若し透關底の眼、轉身の處無くんば、這裏に到つて灼然として奈何ともせず。且く道へ如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處、試に舉す看よ。

(講説) これは趙州の東門西門の一則。先づ本則を的に懸けて圓悟の垂示があります。云く「明鏡臺に當つて妍醜自ら辨ず」一點の曇りなき明鏡、仲秋稀に見る明月の如き鏡が、其臺の上に据え付けられて有る時は、一切の眞相を映出して偽らぬ。美人至れば美人の顔現はれ、醜婦來れば醜婦現はる。

老翁は老翁、老嫗は老嫗、花は紅に柳は緑に、些の誤りなく、其儘映じ出すのであります。其炯たる眼光を以て瞥つと見れば、賢愚曲直明かであつて、明鏡の中を覗くが如くであります。師家の眼敢て光らずと雖も侮るべからず。「鏌鋂手に在り、殺活時に臨む」妍醜好悪長短方圓、其儘寫し出すのはこれ明鏡の徳である。鏌鋂は寶劍の名であります。此鏌鋂の寶劍を手にすれば、殺活自在、活かさんと欲すれば活かし、殺さんと欲すれば殺す、如何なる巨漢の出で來るも、如何なる惡漢現はれ來たるも、此鏌鋂の寶劍さへ持つて居れば恐るゝには足らぬ。其殺活の權は鏌鋂を持つ者に在る。臨機應變時に臨んで或は殺し或は活かす。之れ亦此寶劍に具する徳である。「漢去り、胡來り胡來り漢去る、死中に活を得、活中死を得る」此四句は上を承けて居るが、隔句で見ねばならぬ。其明鏡裏を見て居れば漢來るに隨つて漢寫り、漢去るに隨つて漢滅す。胡來れば胡映じ、胡去れば胡滅す。漢は支那中國で、胡は漢の塞外夷を云ふ。又鏌鋂の寶劍に接すれば死なんとする者も活き、活きんとする者も死す。其寶劍を持つ人の意志一つにて、殺活は自由自在なのである。そして此四句は正に、師家の作略を示したので、即ち本則趙州和尚の腕前を讚めて居る。「且く道へ、這裏に到つて又作麼生」此明鏡臺に對つたなら何うだ、隠しても隠されまい。此寶劍下に在つては何うする、逃げても逃げ了せまい。此時大死一番すれば、大活現前して、寶劍下に於て、自由に身を轉じて活路を開き得るのである。「若し透關底の眼、轉身の處無くんば、這裏に到つて灼然として奈何ともせず」若し夫れ透關底の眼、轉

身の處あらば善し、若し透關底の眼もなく、轉身底の處も無くんば、明鏡臺にムザ〜と其醜貌を寫し、鏌鋂寶劍下に生命を捨てねばならぬ。蛇に睨まれた蛙の如く、奈何ともすること能はず、唯だ手足竦み、全身慄へるばかりであらう。「且く道へ如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處ぞ」然らば其透關底の眼とは如何なる眼ぞ、轉身の處は如何なる處ぞ、言ふて見るがよい。透關は佛祖の親しく透得せられた關門を云ふので、險惡極まる箱根の關所をも通り抜けた程の眼力と云ふこと、此眼力あつて初めて寶劍の下にも活くべきである。轉身は身をヒラリと轉ずること、進まんと欲して進む能はず、退かんと欲して退くこと能はざる、進退全く谷まつた時に於て、轉身活路を開くを云ふ。之れ又普通の者には能きざる早業である。敢てクド〜言ふには及ばぬ、此趙州の早業閃電光にも勝つて居る。「試に擧す看よ」

擧僧問趙州、如何是趙州。州云、東門西門南門北門。

(訓讀) 擧す僧趙州に問ふ、如何なるか是れ趙州。州云く東門西門南門北門。

(講説) 趙州和尚のことは、第二則で少しく演べて置いたから重ねて言ふに及ばぬ。然し趙州は並大抵の和尚でない。一日鎮州の大王趙州に至る。侍者之れを趙州に告ぐ、云く「大王來れり」大王が御出でになりましたと告ぐるや否や、趙州曰く「大王萬福」と。早や既に大王の健康を祝して居る、

御機嫌宜うとやつたので、侍者曰く、

「大王彼方に在つて未だ山門に到らず。」

と辯解した、正直な侍者だ、州曰く、

「大王來也。」

趙州は再び前言を繰り返して居る。黃龍南之れを頌出して曰く、

「侍者唯知奉客、不レ知身在帝京、趙州入レ草求レ人、不レ覺渾身泥濘。」

と、能く趙州のストラ／＼した腕力を言ひ盡して居る。實に趙州は鑊の寶劍を手にして居ると共に、亦透關底の眼を有し、轉身底の處も有るのであります。「僧趙州に問ふ如何なるか是れ趙州」一日趙州和尚の前に來つて合掌した僧がある。此坊主、果して如何なる坊主か、顔色漆の如きか、知らず、眼光人を射るか知らず、唯煮ても焼いても喰へぬ坊主であらうぞ。何を言ひ出すかと思へば、

「如何なるか是れ趙州。」

と問ふた。無論知らずして向ふのではない、知り切つて居て問ふのであるから、之れは驗主問である和尚果して何と答へるか、試しを打つたのであります。即ち趙州と云ふは趙州城のある町の名であります。町の名であると共に其地名を取つて人の名にする。恁う云ふ例は甚だ多いので、殊に支那では然うで、鎮州であるとか、瀋山であるとか、天臺であるとか云つて、其地名を直ぐ様人の名の代

りに用ゐて居る。其處で此坊主若し地名であると和尚が答へたら、我が前に立つ大入道は抑も誰れぞと一喝を浴びせて呉れやう。若し和尚が、それは己れのことぢやと眞正直に答へたら、此趙州城外一箇の趙州無しと竹篋返しに打ち込んで遣らうと、此デイレンマを有つて問ふたのである。罷り間違へば和尚と引ツ組んで、物をも言はせまいと云ふ見幕、扱て趙州は此場を何んと切り抜けたであらう固より之れ位の事で間違つてやうな趙州ではない。「州云く、東門、西門、南門、北門」四門を開いて客を待つ中に清涼の池あり、暑中殊に暑い日には、其清涼の池に遊ぶも可からう。趙州城にも四門あり、南門北門東門西門があるけれど、私の所にも四門あるぞと、スーと四門共に開いてある。然し此四門を通過し得る者は果して如何なるものであらう。龍樹菩薩は、

「佛教に無量の門あり、世間の道に難あり易あり。」

と言はれた。無門和尚は無門の門ありと謂つて居られる。今趙州和尚は東門あり、西門あり、北門あり、何れなりとお望み次第、お勝手次第と言はれる。然しながら入門の資格なく、入門の作法なき者來れば、東門もピンヤリぢや、南門もピンヤリぢや、西門北門亦其の通りぢやぞ。如何に強力ありとも此門は開けまい、如何に小さくとも蟻の通る隙間もないと言はれる。仁王の門番かと思へば、和尚自ら門前に立つて居る。此坊主も流石に當てが外れ、豫想が違ひ、唯呆然として其門前に在るのみ。門は十分に開いてあるが、和尚の門番とあつては却々容易に這入られない。故に圓悟も「開也」と著

語した。「開也」で開き切つてある。趙州和尚の誰何を受けず、難なく門内へ通入し得る者あらば試みるがよい。斯ういふことは、提唱や講義の上では能きぬ。宜敷室内の調べに屬すべきだが、眞實此四門を透入し、清涼の池に舟を浮べて、納涼の能き者があつたなら、達磨と共に楊柳夏月の歌を唄ひ得る者である。ところが釋尊にも斯ういふ例があつて、能く似て居るから面白い。或る日一外道が釋尊の前に來り、手に一雀子を握つて居る。外道釋尊に問ふて曰く、

「此雀子死とせんや生とせんや。」

死んで居るか生きて居るか云ふ問ひであります。其意は釋尊若し死と答へなば、其儘出し、生と答へなば握り殺して出さんと云ふ料簡であります。釋尊は既に此外道の意志の存する所を知るが故に、敢て生とも死とも答へない、黙して鬪を跨いて、外道を顧み呼んで曰く、

「是れ出とせんか、入とせんか。」

と。外道既に其意を看破せられしを覺り、合掌三拜して其弟子と爲つたといふ。之れは類則であるけれど、總て其意志を看破せらるゝやうでは駄目だ、須らく無繩の繩を以て縛するやうでなければ、到底伶俐な猿猴は縛し去ることは能きぬ。

句裏呈機劈面來、劈迦羅眼絶ニ織埃、東西南北門相對、無限輪鎚擊不開。

(訓讀) 句裏に機を呈して劈面に來る、劈迦羅眼織埃を絶す、東西南北相ひ對す、限り無き輪鎚撃てども開けず。

(講説) 「句裏に機を呈して劈面に來る」此趙州に向つた僧も、句裏に機を呈して居る所は可愛い。然かも自身に於ては、全身の力を出して居るので、劈面に向つて來た所には、定めて臭汗背を流れて居たであらう。「如何なるか是れ趙州」と向つて來た勢ひは素晴らしいもので、大抵の者なら、此一撃の刀下に參つて了ふ。身を轉じてヒラリと脇に避け、思ふ様空を切らせる者は少い。所が趙州は美事之れを避けて轉身して居る所は、一代の師家として耻づかしからぬ振舞と云ふべしであります。「劈迦羅眼織埃を絶す」劈迦羅は梵語であつて、譯して堅固と云ふ、今は確かと云ふ位に見て置けばよい。流石は趙州和尚で、此危機一髮と云ふ場合にも、ユツタリと身を轉じて居る。些の狼狽は無かつた。其確かりした慥かな眼玉であるから、一瞥して其腹のドン底まで見抜いて了つた。其眼の明かなこと明鏡の如くで、塵埃をも留めて居らぬ、サツパリとしたものである。「東西南北門相ひ對す」此一句は雪竇が趙州の語を奪つて、而かも趙州の眼裏沙を撒し土を撒し、織埃を絶した様子を示して居る。趙州城を圍む所の城壁があるが、又四門相對して通じて居る。東門西門南門北門、東より來る者は東門より入るべく、西より來る者は西門より入るべし。又、南より來る者は南門、北より來る者は北門、門は其兩扉を排して十分に開いてある。馬來れば馬、牛來れば牛、人來れば人、更來れば吏、囚來れば

囚、誰れでも自由に通ずるを許すのであります。然しながら四門開くと雖も、自ら趙州城に背却して去る者は、何んとも致し方がない。中に涅槃清涼の池があつても、此清涼の風を望まざる者は、門に入る事が能きませぬ。「限り無き輪鎖撃ても開けず」如何なる輪鎖を持ち來りて此門を撃破しやうとしても、いつかな開かばこそ、鎖が砕けても門は開かれない。それは勿論打ち方が悪いので、達者は打たずして此門を通り得る、元來開いてあるから。如何なるか是れ趙州と問ひ掛けた勢は、如何なる難關難門でも撃破すべう見えた。豪いものであつたが、東門西門南門北門と四門を開かれて入ることが能きぬ。何れの門に廻はつて見ても、入らうとすれば、門は自らガラ／＼ピシヤリと閉ち鎖されて了ふのであります。東門西門南門北門、西門ピシヤリ、北門ピシヤリであります。縱令手力雄命が來ても、動くことではありませぬ。

第十則 睦州掠虚頭漢

垂示云、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、若論戰也、箇箇立_ニ在轉處。所以道、若向上轉去、直得釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、天下宗師、普皆飲_レ氣吞_レ聲。若向下轉去、醯鷄蟻蠓、蠢動含靈、一一放_ニ大光明_一壁立萬仞。儻或不上不下、又作麼生商量、有_レ條攀_レ條、無_レ條攀_レ條、試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、若し戰を論ぜば箇箇轉處に立在す。所以に道ふ若し向上に轉じ去らば、直に得たり、釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、天下の宗師普く皆氣を飲み聲を呑むことを。若し向下に轉じ去らば、醯鷄蟻蠓蠢動含靈、一々大光明を放つて、壁立萬仞ならん。儻し或は不上不下ならば、又作麼生か商量せん。條有れば條を攀ち、條無ければ例を攀づ、試に舉す看よ。

(講說) 本則を講說する前に睦州和尚の事を一言演べて置かねばなりませぬ。傳は「傳燈」及び「會

元」に擧げてあるから、それに就いて見るがよろしい。陸州陳尊宿、諱は道明、師幼にして開元寺に往つて佛を禮し、歸り來つて父母に出家を請ひ、父母之れを許して出家したのである。出家後は持戒精嚴、學三藏に通ずといふ。高僧大德は概ね持戒精嚴、學三藏に通ずと云ふが、これも只何の氣も無く、持戒精嚴、學三藏に通ずる高僧であつたと見て通つては、何等の價値もないが須らく氣を付けて熟讀玩味すべきであります。禪宗と云ふものは、戒律など律式に亘つたことに要はないと、近時の者は思つて居る。又坐禪修行するには、學問も何も要らぬと心得て居るが、然うではありませぬ。禪宗に於ても戒律は輕んずる所ではない、寧ろ大に尊む所であつて、殊に禪宗には禪宗だけの戒法もあります。百丈禪師などは其邊に力を用ひて、禪者の守るべき清規を制定されたのであります。又學問の方には於ても然うで、學問も何もなくて、徒らに座禪しても、根柢なき家屋の如くで、眞實見性悟道には達し難い。持戒も學問も、凡て見性の根柢となる基礎であるから、決して輕視することを許さない。陸州和尚は持戒精嚴で、學は經律論の三藏に通達して居られた。後黃檗の希運禪師に參じて、其法を嗣がれ、四衆の請ひに依つて觀音院に住して居られた。門下常に百餘人あつて、諸方より歸慕され、咸く陳尊宿と稱して敬つてゐた。後開元寺に歸つて、此處に住して居られたが、其當時草鞋に編んで母を養ふとあります。是等も大に意味あることでもあります。既に出家すれば、母など顧みないなど云ふ考へは、勿論誤りであるが、さればと云ふて、一家の尊宿たる者が、手づから草鞋を作つて母を

養ふとは、意味ないことではない、大に意味がある。先づ寺に屬する三寶物は、母の爲に費すことはならぬ。在俗の母の爲めには、自ら作つて得た物を以て養ふべきであります。故に陸州和尚は草鞋を作つた大草鞋を城門の前に懸けた。巢之れを取り棄てんとしたけれど、遂に力竭きて其草鞋が上がらなかつた。爰於て巢歎じて陸州城には大聖人ありと言ひ、城を捨て去つたと云ふ奇蹟もあるが、大徳でなくば能きぬことであります。和尚は世壽九十八まで生きた、長生きの方であります。茶毘に附した所が、舍利雨の如くであつたといふ。扱て此陸州が一僧に問ふた本則、圓悟の垂示に云く、「恁麼、不恁麼、不恁麼」凡そ此世の事は總て相對であります。故に善に非されば惡、惡に非されば善、邪に非されば正、正に非されば邪であります。智慧と慈悲、佛界と魔界、空と有、一と異、皆悉く相對して居るのであるから、一に非されば他、他に非されば一であります。恁麼は斯くの如しで、不恁麼は斯くの如くならずであります。人事萬般此一語で判斷し盡される。イエスとノーぢや。然りと然らずぢや。さうぢやくと云ふは肯定許す方で、いやくと云へば否定で肯がはない方であります。此肯定と吟定とを措いて他に何物もない。把住と放行、活かすと殺す、奪ふと與ふと此二つであります。そして此殺活與奪の權は、天下の大宗匠でなくては握られない。「若し戰を論ぜば箇箇轉處に立在す、然し其恁麼と許すのも、不恁麼と奪ふのも、只見方が違ふだけで、勝つたと云つても、敗れたと

云つても可い。富士山は西に在ると云つても、東に在ると云つても、見る者の地位を異にして居るからのこと。東京の者は西と云ふべく、西京の者は東と云ふべきぢや。故に天下の大宗匠も、其轉處に随つて、或は恁麼と許し、或は不恁麼と奪ふのである。所以に道ふ、若し向上に轉じ去らば、直に得たり、釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、天下の宗師、普く皆氣を飲み聲を呑むことを、扱て暫く向上門と向下門と其轉處を異にして調べて見やう。向上向下は常に云ふ如く、佛界に向ふと、衆生界に向ふとの別で、上菩提を求めて修行する所は向上門であつて、下衆生を化する所は向下門であります。扱て今上求菩提で向上に轉すると、天の天涯より地の地涯に至るまで、釋迦彌勒、前佛後佛、文殊普賢の大菩薩、千聖萬聖、天下の宗匠綺羅星と列んで居つても息も吐かせぬ。若し向下に轉じ去らば、醜鷄蟻蝶、蠢動含靈、一々大光明を放つて、壁立萬仞ならん。下化衆生の向下門に轉すれば、これは亦如何なこと、醜鷄と鹽辛や、蛆虫や、蟻蝶と蠅蚋より、其他蠢動含靈で、顯微鏡にかけねば見えぬアミーバーの類より、瓦礫土木に至るまで、一々大光明を放つて居て、寄つても附かれない。光明は勿論、心の光であります。草木國土光明赫々、眼も眩するばかりで、一々元來佛である。儻し或は不上不下ならば又作麼生が商量せん。向上門向下門と相對して分けて見れば此通りであるが、若し向上門にも非ず、向下門にも非ざる所如何。即ち相對に互らざる絶對の境界は果して如何なるものぞ。一條有れば條を攀ぢ、條無ければ例を攀ぶ。昔からの條例があるから、其條例に依つて見るべきで

あります。古來の公案皆之れ條例ぢや、此公案に依らないでは宗旨の標準が分からぬ。今不上不下の絶對の境地を見やうと思ふものは、須らく陸州掠虚頭漢の一條例に依れ。『試みに擧す看よ』

擧陸州問僧、近離甚處。僧便喝。州云、老僧被汝一喝。僧又喝。州云二喝四喝後作麼生。僧無語。州便打云、這掠虚頭漢。

(訓讀) 擧す陸州僧に問ふ、近離甚れの處ぞ。僧便ち喝す。州云く、老僧汝に一喝被らる。僧又喝す。州曰く、三喝四喝の後作麼生。僧無語。州便ち打つて云く、這の掠虚頭の漢。

(講説) 『擧す陸州僧に問ふ』陸州和尚一日或る僧に問はれた。『近離甚れの處ぞ』お前は此頃何處から來たか。『僧便ち喝す』此僧が喝した。此喝は一字關で、禪では咄とか露とか喝とか云ふ一字關を用ひる。これも絶大なる意義があつて言ふので、鴉のカーとは違ふ。人々悟得領解し冷暖自知するより外に仕方が無い。故に只人眞似する鸚鵡の如く喝したのでは所謂胡喝ぢや。白隱和尚の謂はれる通り鑄型に爲つて了ふ。先年棚橋大作といふ人が亡くなられた時、葬式の引導をして、衲がカーツとやつたら、門前に居並んで居た車夫連が、音羽屋ツと應じたことがあつて、思はず失笑したが、喝も只型に爲つては駄目ぢや、大に仔細あることぢや。臨濟は喝の本案であるけれど、臨濟は四喝と云つて、深遠なる意義がある。或る時の一喝は金剛王寶劍の如く、或る時の一喝は踞地獅子の如く、或

る時の一喝は探竿影草の如く、或る時の一喝は一喝の用をなさずと一々意味あるのであります。陸州和尚或る時一僧に向つて、

「此頃何處から来たか。」

と尋ねると、此僧一喝した、果して何喝であらう。此僧もスリ上げ坊主と見える。然し陸州元よりこんな喝で鼓膜を破られるやうな者ではない。「州云く、老僧汝に一喝せらる、ビックリしたわい。一段と上手であること明かである。僧又喝す」之れでもかと言はぬばかりに、大聲身を震はしてカアツとやつた。餘りカア／＼とやると、鴉と間違へられる。「州云く、三喝四喝の後作麼生」大分お前は喝をやるな、三喝四喝、千喝萬喝した最後の一喝はどのやうなものぢや。頭をウンと踏み付けられた、之れも師匠の慈悲で、餘り油揚の御馳走で口を迂らした報いぢや。「僧無語」頭を踏み付けられては物も言へまい。然し此僧無語なる所は、語に窮したやうに見えるけれど、無語却々價がある。文面では其處までは分らぬけれど、雪竇などは矢張然う取つて褒めて居ます。此僧先きの勢ひなら、ウヌと跳ね起きて喝する所であるけれど、無語甚だ味ありぢや「州便ち打つて云く、這の掠虚頭の漢」其處で陸州和尚は打つた、大に打つた、十分打つて置いて、此騙り者めと突ツ放した。此僧若し三喝したならば、陸州の前立を見た位であつたらうに、無語であつたお蔭に陸州の奥の院まで見届けることができた。陸州の一打は骨髓に徹したであらうけれど、亦掘り出し物であつた。實に是等の則は臨濟の宗旨を丸出しにして居て、千日並び照すが如く明かであります。

兩喝與三喝、作者知機變。若謂騎虎頭、二俱成瞎漢。誰瞎漢。拈來天下與人看。

(訓讀) 兩喝と三喝と、作者機變を知る。若し虎頭に騎ると謂はば、二俱に瞎漢と成らん。誰か瞎漢。拈じ來つて天下人に與へて看せしめん。

(講説) 「兩喝と三喝と、作者機變を知る」陸州の前に立つた僧、兩喝まで陸州に喰はせた。然し三喝四喝の後作麼生と抑えられて、一言も無い。此有様を其儘頌出して兩喝と三喝と云ひ、一僧と陸州とを並べて引き出した。雪竇法庭上に於て果して如何に判決せんとするか。一僧の一喝再喝して居る所も、勿論機變を見て居るのであるが、三喝四喝の後を問はるゝに及んで、ハタと喝を止めて了つた所は、流石に機變を知つて居る所であると稱揚した。怒るべき時には怒つても、止むべき時に止まない、其怒つたのも無功になる。泣くべき時には泣いても、黙るべき時に黙らないと、終には黙して呉れる者も無くなる。總て其機變を見て、靜動の働きをなさねばならぬ。「若し虎頭に騎ると謂はば、二人俱に瞎漢と成らん」若し此僧騎虎の勢ひで三喝四喝を連發したならば、陸州も此僧も、二人俱に瞎漢に爲つて了ふ。然るに此僧夙に機變を解し、連喝を廢して無語した爲めに、大に男振りを上げたの

であります。若しそれ然らずんば二人共に盲坊主の按摩同様、それぞれ一盲衆盲を引くと謂ふべし。盲目の行列も見つとも無いものぢや。「誰か暗漢」何處に盲目が居る、暗漢などは居さうにもない。二人俱に暗漢にあらず。「拈じ來つて天下の人に與へて看せしめん」雪竇大の字に爲つて力み返つて居る。遠からん者は音にも聞け、近からん者は目にも見よ、何處にか暗漢あるぞ。天下の人に看せてやるが夫れ此通りである。兩喝と三喝と、作者機變を知る。大衆分つたか喝！

第十一則 黃檗 唾酒糟漢

垂示云、佛祖大機、全歸掌握、人天命脈、悉受指呼。等閑一句一言、驚群動衆、一機一境、打鎖敲枷、接向上機、提向上事。且道什麼人曾恁麼來。還有知落處麼、試學看。

(訓讀) 垂示に云く、佛祖の大機、全く掌握に歸す、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑の一句一言、群を驚かし衆を動かす、一機一境、鎖を打し枷を敲く、向上の機を接し、向上の事を提ぐ。且く道へ什麼人が曾て恁麼に出来る、還つて落處を知る有り麼、試に學す看よ。

(講説) 圓悟は黃檗の唾酒糟漢の一則を前に懸けて置いて、大衆に向つて思ひ切り黃檗の大機大用を稱揚するのである。「垂示に云く、佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受く」三世の諸佛諸聖に、如何なる大機を有するも、歷代の祖師大德に、如何なる活機を有するも、それ等の大機大用は、悉く掌握に歸すで、黃檗禪師の手に有りと云ふのぢや。三世の諸佛、歷代の諸祖には、

衆生濟度の善巧方便、種々雑多の機用を示されたのであらうけれど、そんなことは一切括つて袋に入れ、それを黄檗は確かと握つて居られると揚げたら、大概黄檗も目を廻す位、上げられたであらう。そればかりか人天の命脉とあるから、梵天帝釋四天王を初めとし、人間世界は申すに及ばず、其殺活の權を有つて居る。丁度大元帥陛下の一命令は、全軍を自由自在に指揮能る力を持つて居ると同じだ。「等閑の一句一言群を驚し衆を動す」それから第二段に爲つて、大用即ち大慈悲門、衆生救濟の方面を示すので、別に意志を加へざる等閑の一句一言、エヘンでもオホンでもお早うと言つても、黙つて通つても、乃至は笑はうが泣かうが、總てそれ等の一句一言、一舉一動が、直ちに群衆を驚かしたり、動かしたりする力があるのである。「一機一境鎖を打し枷を敲く」一句一言は、口業に屬し、一機一境は身業に屬すと言つても可い、其一舉手一投足は、能く鎖を打し、枷を敲くのぢや。鎖とは罪人を縛するもの、枷は罪人の頸や手足に篋めて、其働きの自由を妨ぐる器具であるが、今參禪辨道の人、文字や言句の上に泥んで、文字言句の鎖で縛されて困つて居る者もあれば、或は又古則公案に篋まり込んで、二進も三進も動かれず、此古則公案の枷で苦んで居る者もあるけれど、一と度び黄檗禪師の一機一境に接觸すれば、忽ち打破されて了ふて、自由自在を得る、其舉足投足一進一退の些細な働きでも、斯くの如き活作用を興へられるのは驚嘆するばかりである。「向上の機を接し、向上の事を提ぐ」向上は毎も云ふ通りに上求菩提の方面で、恁う云ふ大善知識の一句一言、一機一境は、悉く

向上の大事であつて、苟ならぬのである。それが又有り難い所ぢや。「且く道へ什麼人が會て恁麼に來る」然らば古來斯くの如き大善知識果して有りや否や、有り有り、黄檗希運禪師こそ其人ぞと言はぬばかり、「還つて落處を知る有りや」落處を知る者は間誤々々しなけれど、圓悟に恁う言はれて、還つて間誤々々して居る者があるから際かさず「試に學す看よ」と止めを刺された。

舉黄檗示衆云、汝等諸人、盡是墮酒糟漢、恁麼行脚何處有今日、還知大唐國裏無禪師麼、時有僧出云、只如諸方匡徒領衆又作麼生。檗云、不道無禪、只是無師。

(訓讀) 學す黄檗衆に示して云く、汝等諸人、盡く是れ墮酒糟の漢、恁麼に行脚せば、何れの處にか今日あらん、還つて大唐國裏に禪師無きを知る麼。時に僧あり出で、云く、只諸方の徒を匡し衆を領するが如き又作麼生。檗云く禪無しとは道はず、只是れ師なし。

(講説) 本則は黄檗の墮酒糟漢の一則でありますが、黄檗禪師は、我が宗門に取つては大切な御方でありませう。禪師名は希運、閩の人で、幼にして黄檗山に上りて出家す。後百丈禪師に參謁して、得法し、洪州大安寺に住するや、學徒奔集して群を爲すと云ふ位盛んであつた。故に裴相國休公大禪院

を建立して、禪師を此處に請じたが、禪師は舊山を愛して、又黄檗と謂つたが、其門庭盛んにして利
幡高く翻へると云ふ有様であつた。そして『傳心法要』一卷は正に禪師の法語を集めしものである。
然れば禪師は法を百丈大智禪師に嗣いで、門下に臨濟義玄禪師が出来て、臨濟宗を大成したのも、實
に此義玄禪師の力であるといはねばならぬ。扱て黄檗禪師は身の長七尺、額に圓珠有りと云ふから、
既に常人と異つて居つたのであらう。天性禪を會すとあるから、之れも生れ付いて禪理を會得して御
座つたと見える。少し評唱に就いて評して行くから、評の所を聞いて見るがよろしい所謂生來の悟
りで、半可通ではない。師昔天臺に遊ぶ、路に一僧に逢ふ、與に談笑すること故より相識るがやうで
あつた。我他彼此の壁が無いから、肝膽相傾ぢや。其僧の風姿を熟視すれば、眼光人を射て、頗る異
相である。其處で借に行つて溪水の道に漲り溢れて居る所へ掛つて來た。乃ち杖を植て止ると、其
僧禪師を率ゐて共に渡らうとする。禪師は足の濡れるのを厭ひ、師先づ渡れと言へば、其僧即ち衣を
褰げて波を躡むこと平地を履むが如くで、而かも振り向いて渡來々々、來い〜と言つて居る。禪師
咄して云く、

「這の自了の漢、吾早く捏怪なるを知らば、當に汝が脛を斫るべし。」

其僧歎じて曰く、
「眞の大乘の法器なり。」

と言つて姿が見えなくなつたと云ふやうな話も傳はつて居るが、之れに依つても、其禪師の巍然たる
大機大用を推知するに難くはないのである。初め禪師百丈禪師の許に到るや、百丈問ふて云く、
「巍々堂々として什麼の處より來る。」

禪云く、

「巍々堂々として嶺中より來る。」

丈云く、

「何の事の爲ぞ。」

禪云く、

「別事ならず。」

百丈之れを聞いて深く法器と爲したと云ふが、馬を見るは伯樂に如かずぢや。次の日百丈を辭し去
らんとす。丈云く、

「什麼の處にか去る。」

禪云く、

「江西に馬大師を禮拜し去らん。」

丈云く、

『馬大師已に遷化し去れり。』
と注意して置いて、自ら馬祖大師に参じた時の因縁話を初めたのである。實に老婆親切も至れり盡せりぢや。

『我れ馬祖に参ず、祖、我れの來るを見て、便ち拂子を堅起す。我れ問ふて云く。此用に即するか、此用を離するか。祖遂に拂子を禪床の角に掛けて良久しふし。祖却つて我れに問ふて云く、此用に即するか、此用を離するか。我れ拂子を持ちて禪床の角に掛けた、其時祖は振威一喝を浴せられたが、三日も鬻に爲つて居た。』

と語るや、黄檗禪師は覺えず悚然として舌を吐いた。然し百丈は語を次いで云ふには、

『子已後馬大師に承嗣するや。』

と。檗云く、

『然らず、今日師の親切に因りて、馬大師の大機大用を見たり、若し馬師に承嗣せば、他日已後、我が孫兒を喪せん。』

文云く、

『如是々々、見師と齊しき時は師の半徳を減ず、見師に過ぎて傳授するに堪へたり、子が今の見處宛も超師の作あり。』

と。斯の如き問答往復を見ても、黄檗禪師の面影は察せられるであらう。其他禪師の傳は『傳燈』に就いて詳見するがよい。然し此處に禪師に深く歸依して居た裴相國公が禪苑を建て、禪師を請じ所解一編を呈した。師之れを少しく披閱し、良久しふして云く、

『會すや。』

裴云く、

『不會。』

檗云く、

『こんなことで會得能きれば苦しむに及ばぬ。又所解など紙墨に表はされるものでない。』
と言はれたら、裴相國は頷を以て賛じて云く、

『自、從大士傳、心印、額有圓珠、七尺身、掛錫、十年棲蜀水、浮盃、今日渡漳濟、八千龍象隨、高步、萬里香花結、勝因、擬欲事師爲弟子、不知持法付何人。』

と、大に讚揚したけれど、師一向喜ぶ氣色もなくて、

『心如大海無邊際、口吐紅蓮養病身、自有雙無事手、不三會祇三揖等閑人。』

と答へ、其禪苑に留り住し、機鋒峭峻なものであつた。そして其會下よりは實に臨濟義玄師を出したのであります。『擧す黄檗業に示して云く』今言ふた機鋒峭峻な黄檗禪師が、一日大衆に示して言はれ

るやうには「汝等諸人盡く是れ唾酒糟の漢」此罵倒の聲を蒙つては、皆共に震ひ上つて了ふだらう。七尺の大入道八千の大衆に向つて大音、堂も裂けよと呼んで云く、

「汝等諸人は酒糟ばかり喰つて居る奴等と謂ふものだ。未だ正宗の味は知るまいぞ、知つて居ると言ふなら立つて見ろ、其シャツ面を見て遣るから。」

と云ふ有様、恐ろしいものぢや。古則公案などしやぶつて居る當今の世に向つては、如何にも晴天の霹靂である。「恁麼に行脚せば何れの處にか今日有らん」三乗だの、一乗だの、顯教だの密教だの、此經文は何うの、彼の語録は何うのと、枝末に渡つた文字言句などに拘はつて議論などして居ては、正宗の生粹は知るまいぞ。そんなことで行脚修行をして歩き回り、百足の草鞋を踏破しても、終に今日と思ふ時は恐らくあるまい。如何に多額の學資を投じ、如何に學問勉強しても、未だ酒の糟を喰つて居る間は、胸に應へて、今日とは思ふ大休歇の日が到らぬであらう。「還つて大唐國裏に禪師無きことを知る麼」一體全體汝等は、大唐國支那四百餘州を迂路き廻はつて、禪師を求めて居るが、馬鹿々々しい奴等ぢや。大唐國は愚なこと、三千世界を血眼で探して歩いたとて汝が求むる禪師など有らばこそ、唯の一人も無い。恐らく之れを知らぬから行脚するのだらうが、草鞋費えだ止すが可いぞ。黄檗禪師も馬鹿親切な人ぢや、こんな言はなくても、其迂路々々する奴等の横面をビシャツと遣つて呉ればよいに、それで目を廻はすやうな輩には、それこそ正宗の生粹を吹き付けて呉ればよいでないか。

上戸は禪師の語に由つて釣り上げられる。果然釣り上げられた者がある。「時に僧有り、出でい云く、只諸方の徒を匡し衆を領するが如き、又作麼生」會下の一僧ムツクと起き上つて、

「今老師は大唐國裏に禪師なしと言はれるけれど、大衆を集めて現に宗乘を擧揚して居る宗師は、江南江北綺羅星の如く御座るでないか。」

此僧こそ唾酒糟漢の代表者であらう、黄檗禪師が禪師なしと云ふたのを捉へて、突つ込んで来た、愛すべき僧である。禪師の垂れた鉤に懸つて来た此僧、老師に突つ込んで来た所は可愛けれど、未だ老師の影だに見えないであらう。然し鉤に懸る者があればこそ、老師も今日說法の主眼を開示することができた。「槩云く禪無しとは道はず、只是れ師無し」即ち此一語が今日の眼目になつて居るのである。大抵此語を解して云ふに、

「禪理は之れ萬物存在する以前よりそれが破滅し盡す後々まで、此大宇宙に遍満して居るから、決して禪なしとは申さぬ。禪既に無でないから、禪を修行する僧は又澤山なものぢや、さういふ其方も其修行者ではないか。然し禪を修する者多しと雖も、未だ人の師たるに堪へたる僧は天下に幾人居るであらう、實に寂々寥寥、殆んど皆無と云ふも過言ではあるまい。」

とそんなことではない無師の一句は吾宗の生命ぢや。六王畢つて四滿一なり蜀山兀として阿房出づ、憐むべし楚人の一炬に燒土となんぬ。是れか分つたら、黄檗の肚が見えやう。

凜々孤風不_レ自誇、端_ニ居寰海_ニ定_ニ龍蛇、大中天子曾輕觸、二度親遭_レ弄_ニ爪牙。

(訓讀) 凜々たる孤風自から誇らず、寰海に端居して龍蛇を定む、大中の天子曾て輕觸す、二度親しく爪牙を弄するに遭ふ。

(講説) 圓悟此雪竇の一頌を評して曰く、

「黄檗の眞贊に似たり、噀酒糟漢の一則を頌出するのではなく、老禪師の肖像に對する眞贊のやうである。」

と。蓋し此一頌雪竇も力を用ふる所があつたのであります。「凜々たる孤風自から誇らず」黄檗禪師の接得振りは、凜々肌を刺す寒風の、而かも俗塵を帯びざる孤風である。孤危險峻傍へも寄り附けない威力を有つて居るけれど、敢て自ら誇らないところが尊いのである。これを譬ふれば老梅風雪の間に在つて清香を放ち、藪都薫すと雖も、更に百花に魁けしたることを誇らざるにも似たりと謂ふべし。「寰深に端居して龍蛇を定む」寰は寰中と云へば、天子の管轄範圍内を云ひ、塵寰と云へば俗塵紛々たる境界をいふ。今寰海は寰中と同じ位の意味で、領土内をいふ。其領土内にドン坐つて居つて、之れは龍か之れは蛇かと、一々區別して焼印を捺されるのである。垂示に圓悟が人天の命脉、悉く指呼に受くと言つたのは、即ちこゝであつて、人天位のことにあらず、三千世界の衆生、悉く、其迷悟昇沈苦樂染淨を判斷決定されるので、此處で捺された焼印は終世取り去ることが能きぬ。「大中の天子

會て輕觸す、三たび親しく爪牙を弄するに遭ふ」大中は唐の宣宗皇帝の年號である。故に大中の天子は宣宗皇帝の事に爲ります。此天子は曾て一度出家して、香巖志閑禪師の弟子となり、後ち鹽官の齊安國師に參じて居られた。其當時黄檗禪師は同じ安國師の會下に在つて、首座の役を勤めて居られた。一日黄檗禪師が佛を禮拜して居る所へ、大中來つて問ふて曰く、

「佛に着いて求めず、法に着いて求めず、衆に着いて求めず、禮拜して當に何の求むる所かある。」と。此問ひ一理あり、首座果して何をか求めんとするのであらう。檗云く、

「佛に着いて求めず、法に着いて求めず、衆に着いて求めず、而かも常に禮拜することは是の如し。」敢て求めんか爲に禮拜するにあらず、禮拜せんがために禮拜するのである。大中云く、

「禮拜して何か爲ん。」

何等求むる所もなき禮拜などしても、愚なことでないかと益々突き込まうとすると、黄檗は却つて許さない。檗便ち起つて大中の横面を平手でピシヤリとやつた。御殿育ちの大中云く、

「此龜生。」

亂暴なことをする人だと呆れて居る。檗此時、

「此場合亂暴だの深切だの言つて居る時ではないでないか、龜と説き細と説くは閑時の事。」

と言ひながら、再びピシヤリと打した。本當に亂暴だ。大中大方目を廻して倒れたであらう。然し大

中も此凛々たる孤風に遭ふて、大いに得る所があつたと見える。後復び俗に還つて、國位を繼ぐや、黄檗に號を賜はつて龜行沙門と云はれた、其龜行がどんなに有り難かつたであらう。此大中との因縁話で、凛々たる孤風の所も分るし、又寰海に端居して龍蛇を定むる所も領得能きる。彼の大中の天子も終に焼印を打たれて了つた。大中の天子黄檗の傍へ来て、觸れては見たが、其觸れ方が輕觸であつた却つて黄檗を蹴飛ばす底の勢ひを以つて觸れたなら、果して黄檗は何としたであらう。輕觸した故に三度も打のめされたでないか。踏んだり蹴つたりとは實に此事ぢや。黄檗の手荒い手段は、丁度猛虎や獅子の爪牙の如く鋭い、其峻峻な方法で翻弄されたのである。而かも却つて大中之れを有り難いことにしたと云へば、黄檗の實力をも察するに難くない。大中の天子曾て輕觸す、三度親しく爪牙を弄するに遭ふ、此二句實に其活劇を示し、目前現に之れを観るが如くであります。

第十二則 洞山麻三斤

垂示云、殺人刀活人劍、乃上古之風規、亦今時之樞要。若論殺也、不傷一毫、若論活也、喪身失命。所以道、向上之一路、千聖不傳、學者勞形、如猿捉影。且道既是不傳、爲什麼、却有許多葛藤公案。世眼者試說看。

(訓讀) 垂示に云く、殺人刀活人劍、乃ち上古の風規、亦今時の樞要なり。若し殺を論すれば、一毫を傷けず、若し活を論すれば、喪身失命す。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。且く道へ既に是れ不傳、什麼としてか却つて許多の葛藤公案ある。具眼の者は試に説く看よ。

(講說) 例に依つて圓悟禪師の本則に對しての垂示で『殺人刀活人劍』人を殺す刀と、人を活かす刀、此刀は二あるにあらず、唯だ一刀であります。凡そ事物は必ず此殺活二兩面を有して居つて、殺人刀に觸るれば殺され、活人劍に觸るれば活きるのであるが、さて此刀劍も外より持ち來るのでない、

人々簡々圓成して居るのであるから、其一刀の使ひやうでは、或は殺し、或は活かすのであります。即ち殺活自由の一刀を銘々所持して居るが、果して自由自在に之れを使ひ得るや否や。而して此一刀は「乃ち上古の風規、亦今時の樞要なり」で、古へは三世の諸佛も、歴代の祖師も、此一刀を用ひて學人に接し、以て一宗の風規とされましたが、敢て上古に限つたことではない、今時に於ても、大いに此一刀を樞要肝心のこととする。扱て殺活と云ふと、其語言に惑ふて、直ぐさま殺すこと活かすことと思ふが、現代の言葉を以て言はゞ、積極的になると、消極的になるとの二つぢや。人に接しても宜しく臨機應變、或は積極的に説き、或は消極的に示さゞれば、良い師家とは言はれぬ。只形式を固守して、其臨機の所置なき者は、自ら持つ劍を以て、自身を傷つくるのである、危い哉危い哉。「若し殺を論せば、一毫を傷けず、若し活を論すれば、喪身失命す」故に若し殺を論じて活を知らざる者は、未だ此一刀を自由にするの器にあらず、又活を論じて殺を知らざる者も、亦此劍を使用し得る者ではない。宜しく殺を論じて殺さざるのみか、一毫末も傷害すること無く、活を論じて、亦同じく、喪身失命せしむるの力無くてはならぬ。此力あつて初めて此殺活の劍を許すべきぢや。世上劍術の達人ですら然らうぢや、劍を帯ぶるのは、人を殺さんが爲めではなく、活かさんが爲めであります。刀劍は元來人を殺す爲めの器であるけれど、たゞ殺す爲めのみならず、可憐名劍も兇器となつて了ひます。況んや一代の師家たる者は、兇器は携へぬ。「以所に道ふ、向上の一路、千聖不傳」向上の一路、今謂ふ

所は向下に對した相對的の者でない、實に絕對的の向上である。其向上の一路になると、千聖列座でも、之ればかりは傳へられぬ。其刀の使用法は傳へても傳へ得ず、授くるに授け得ずである。「學者形を勞すること猿の影を捉ふるが如し」然るに學者は、形式に拘はり、其言句に泥んで、之れは此意、彼れは彼の義など、解路に亘つて身心を勞し、一生懸命で捌かんとするけれど、到らざること萬里に郷關を望む底で、遠くて手も届かぬ。彼の手長猿が木の上に在つて、谷底を臨むと、水の上に玉の如く映つて居る月影がある。彼れ善い物を見付けたと、猿臂を伸ばして捉らうとする却取れないので、氣も焦立ち、遂に之れを捉えんとして水中に落ち、溺死して了ふが、世上學人の多くは、此手長猿の影を捉えんとするが如きもので、言句形式にのみ拘泥して居る、そんなことで捕捉は能きぬ。「且く道へ既に是れ不傳、什麼としてか許多の葛藤か有る」既に是れ千聖不傳であるでないか、不傳ならば黙つて居ればよいに、何が故に歴代の祖師葛藤を加へ「碧巖」に百則「無門關」に四十八則、其他千七百の公案を設くるぞ。斯る葛藤言句は要らぬでないか、古則公案の必要を認めぬのである。然しながら其何の故に、不傳の所に葛藤公案の出來たかは、具眼の者は看取することが能き。「具眼の者は試に説く看よ」

舉僧問洞山、如何是佛。山云、麻三斤。

(訓讀) 擧す僧洞山に問ふ、如何なるが是れ佛。山云く麻三斤。
 (講説) 洞山和尚、雲門大師の法嗣で、守初禪師のことでもあります。一日洞山和尚が臺所の方で胡麻を量つて居られた所へ、一僧出て來つて、

「如何なるか是れ佛。」

と問ひかけました。扱て此問ひの主眼たる佛は古今未決の大問題であります。故に學人は屢々此問題を提起して、解決を付けやうとするけれど、却々容易な沙汰では得られぬ。若し一度此の境を得て佛を手の物にすれば、其後は佛と云ふも、口を嗽ぐこと三年すべしと言はれて居る。一休和尚の如きは戀となつた。

本來の面目坊の立ちすがた

一と目見しより戀とこそなれ

此樂な境に爲らなければ、眞物ではない。或は眞の佛を得れば、スツカリ佛を忘れて了ふ、佛を思ひ出す間は、佛が得られぬのだ。借金を苦にして居る間は、借金の山が抜けぬので、返し盡せば借金などスラリと忘れて借金とも口にせぬ。然るに此借金黨が多いものだから、何かと云ふと如何なるか是れ佛と問ひ出すのであります。故に如何なるか是れ佛と問へば、或る時は、殿裏底、本堂に行つて見さつしやれると答へ、或る時は、三十二相八十種好、經文に説くが如しと答へ、或る時は眼横鼻直

と答へ、或る時は杖林山下の竹筋鞭、竹の根切れが即ち是れ佛なりなどと答へて、古人の答が一致して居らぬ。其一致して居らぬのは、垂示に謂ふ通りで、不傳の所を纔に殺人刀活人劍を用ひて示すのであるからである。今洞山和尚の前に來つて、如何なるか之れ佛と問ふた問ひは、實に鐵蒺藜である。鐵條網である。如何なる勇士來るも傍へも寄せ付けない『天下の衲僧も跳不出』で、能く此一間に答へ得るものがあらうかと、圓悟も着語して、大いに其問者に助勢して居るのであります。然るに洞山は『麻三斤』と答へて了つたから、再び分らなくなつた。之れを洞山は臺所で丁度胡麻を量つて居た時だから、言下に麻三斤と答へたのだ、當意即妙、實に旨く遣つたと褒める者があるが、そんな皮相の見では未だ佛は得られぬ。世間一般の世智辯相の輩が云ふことに、何んでも禪宗へ行つたら、手當り次第、頓智を用ひて答へればそれでよいなど、飛んも無いことである。禪に來つて頓智を用ひんとしても、眞禪は頓智に非ず、又造り付けの融通利かざるものでもない。故に丸き物に四角なものを持ち來るも契はず、去らばとて方に圓を持ち來るも亦契はず、今洞山の麻三斤と言つたのは、頓智にも非ず、又麻に限られるものでもない。麻は胡麻でもよい。或は麻にしてもよい、要は麻の字に非ず。然らば其麻三斤とは何んぞ、胡麻三斤とは何んぞと云ふも、之れは千聖不傳ぢや。強いて我が會得する所を言はれざるに非ざれども、宗旨本分の事は輕々にすべからずで、未修の者は却つて誤る。大いに親參實究を重ねて後、室内に來つて商量すべしである。

金烏急玉兔速、善應何曾有輕觸。展事投機見洞山、跛驚盲龜入空谷。花簇簇錦簇々、南地竹兮北地木、因思長慶陸大夫、解道合笑不合哭、咦。

(訓讀) 金烏急に玉兔速なり、善應何ぞ曾て輕觸有らん。事を展べ機に投じて洞山を見れば、跛驚盲龜空谷に入る。花簇々錦簇々、南地の竹、北地の木。因つて思ふ長慶陸大夫、道ふことを解す、笑ふべし哭すべからず。咦。

(講説) 『金烏急に玉兔速なり』太陽の中には金の鳥が居て、月の中には玉の兔が居るなどと、支那では神話的の傳説があるので、金烏と云へば太陽のことに爲り、玉兔と云へば月のこと、爲ります。此日月更代すること急速にして電光の如く速である。故に今此二句を以て、洞山が問髪を容れず麻三斤と答へた腕前を褒めたのである。此問ひに對して此答へは何うだか、ゴーンと撞けばゴーンと響く、鐘が鳴つたが撞木が鳴つたか、鐘と撞木の間が鳴ると云ふた如く、其答への妙にして且つ速なるを言ふ。『善應は何ぞ曾て輕觸あらん』善應は能く應じたと云ふので、即ち善い答と云ふこと。如何なるか是れ佛と問ひかけたに對して、麻三斤と答へた所は、實に善應である。決して驚き立つた叫びでもなければ、頓智で言つた譯でもない。禪を頓智でよいと思ふ者もあるが、それは須らくトンチキ禪と云ふべしだ。洞山は決してそんな輕々しいことはせぬ。撞木が當ると同時に鳴り出した聲ぢや、

故に圓悟は『鐘の扣に在るが如く谷の響を受くるが如し』と著語して居る。『事を展べ機に投じて洞山を見れば、跛驚盲龜空谷に入る』事を展べず機に投ぜずとは、曾て洞山の垂示であつた。事を展べるには言句を用ひざるべからず、機に投ずるには活動せざるべからず。之れ一應は然うであるけれど、言句は事を展べて實を展べずぢや。火は暖い水は冷いと口で言ふても、更に舌も焼けず、口も氷らぬのである。故に今麻三斤と答へた洞山の言句に付き廻らば、果して如何、是れ即ち跛驚盲龜の空谷に迷ふ有様である。跛驚は跛の驚で、驚や龜は元來鈍なものだが、それが跛で盲と來て居るから鈍の骨頂、空谷に入つて惑ふて居るやうなものである。洞山も旨く遣つて退けたなど、邪解を用ひて言はゞ、跛驚盲龜の諺は免れぬ。逆も々々そんな見解では、洞山の足許へも寄れない、谷間に在つて浮木を俟つべしぢや。『花簇々錦簇々』以下は餘韻である。此句は明教禪師が此則の請益に答へた答話である。古歌にも、

見渡せば柳櫻をこきまぜて

都ぞ春の錦なりける

と、之れぢや。花簇々錦簇々で何處も光明赫々たる佛が御座るぞ、負んだ子を探ねるには及ぶまい。『南地の竹、北地の木』これも古人の此則の答話で、南地へ行かうが北地へ行かうが、佛は何處にも居た給ふを、麻三斤と洞山が云つたからとて、胡麻ばかり見て居るなど、大いに學者に警告して居る

のである。之れを棺桶上の花模様だとか、竹は孝杖だからとか、取ても附かないとを附會して居る輩があると、圓悟が評して居る。天地萬物盡く花簇々にして、亦麻三斤なり、麻三斤にして亦光明遍照なり。言語に附いても言語は事實を展べずぢや。「因つて思ふ長慶、陸大夫道ふことを解す、笑ふべし哭すべからず」此句は、故事があつて、評唱にも一寸出て居る。陸巨大夫は曾て南泉和尚に參じて弟子となつた。然るに南泉和尚が遷化されたので、其禪院に來つて追吊會を擧げ、師匠の喪中にも拘らず呵々大笑した。故に其寺の院主が出て來て、之れを咎めて、

「今日君は先師を追吊しながら、呵々大笑するとは何事ぞ、先師の爲めに弟子たる君は大に哭すべきでないか。」

と詰つた。時に陸巨大夫は、

「然らば貴僧の見得底を聞かん、道ひ得ば哭すべし。」

と突き込んだので、院主は一言の言葉もなく黙つて了つた。すると陸巨反對に、今度は大聲揚げて哭き出だし、

「蒼天々々先師世を去ること遠し。」

と言ふた。此事を後に長慶和尚が聞いて、

「大夫笑ふべし哭すべからず。」

と評したことがあります。此故事を雪竇が引き來つて此處へ合せたのであります。泣いたとて、笑つたとて、此麻三斤は見えまい、大衆何んと、何うぢや。分つたかフ、ン。「咦」これは一字關で、色々の意味を以て用ひるが、今は稍冷笑の意味を有つて居る、また分らぬか、フ、ンと言つた位な調子であります。自己の胸底確然不動の一物無くんば、此咦は用ひられぬ。爰に於てか、雪竇の力實に九鼎より重く、泰山よりも高いことが分る。

第十三則 巴陵銀碗裏

垂示云、雲凝大野、徧界不藏、雪覆蘆花、難分朕迹。冷處冷如冰雪、細處細如米末。深々處佛眼難窺、密密魔外莫測。舉一明三即且止。坐斷天下舌頭、作麼生道。且道是什麼人分上事、試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、雲大野に凝つて徧界藏さず、雪蘆花を覆うて朕迹を分ち難し。冷處は氷雪よりも冷にして、細處は米末よりも細なり。深々たる處佛眼も窺ひ難く、密々たる處魔外も測ること莫し。舉一明三は即ち且く止く。天下の舌頭を坐斷して作麼生か道はん。且く道へ是れ什麼人の分上の事ぞ、試に舉す看よ。

(講說) 凡そ禪宗に於ては、理論を以て説かぬ、理論を超絶して而かも説くに詩語を以てする所が吾が禪宗の特色とする所であります。故に此垂示なども、理論より進まず、事相を以てするのであります。『垂示に云く、雲大野に凝つて徧界藏さず、雪蘆花を覆うて朕迹を分ち難し。』雲大野に凝るは、

理一邊の境であつて、平等的なる事を示して居る。黒雲起つて武藏野を籠むる有様、若し曹洞宗の語を以てすれば、正位に當る境であります。然し其理の一邊も、徧界藏さず、萬物森々羅々たる邊は、平等に即して差別である。此處に於て宗旨の妙も現はれるのであります。即ちガラリとして居て蟻の鬚一本残さず見分けられ、光明燦然たる所、正位に即して偏位である。恁く平等裏に差別して居ると見れば、雪蘆花を覆ふて、白きこと更に白し、一見何れが雪やら、何れが蘆花やら分らぬ中に、雪は雪、蘆は蘆。山は巍々として高く、海は洋々として浩し。差別あつて而かも差別を留めず。朕は兆にして迹は跡なり。兆は事物の未だ起らざる先きにして、跡は事物の生起せし後であるが、雪とも蘆とも見分け難い所は、即ち朕にして、而かも雪は雪、蘆は蘆たる所は迹なり。然るに朕迹を分ち難しと、超然理事を卓絶して居る。理事の二邊に互る間は、教相的取扱を免れないが、其理事の二門を超出して居る所に、宗旨が現はれ、而かも其朕迹の捉え得べきものなき處に妙がある。『冷處は氷雪よりも冷かに、細處は米末よりも細かなり。』先きの二句は相に就いて示し、此二句は性に就いて明かにすると云ふて可い。冷處は氷雪よりも更に冷かに、細處は米末よりも更に細かい、冷の極、細の極である。古人も、

『寒の時は閑黎を寒殺し、熱の時は閑黎を熱殺せよ。』
と言はれたが、冷と云へば暖と言はずとも現はれ、又細と云へば大と云はずとも自然に分ることであ

る。其大なる處は虚空よりも大に、其明かなる處は日月よりも更に明かなり、總ての相待を離れてゐる。故に『深々たる處は佛眼も窺ひ難く、密々たる處は魔外も測ること莫し。』であります。佛は三世洞觀と云ふ立派な眼玉を以て居るけれど、其深々たる所に至れば窺ひ難い、天魔外道能く五通を具すれども、其密々たる所に爲ると、流石の天魔外道も測られざるのみか、面出しも能きぬ。『舉一明三は且く止く』舉一明三と云ふは、其一隅を擧げて三隅を知ると云ふ徒輩で、伶俐の漢を云ふ。其伶俐な奴でも、茲は智恵や才覺では窺はれぬ。然らば『天下の人の舌頭を坐斷して、作麼生か道はん。』其舌の根を斷ち切り、如何なる人でも、最早ウンともスンとも言へなくなつて境、即ち文殊も言句竭き、維摩も黙す能はざる境に立ち至つた時、扱て何んとか言ふか。若し此處で言ひ得る者あらば、开は如何なる人であらう。『是れ什麼人の分上の事ぞ。』恐らくは巴陵を措いて、他に言ひ開きの能き者はあるまい。試に巴陵銀碗裏の一則を擧す、看よ。

舉僧問巴陵、如何是提婆宗。巴陵云銀碗裏盛雪。

(訓讀) 舉す僧巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗、巴陵云く、銀碗裏に雪を盛る。

(講説) 先づ爰に於て巴陵禪師に就いて言ふべきであるけれど、それを略して、提婆宗に就いて一言を贅せざるを得ぬ。提婆と聞く者、或は直ちに、彼の釋迦如來を殺害せんとした提婆達多の事を思

ふであらう。然し今の提婆と云ふは、提婆達多とは全く別人で、時代も大いに隔つて居る所の、迦那提婆尊者の事でありませう。評唱にも一寸出て居るが此提婆尊者は龍樹尊者の法嗣で、所謂西天四七の中で、第十五祖に當る方であります。尊者は南天竺に生れ、毘舍羅と云ふ長者の子であつたが、天性才辯あつて、初め外道に歸し、大いに當時の學を研ぎ、後の龍樹尊者に師事した。其初めて龍樹の門に入つた時、龍樹大士弟子に命じて、鐵鉢に水を盛り、更に何んとも言はず、黙つて提婆尊者の前へ出された。提婆は亦黙して一本の針を出して、其鉢中に投入したのであります。勿論針を持つて居ることは、戒律上の定めで、自ら衣を縫ふべき時があるから、常に斯る物まで身を離さず持つて居るのであります。さて此默示は一體如何なる事かと云ふに、龍樹が水を鐵鉢に盛つて出したのは、水は方圓の器に隨ふて、丸くて鐵鉢内に遍滿して周ねからざるなく、而かも澄湛計られざるが故に、我が學の周遍すること如是と云ふ意にて出したのであつて、又提婆の針を投入したのは、針は細小なりと雖も鐵であるから、其底に沈む、之れ其周遍せる龍樹の學海を窮むるの意であつたと、古人も評して居るが、之れが龍樹の意に契つたので、遂に其門に入るを許し、後に高足の弟子となつたと云ふ。當時印度では、所謂外道盛んであつて、凡そ九十六種も有つたと云ふ。尤も外道と云ふは、佛教を内道と云ふに對した名稱で、内典に對して外典と云ふが如く、決して輕蔑した意味ではない。何れも高尚なる哲學を究め、其學派分裂して九十六種にも爲つて居つたのである。而して此外道等には其自ら修

むる哲理を喜び、重んじ、他と論議することを好み、其論議の時には、相約して敗れた者は其頸を切るとか、臂を斬るとか、或は勝つ時は赤旗を翻して、正門より出で、敗れたる者は袈裟を裏返して裏門より出づとか、或は敗れたる者は勝者の弟子となるとか云つて、各々身命を賭して其義理の優劣を論議するのであります。或る時外道と佛教者と論議をするとして、國王に奏上し、大寺中に於て鐘を鳴らし、鼓を撃つて人を集め、論議を開始せんとしたのであります。爰に於て先づ鐘を鳴らさぬやう又鼓を打たぬやうに、外道が鐘と鼓を封禁するといふ風説がありました。時に提婆尊者は、それぞ佛教の一大事だと言ふて、神通を以て樓に登り、其封禁された鐘をゴーン／＼と撞き出しました。外道は驚き來り問ふて云く、

「樓上に鐘を鳴らす者は誰れぞ。」

提婆尊者答へて曰く、

「天なり。」

と、天とは提婆といふのを譯したので、印度では天のことをデーバと言ひます。鐘を撞いてゐるのは誰れでもないデーバであるぞ。すると外道云く、

「天は是れ誰れぞ。」

婆云く、

「我れ。」

すると外道又云く、

「我れは是れ誰れぞ。」

と。婆云く、

「我れは是れ僮。」

外道云く、

「僮は是れ誰れぞ。」

と。婆答へて云く、

「僮は是れ狗。」

外道云く、

「狗は是れ誰れぞ。」

婆云く、

「狗は是れ僮。」

斯くの如く言ひ争ひました。提婆尊者の答へは、恰も出放題のやうであるが、決して然うではなく、一々意味があるのであります。それ故天台などでは、十界五具と論じて、地獄界中に地獄、餓鬼、畜

生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛陀の十界を具し、佛界亦地獄、餓鬼等の十界を具足する故、一即一切、一切即一、鬼即佛、佛即鬼といふ、斯る教相的道理より見るも明かでありませぬ。況んや佛は一切衆生悉有佛性と説くに於てをや、故に提婆尊者は、佛敎の教義に據り、正々堂々の議を爲してゐるので、決して口に任せて、出放題を言ふたではありません。外道も亦さる者、遂に自ら及ばざるを知り、正門を開いて、提婆尊者を出さんとしました。すると提婆は、樓上から赤幡を持つて下つて來た。併し外道は未だ未練があつたと見えて云く、

「偈何んぞ後れざる、我れ先きに出でん。」

と。婆云く、

「偈何んぞ前まさる。」

外道云く、

「偈は是れ賤人か。」

婆答へて云く、

「偈は是れ良人か。」

と。斯くの如く展轉酬問したが、提婆は無礙の雄辯を以て、一々之れを挫き伏せました。爰に於てか外道は遂に敵し難きを知りて歸伏し、提婆尊者は赤幡を持つて立つた。外道等は、其過を謝し、首

を斬つて酬ひんと請ふた。併し提婆尊者は、佛敎慈を以て根本と爲すから、

「何んぞ汝等の首を斬らんや。」

と言ふて、生命を助け、そして髪を削らせ、弟子とされたといふことであります。これに由りて外道等は、頻りと稱歎して提婆宗々々と言ふた。當時提婆宗大いに興つた。故に提婆宗といふことは、禪宗といふに同じだが、印度では禪宗などといふ名稱はなかつた。勿論禪宗といふて、一宗に限るべきものでなくて、各宗に涉つてゐるのであります。即ち各宗派は、禪を離れて立つことが能きれば、禪宗は各宗を離れて、存すべきものでなかつたから、従つて禪宗は、各宗の總名といふても然かるべきであります。要は唯後世に至りて、禪宗といふ一別宗の如くして了つたのであります。さて禪宗といへば、不立文字以心傳心で、言句を用ゐないのが通則でありますのに、此提婆宗に爲りますと、言句で成り立つやうに見えます。故に馬祖大師が言はれた。

「楞嚴經に云く、佛語は心を宗と爲し、無門を法門と爲す。」

と、故に佛心宗と云ふ。此文を讀むに、佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲すと言ふ者が多いけれど之れは佛語は心を宗と爲し無門と爲すと讀む方が可い。馬祖大師又云く、

「凡そ言句有る、是れ提婆宗、只此箇を以て主となす。」

と。同じ禪にも有言もあれば無言もある。只此箇を以て宗とする。此箇とは何にか、これが分らねば

教外別傳も役に立たぬ。然らば禪宗には大凡宗名の變遷五回ありと言つてよい、即ち初めは正法眼藏宗、次は提婆宗、次は達磨宗、次は曹溪宗、次に臨濟宗、宗名五轉六轉乃至十轉するも、義は始終一貫、吾が道一以て之れを貫くであります。之れで大略提婆宗と本則に出て居る所を辯じ終つたから、次に巴陵禪師のことも紹介させよう。

「擧す僧巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗。巴陵云く、銀碗裏に雪を盛る。」巴陵は處の名で岳州に在るが、此地名が直ぐに亦人の名を指します。然し有名な人でなければ、如何に地名を呼んでも其人は分らぬ。近江聖人と云へば中江藤樹先生の事と分る。岳州巴陵に新開院と云ふ寺があつて、顯慶大師と云ふ方が住して居られました、此方が即ち巴陵であります。扱て先きに言ふ如く、馬祖大師一度び「凡そ言句あるは是れ提婆宗」と言はれてより以來、これが宗門内の問題と爲つて、盛んに提婆宗を振り廻はすのであつた。巴陵門下亦其風に靡き、此問題を持ち出して、巴陵に問ふたのであります。其時に門下の弟子に對して、巴陵が答へたのが、本則に出て居る。「銀碗裏に雪を盛る。」の答であります。尤も之れは巴陵三轉語中の一轉語であります。其三轉語とは、評にも摘出してあります。巴陵初め坐具を縫ふて行脚して廻つて居たが、雲門大師に參じて脚跟下の一大事を獲得し、後出世して法を嗣ぎ、岳州巴陵の新開院に住して居た。別に嗣法の書をも雲門に呈出しなかつたけれど、三轉語を將て行つて上つた。

「如何なるか是れ道。明眼の人井に落つ。」

これが第一轉語で、次ぎは、

「如何なるか是れ吹毛劍。珊瑚枝枝月を撐着す。」

これが第二轉語で、次ぎは、

「如何なるか是れ提婆宗。銀碗裏に雪を盛る。」

これが第三轉語で、此三轉語を上つた所、大いに雲門大師の意に契合し、雲門は老僧が滅後忌辰に當つても、他の經陀羅尼を讀み上ぐるに及ばぬ、此三轉語を擧せば、報恩するに足らんとまで言はれた。故に巴陵も雲門大師の忌辰には、必ず此三轉語を擧して、別に諷經の事もせなかつたと云ふ。「僧巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗。」斯う單刀直入に切り込んで來られては、大抵の者ならウンと詰まる所を、何んの苦もなく「銀碗裏に雪を盛る。」と、スラ／＼と答へられた。而かも此答へは亦問者の咽喉を塞斷して、グツとも言はせぬ、七花八裂自由自在なもの、何んと言ふて讚美して可いか、實に嘆美の辭に苦しむのであります。然らば其「銀碗裏に雪を盛る。」とは如何なることであるかと云ふに之れは難透の公案の一であつて、輕々に言はれぬ。古人は「黒漆桶裡盛る黒汁」と着語して居る、これが會せれば少しは話せる「寶鏡三昧」などにも「銀碗盛る雪明月藏鷺」と言つてあるが、是等の語でも輕々に看過すれば、二乗の窩窟に墮すと先師洪川和尚が言はれた。故に之れは銘々參究するが可

い、各自の力任せであります。之れを説けば説きもされるが、説いても眞意は表し難い、却つて求道者を誤らす基となる。工夫一番二番してそして後に來り參ぜよ。

老新開端的別。解道銀碗裏盛雪、九十六箇應ニ自知。不知却問天邊月、提婆宗提婆宗、赤旛下起清風。

(訓讀) 老新開端的別なり。道ふことを解す銀碗裏に雪を盛る、九十六箇應に自知すべし。知らずんば却つて天邊の月に問へ、提婆宗提婆宗、赤旛の下清風起る。

(講説) 『老新開端的別なり』巴陵禪師の着眼點は亦格別なものであります。新開は寺の名、老は敬語で、長老或は老師など云ふのと同じであります。人が宗演老師など、納のことを言ふもので、未知の者は老人だと思ひ、御老體など、言ふて、笑ふこともありませう。老新開の端的は常人に異つた所があると、最初より雪寶は托上して居る。『道ふことを解す銀碗裏に雪を盛る。』此『解道』と云ふ時は善く言つたものと嘆美する時に用ふるので『銀碗裏盛雪』とは先づ善く言つたものぢや。『九十六箇應に自知すべし。』西天九十六種の外道も自知自覺するが可い。其非を覺つて、之れを悔い、宗旨を改むるに憚ることはないぞ。其非を知つて、而かも改むることをせざるは、亦勇なきなりぢや。『知らずんば却つて天邊の月に問へ。』覺れぬば萬已むを得ない、それ其デーバ、天上にある月に問へよ。月に

問へと指されて尙も間諛々々し、指端を見ざる底の鈍漢ならば來れ、腰の立たぬほど打ちすえてやらう。『提婆宗提婆宗。』總て語を重ねることは、稱美の極にあるので、噫提婆宗なる哉、噫提婆宗なる哉。高きこと山の如く、深きこと溪の如し。『赤旛の下清風起る』提婆の論議に勝を制し、赤旛を捧持し、正門より堂々として練り出す所の境界は、清風匝地の有様ぢや、九十六種の外道風に躡きて來り歸依する有様であつて、雪寶口を極めて讚嘆隨喜して居るのであります。

第十四則 雲門對一說

舉僧問雲門、如何是一代時教。雲門云、對一說。

(訓讀) 舉す僧雲門に問ふ、如何なるか是れ一代時教。雲門云く、對一說。

(講說) 本則は圓悟禪師の垂示を缺いて居まして、實に惜いものであります。此「雲門對一說」の本則であるから、定めてキビくした垂示が附いて居たに相違ありません。夫れは兎も角、本日は新年第一の會であるから、本則に入るに先き立つて、聊か新年の禪を説かうと思ふ、之れ敢て徒事ではあるまい。抑も禪は入室打坐する處にばかり存するのでない。禪は實に到る處に遍在して居て、事々物々、一切萬象森々羅々たる所に現はれて居るのであります。故に有眼の者は把り來つて禪とし、無眼の者は其中に在つて、更に禪たることを知らぬのであります。年末には年末禪あり、年頭には年頭禪あり、山に山の禪あり、河に河の禪あり、實に全宇宙盡く法界禪ならざるものは無いのであります。人あり古徳に問ふて曰く、

「如何なるか是れ新年頭の佛法。」

爰では佛法と問ふたが、佛法即ち禪であること言ふまでもありません。此人初めて新年頭にも禪はあつるものぞと知つたが、さて、其新年頭の禪果して如何なるものかを知らぬ、故に問ふた。徳答へて云く、

「元正啓祚萬物盡新なり。」

と。此答へは一向平凡であるが、實際を言ひ得て居ます。新年に爲れば萬事新しく爲つて、而かも皆喜ばしげに見える。其平和なる有様は熙々とし雍々としてゐます。古人は一年の計は一月に在り、一月の計は一朝に在りなど云つて、此平和なる時に警戒を興へて居るが、禪も又同じく此熙々然たる裡に充塞して居る。山川草木より禽獸蟲魚に至るまで、皆盡く新にして幸福なる其處に、萬福の禪道が開展されて居るのであります。故に眞實禪道に徹底した者の眼から觀れば、禪道と世間道と些の異り無いのみか、全く同一であります。固より大悟界と迷妄界とは、二あるにあらずして、其間毫髪をも容れない。若し其間に糸筋程の隔たりがあつたならば、眞禪ではありませぬ。然し唯其處に向去、或は却來の二あるけれども、此二ともに禪であつて、一物上の表裏二面であります。即ち上求菩提と下化衆生との二であります。上菩提を求め、求め盡せば下衆生を化するので、之れは佛法一般であります。眞宗では往相と還相と言つて居る。往相は淨土往生する相狀で、上求菩提に當り、還相は娑婆に還來する相狀で、下化衆生に當るのであります。自分が大悟の境に至れば、衆生濟度と出かけ

る、之れが佛法であります、又之れが禪道であります。而して其衆生濟度の爲に、古人が力を盡して居るのに、其本旨を忘却して、やれ達磨宗、やれ臨濟宗、ソレ棒だ、ソレ喝だと騒いで居るのが、現今の人であります。禪は決して然かく融通の利かぬ作り附けのものではありません。棒を離れ、喝を離れ、古則公案を離れて、其處に立派な禪が存在成立して居るのであります。故に今日釋迦、達磨をして出ださしめなば、必ずや他の手段を示して接化されたであらう。若し臨濟、徳山の大神知識が、現時代に出世せられなば、必ずや棒喝に代ふるにチヨボクレ、ホコリタ、キを以て教化されたであらう。然し物久しくして弊を爲すの道理で、禪も其形式を捉へられるやうに爲つたのは痛嘆の至りであります。然れば眞禪は敢て棒喝に限らぬ、新年頭物皆新なる所に、禪道は漲つて居ます、之れを捉え得るか否かは、唯諸君の力如何に因るのであります。一言所感を述べて本則の垂示に代へます。「擧す僧雲門に問ふ、如何なるか是れ一代時教。」雲門大師の事は前に既に出して置いたから、重ねて言はぬ。然し雲門は雲門宗の祖と言はれる位の知識であるから、普通の師家とは異つた宗風を以つて居ます。古來雲門宗の宗風を評して、「紅旗閃爍」と云ふが、江河を隔てた向ふ山に、翻々として居る紅旗の如きもので、見えはすれど到られぬ、手にも取れない孤危嶮峻な所がある。即ち巧妙なる言句を以て、容易に言ひ表はすけれど、其言句深くして、其底を知らぬと云ふ有様であります。此雲門和尚の許に來つて大問題を提出した一僧があります。云く「如何なるか是れ一代の時教。」一代は釋尊一代の

ことで、時教は其教説であります。佛四十有九年かゝつて説き立てた所の、横説縦説の教説を、一口に答へて呉れと云ふ問ひであります。時教と云ふのは、天台の用語を借り來つたので、天台宗では佛一代の説教を五時八教に分ける。斯う云ふことを言ふと、教相的に爲るけれど、此處では此時教の意を十分廣げて置かねばならぬ。五時と云ふのは「華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華涅槃時」で釋迦一代の教説を、其年時の方面より分類するので、釋迦成道後法身の身を現じて、三七日間説法されたのが華嚴教であります。此時は釋迦が法身を現する位であつたから、理想的説法をされたので所謂「隨自意説法」で、悟り其儘を説かれたのであります。故に其説法は高尚深遠にして、到底聲聞緣覺と云ふ二乗の機類には分らなかつた。此時は所謂「一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛」と云ふ大説教であつたから、教は高過ぎて一向に分らぬ、一座の中二乗の者は、聳の如く嘔の如くであつたと云ふ。猶に小判とは此事を言ふか。其處で釋迦は、之れより其華嚴一乗の法に誘引する爲めに先づ鹿野苑に赴いて、十二年間人天教を説かれた、之れが即ち阿含教であります。阿含教は人道及び天道を中心として説いたので、進んで聲聞道、緣覺道、菩薩道、佛道に至るの楷梯であります。人天の教すら守れぬ者が、佛道に至らうとするも、テンから坊主になれぬと云ふ俚言の如く、不可能のことであるから、先づ對機を調ふるために、人天教を説かれたのであります。此阿含教が、今日南方佛教と云はれて居る方面に傳はつて、盛んに行はれて居ます。そして其南方佛教とは、錫蘭、サエアム、

ビルマ等の諸國に傳はつて居る佛教を言ふのであります。これより釋迦は所謂方等教を説かれたので、これは其教義阿含教より一步進んで居る。楞伽經、楞嚴經、維摩經が此部に屬するので、佛は此間實に八年間を費されました。釋迦は更に進んで實大乘に入り、二十二年間般若教を説かれました。般若教は所謂空教で、有爲空無爲空、畢竟空と、眞空を説かれ、最後に法華一乘法を説かれました。此經には『唯一乘法無二亦無三』とあつて、最初の理想的説法たる華嚴經と同じ價値を有し、高尚なる圓教とするのであります。釋迦一代五時に亘つて説教するも、畢竟此法華一乘に誘引せんが爲めであると言はれて居ます。此引き續き涅槃經を説いて、涅槃の雲に入られました故、此最後の八年間を法華涅槃時といひます。要するに此の五時の分け方は、天台智者大師の五時判に依つたのであります。天台では、五時の外に、横に法義を分類して八教と立て、化儀の四教化法の四教など云つてゐるが、こんなことは専門上の研究とし、今釋迦一代の時教と云へば、天台の所謂五時八教なるが、其法門に就いて示せば、實に八萬四千の法門があります。又之れを文字に編纂した經典に就いて示せば、五千四百有餘卷あります。今日の續藏經に就いて調べたなら、恐らく一萬卷に近からうと思はれます。更に南方佛教或は西藏佛教に傳はつて居る藏經の數を加へたならば、實に驚くべき多數に爲るのであらうと思ふ。實に説きも説いたものである。一代の間釋迦は夜の間に寝ずに説いたのであらうか、舌根を盡して説いたのである。然るに今雲門大師の前に合掌禮拜した僧が、如何なるか是れ一代の時教

と問ひ、雲門に一口に答へさせやうと云ふのであります。故に圓悟は『座主不會』と冷笑的著語を附けた。五時だの八教だのと研究して居る連中を指して座主と云ふたので、そんな教相的眼光では、一代の時教一口に答へられても分るまい不會不會と言つて居ます。『雲門云く對一説』扱て此答へが果然不會であります。此對一説と云ふ三字に就いて、對は何に、對して居るだの、一説は斯うの、何んのかのと騒ぎ立てても、對一説は通られぬ、難透であります。先づ諸君は雲門の位置に爲つて、如何なるか是れ一代の時教と問はれたら、何と答へやうとするか、銘々即今目前に突き付けられたら何うする、此雲門の對一説を説明するよりも、更に必要なるは其ことであります。敢て問ふ、如何なるか是れ一代の時教で、ウンと語るやうでは駄目ぢや、七縱八横に働かなくては駄目ぢや、さればと云つて雲門の口眞似で對一説などは御免を蒙る。今雲門大師は、聲の谷に響き應ずるが如く、對一説と答へられました。實に雲門大師にあらざれば答へられざる所であります。釋迦が一代五十年間汗を流して説き立てた八萬四千の法門を、僅か一口に對一説と答へて了つた。此答へ振りには、圓悟も驚いたと見えて『無孔の鐵鎚』と讚め『七花八裂』と嘆じ『老鼠生薑を咬む』と著語しました。無孔の鐵鎚は孔の無い金鎚で、何んとも手の著けやうがないといふこと、支那でも斯ういふ俗語があつた。七花八裂は七通八達、七縱八横、皆な同意で、自由自在と云ふ意味であります。老鼠生薑を咬むとは、此答へを聞いた問者の顔を批評して居るやうぢや。老鼠が生薑を咬んだやうで、呑むに吞まれず、吐く

に吐かれず、モガ／＼して居る其の面を見よ、吞吐不下ちやと言つて雲門大師を讚嘆したのであります。

對一説、太孤絶。無孔鐵鎚重下楔、閻浮樹下笑呵呵。昨夜驪龍拗角折。別々、韶陽老人得一椀。

(訓讀) 對一説、ただ孤絶す、無孔の鐵鎚重ねて楔を下す、閻浮樹下笑ふ呵呵、昨夜驪龍角を拗し折す。別々、韶陽老人一椀を得たり。

(講説) 例に依つて雪竇頌を以て拈出しましたが此頌には實に雪竇も力を用ひたものと見えます。古人も前の『至道無難』の則に出した雪竇の頌は勝れたもので、碧巖百則の頌中白眉であると云はれて居るが、本則の頌も亦彼れに劣らぬと評して居ます。對一説太孤絶す。對一説と云ふから、大抵機類に對した説法であると思ふが、然らず、全く太孤絶したものである。孤絶峻絶である、壁立千仞である、傍へも寄せ付けぬ。爪も掛からぬ絶壁が峭立して居る。故に圓悟は「何んぞ止だ壁立千仞のみならんや」と著語した。無孔の鐵鎚重ねて楔を下す。如何なるか是れ一代の時教と問ふた問題は、無孔の鐵鎚で、實に手も着けられぬ難問題であります。孔の無い鐵鎚であるから、何處へ手を着けてよいか、手の着け所は無いのであるけれど、雲門老漢は美事柄を箝めて了つた。無孔の鐵鎚に柄

をすげた手並、寔に恐るべしであると褒め上げた。『閻浮樹下笑ふ呵呵』閻浮樹は印度の樹で、此樹は頗る繁茂し、其枝葉は一天を覆ふ、此枝葉に覆はれたる所を閻浮洲と云ふ。そして此樹の根本の所には多くの黄金を産出するので、閻浮を譯して勝金とも云ふ。元來印度の須彌山説では、須彌山の周圍に四洲あつて、其南なるを南閻浮洲と稱し、西なるを西閻浮洲と云ひ、北を北狗盧洲、東を東弗婆提洲と云ふので、印度は其南閻浮洲に當るのであります。尤も此南閻浮洲を吾々の棲息する世界のこゝと云ふのが、之れは未だ地理が、今日の如く明かでなかつたから、印度人は人間の住む所は、印度地方即ち南閻浮洲のみと考へたので、それを其まゝ説いて、吾々人間の住する所を、總べて閻浮洲と解するやうになつたが、其實印度だけ位を南閻浮洲に當てたが可からうと思ふ。印度では今日閻浮洲のことをデヤンプデーパーと稱し、現にヒマラヤ山の南に面した方を、デヤンプと謂つて居るのも分る。敢て今は須彌山説を辯解するに及ばぬが、思はず横道に外れた。閻浮樹下笑ふ呵呵、此閻浮樹の下に立つて、大きな口を開いて、カラ／＼笑ふ者がある。扱て何者か笑ふぞ。是れ即ち雪竇自身である。雪竇は雲門大師の對一説で、其問ひを爲した僧の角をヘン折つて、グーの音も出さしめざるを痛快がり、堪まらなくなつて呵呵大笑したのであります。圓悟は「四洲八縣箇の漢を見ず」と著語しました。須彌四洲八縣の者、誰れが此の呵呵大笑の者を見るや、恐らくは一人として見る者はあるまいと雪竇を推し揚げ、更に「同道の者方に知る」と評した。道連れの雲門獨り之れを知るであらう。雲

門を知る者は雪竇にして、雪竇を知る者は雲門であると再び稱讚し、「能く幾くの人ありてか知らん」と益々稱揚し、以て圓悟門下を激勵したのであります。「昨夜驪龍角を拗し折す」龍は海に千年、山に千年の大蛇であつて、太々しい二本の角を有つて居る。龍は此問者の僧を指したので、如何なるか是れ一代の時教と二本の角を突き出したが、雲門昨夜言下に其角をへし折つて了つた。これを知つて居る雪竇呵々大笑したのであります。然し本則などは、文字の上のみに釣り上げられて居ては、容易に通れぬ、決して〳〵言句や文字の上面ばかりで、宗旨は得られぬ、能く〳〵親參實究しなくては雪竇と道連れが能きぬ。故に圓悟も叮嚀反覆著語を加へて注意に注意を加へて居ます。然れば「誰れ有つてか見來る。」と注意的著語を附けた。昨夜雲門其驪龍の角をへし折つた所を、慥かに見届けた者があるが、恐らく見届けた者はあるまい、無ければ再び行いて之れを的確に見届け來り、吾が前に於て證明せよと門下に警策した。「別々」雲門の對一説は、宗旨の最上を表はした答へであるが、更に別に、より以上の宗旨あるを悟り、之れを捕捉し得たる者ありやと云ふ語氣で、雪竇自身は既に之れを獲得し了つたといふ勢ひである。「韶陽老人一椀を得たり。韶陽は雲門の曾て住居した地名であるから雲門を指すので、老人は例の如く尊敬語であつて、老師、長老など同意。一椀は一半と同じ。雲門對一説と云つて、驪龍の角を折つたと云ふが、何んだ未だ一半を折つたばかりでないか、一本の角は其儘残つて居る。雲門大力あるが如くにして、而かも未だ一椀を得た位では誇るに足るまい。此雪竇

なら二本共にへし折つて呉れると言ひ出したが、果して雪竇對一説以上の手並を示し得るであらうかやつとの事で一椀を得たのでは、折角呵々大笑した甲斐はあるまい。然し其残つた一本の角すら折り得る者があるであらうか、借問す大衆諸君、如何なるか是れ一代の時教？

第十五則 雲門倒一說

垂示云、殺人刀活人劍、乃上古風規、是今時樞要。且道如今那箇是殺人刀活人劍。試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、殺人刀活人劍、乃ち上古の風規、是れ今時の樞要なり。且く道へ如今那箇か
是れ殺人刀活人劍。試に舉す看よ。

(講説) 此垂示は第十二則「洞山麻三斤」の所に出て居る垂示と大同小異、一寸重複して居るかと思はれるが、重なつて居ても可い、何度重なつても、其場其場で新しい。そんなことに拘はつて居ては到底宗旨は得られぬ。凡そ我が宗には殺人刀活人劍がある。其殺人刀活人劍は二劍ではなくて唯一刀であります。即ち殺の時、活の時にして、活の時、殺の時であります。殺活は唯一刀の使ひ分ける
あるが、さて、此一刀を自由に使ひ分ける者は實に少い。「殺人刀活人劍乃ち上古の風規是れ今時の樞要なり。」上菩提を求むる場合には殺人刀を使ひ、下衆生を化する時には活人刀を用ひるのであります。故に上古三世十方の諸佛諸聖も、此一刀を用ひて、法幢を樹て、今時の大善知識も、此一刀を用

ひて宗旨を立てて、邪を破り正を顯はす。然れば此活殺自在の一刀は、我が宗門に取つては、實に無くてならぬ什寶であります。「且く道へ如今那箇か是れ殺人刀活人劍。」斯くも我が宗門内に於て、珍重する所の殺人刀活人劍とは、果して如何なるものぞ、即今目前に於て此名刀を見たいものであると、圓悟は大衆に對して所望されました。然し大衆中に於て、其活殺の名刀を使ひ分ける程の豪傑も居らなかつたと見える。其處で圓悟、自ら見たくば見せてやらう、眼を開いて能く見やれ、氷の如き
双とは眞に此事ぞ。試みに舉す看よ。

舉、僧問、雲門、不是目前機、亦非目前事、時如何。門云、倒一

(訓讀) 舉す、僧雲門に問ふ、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非らざる時如何。門云く倒一
説。

(講説) 「舉す、僧雲門に問ふ。」此僧は前に「如何なる是れ一代の時教」と問ふた僧であります。故にそれは第一問、これは第二問であるが、第一問に於て、既に雲門の殺人刀活人劍の切れ味を知りながら、再び第二問を爲すには意志あるのであります。故に斯る問ひを呈解問とも云へば、藏鋒問とも云ふので、或は自己の見得底を以て、師家を檢するが如く見えるし、又潜在利刀を揮ひ、眞向に振り翳して居る様子である。然し雲門の活殺自在の一刀に遭ふては甲斐なきもの、宛ながら螻蛄の斧を振つて

龍車に向ふが如きものであります。「是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何」機と事と一つ擧げてあるが、之れは相對的の術語で、機とは教相家の所謂能觀の智であつて、事は所觀の境である。故に心と境と云ふも差闕ない。或は主觀と客觀と云つても可い。或は又自己と自己に對するものと見ても好い。例せば指を一本ズーと堅起した者があると云ふ事實に對し、今彼れは如何なる意味であつてか、指を堅起して天を指すかを思念する心がある、之れが即ち機境であります。彼の吉田の兼好法師が、爛漫たる櫻花の下にねぢより立ち寄り、花見をして喜び興じて居る者共(事)を觀て、

「花は盛りに月は隈なきをのみ見る者かは」

と言ふて通り過ぎた(機)と云ふ事であるが、兼好法師の心上の働きが即ち機である。然るに今此僧は是れ目前の機にあらず、亦是れ目前の事にあらざる時如何と、心境二途を超絶したる場合を問ふたのであります。目前の事は誰れも見聞するが、其目前の事に對する、目前の機は果して如何と問へば、之れすら普通の者は一寸躊躇するであらう。然るに其目前の事でない、目前の機でない其時は甚麼であるかと突つ込んで來たのである。若し雲門一刻でも躊躇せば、藏し持つたる吹毛で一撃に打つてやうと云ふ意氣込み、恐ろしい、鴉がカアと鳴けば聞こえるが、其カアともカツとも鳴かざる前の事である。若しカアと聞けば、其處に心起きて、彼れは鴉である、雀でない認識作用を爲すが、カツとも鳴かぬ前の心は如何なる作用を呈するか、それを承りたいと問ふのである。古歌に、

闇の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば
生れぬ前の父ぞ戀ひしき

と云ふ和歌があるが、其「鳴かぬ鳥の聲」である。或は「生れぬ前の父」である。白隱禪師は之れを「隻手の聲」と言はれた。若し此聲を聞き、此の形を見得る者あらば、形は出世の知識として耻ぢない。實に偉いことを問ひ出したものぢや。到底普通の者では問へない問ひ方であります。故に圓悟も驚いて「跣跳して、什麼をか作さん」と着語しました。實に出格の問ひであるぞ、何うしやうと云ふのぢや。然し「倒退三千里」で、逆飛びに抛げ飛ばされて、目を廻さぬやうに用心して居るが可い。「門云く倒一説」雲門の答へは甚だ手短いが、寸鐵殺人の手並であります。雲門は前には對一説と言ひ、今亦倒一説と云ふ、其倒一説とは何んぞ、少しく商量せんことを要する。文字上で云へば、倒一説の倒は顛倒の倒で、さかさまと云ふ字である。倒まごと言ふな。物珍しさうに、目前の事でないの、目前の機でないのと、何にも分つたか風に言ふ奴ぢや。鯨鋒立で歩けるなら、歩いて見よ、倒さ狂ひめ。果然倒退三千里である。圓悟は「平出し」に出して了つた、其僧の爲めに、雲門も遂に丸出しに答へて了つた。丁度罪人の罪狀書は、罪人の白狀に依つて書かれたやうだと「款は囚人の口より出づ」と著語した。更に「他に放過することを得ざれ」まだく容せぬ、重ねて詰問せよ。白狀未だ足らぬと謂つて居る。然し「荒草裏に身を横ふ」と著語して、雲門は遂に倒一説と云つたが、荒

草裏に身を横ふ所の猛虎の如きものである。其血盆の如き口を見よ、何を言ひ出すか分らぬと最後に雲門を卓上した。文字上の意味では、宗旨は十分に現はれない。故に白隠和尚も、此倒一説は講釋能きぬと言つて居られる。大いに親參實究すべきことであります。何んでも究めて究め盡し、疑ひ疑ふて疑ひ盡さねば、奥の院の御本尊は見られませぬ。

倒一説、分一節、同死同生爲君訣、八萬四千非鳳毛、三十三人入虎穴、別別、擾擾忽忽水裏月。

(訓讀) 倒一説、分一節、同死同生君が爲に訣す。八萬四千鳳毛に非ず、三十三人虎穴に入る。別々、擾々忽々たり水裏の月。

(講説) 『倒一説』雪竇は例の手段を用ひて、奪つて倒一説と頌した。此倒一説は七縦八横活殺自在の一刀であります。『分一節』雪竇は分一節と云つて、益々奪ふのであります。節は割符であつて符節とも云ふ。古人に、此符節は、雲門と此僧との眼底一般なることを示し、互に其一節づゝを分つて有つて居るなど云ふが、可くない。此分一節は、倒一説の内證秘訣を拈起したのであります。圓悟は、一爾が邊に在るか、我が邊に在るか」と著語しましたが、雪竇に渡せば分一節である。此分一説も倒一説と同じく講釋は能きる。故に古人も分一節は『碧巖』百則中無類絶妙の公案と讚嘆して居ます。『同

死同生君が爲に訣す。機と事とは元來二として分つべきものでない。之れは實に父子不傳千聖秘密であるけれど、同生同死底の知音同志に爲ると、互に之れが秘密を打ち明かすのである。二世も三世も契つた者で、手を把つて道行きでもするやうなものになると、父子不傳の秘密まで、すつかり打ち明けて、來世は必ず一蓮托生と苦樂を共にするのであります。雲門終に一僧と同生同死の契りを結んで千聖不傳の秘密まで言つて了つたと諷した。『八萬四千鳳毛に非ず。』鳳毛の故事は評唱に出て居ます。宋の時代に謝超宗と云ふ人があつて、其父を謝鳳と言ふた。謝超は博學にして而かも文才あり、文章を善くし、當時の朝廷比肩する者なく、當世獨歩と稱されて居たが、文を以て王府の侍者と爲りました。王の母薨去せる時、誄詞を作つて奏し、武帝其文を見て、大いに嘆賞し、超宗殊に鳳毛ありと言はれた。之れより父の美を繼ぐ子を鳳毛と言ふやうに爲つた。釋尊に八萬四千の弟子ありと雖も八萬四千ながら鳳毛とは行かぬ。唯破顔微笑した摩訶迦葉尊者のみ、鳳毛の資格があれど、其他の者は土偶人形同様である。豈夫れ釋迦在八萬四千の弟子のみならんや、滅後今日まで佛弟子沙門は、總て鳳毛に非ず。雪竇の見識亦驚くべしであります。『三十三人虎穴に入る。』西天四七東土二三の祖師方上は摩訶迦葉より、下は曹溪六祖大師に至る三十三師は何れも虎穴に入つた方々である。彼の猛惡なる虎兒を得んと欲せば、危険極まる虎穴に入らざるべからず。三十三人は實に不惜身命で實究された御方々である。倒一説を得んとすれば、須らく虎穴に入るべく、此危険を冒さざれば鳳毛にもあらず

と、此二句を以て、益々倒一説を賞したのであります。「別々」と更に一段卓上して「擾々忽々たり水裏の月。」と其別々なる所を示す、之れは全く餘韻であります。「涅槃經」に曰く、

「如水中月、水動則動」

と。月は中天に懸つて皎々たるものであるが、さて水中に映つた月影は、水の動くに従つてチラ／＼する。擾々忽々は其チラ／＼する有様であります。道元禪師の歌に、

濁りなき心の水に澄む月は

波もくだけて光りとぞなる

と、手に掬すれば何にもないが、月はキラリと水中に映つてゐる、有か有にあらず、無か無に非ず、此邊の消息は理論的では究明できぬ。白隠和尚は、

「此擾々の一語、譬へば萬仞崖頭に立つて千尺の深淵を望むが如し。」

と讚嘆して居らるゝ。又先師は此意を、

影分けて千々に碎くる溪川の

月の光は圓なりけり

と歌はれた。試みに咀嚼して見よ、興味津々として生ずるであらう。總て詩歌を用ひて所思を述べる

第十六則 鏡 清 草 裏 漢

垂示云、道無横徑、立者孤危、法非見聞、言思迥絶。若能透過荆棘林、解開佛祖縛、得箇穩密田地、諸天捧花無路、外道潛窺無門。終日行而未嘗行、終日說而未嘗說、便可自由自在、展啐啄之機、用殺活之劍。直饒恁麼更須知、有建化門中、一手擡一手擲、猶較些子。若是本分事上且得沒交涉、作麼生是本分事、試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、道に横徑無く、立者孤危、法は見聞に非ず、言思迥絶す。若し能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得れば、諸天花を捧ぐるに路無く、外道潜に窺ふに門無し。終日行して未だ嘗て行せず、終日説いて未だ嘗て説かず、便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ふ可し。直饒恁麼なるも、更に須く建化門中一手擡一手擲有ることを知つて、猶ほ些子に較るべし。若し是れ本分の事上ならば、且得沒交涉、作麼生か是れ本分の事、試

に擧す看よ。

(講説) 『垂示に云く、道に横徑無く立者孤危、道本圓通、無始劫の古より、盡未來際まで貫いて居る所の、一本道であります。而かも此道は天下の公道たる大道であるから、横路も無ければ徑路もなくて、眞實の大道である。上は王公貴人より、下は田夫野人も通り得る道であります。馬も通れば牛も通る、電車も通れば自動車も通る所の大道であります。恡く一筋道の大道であるのに、迷ひだの悟りだのと、横徑を附けやうとし、却つて自ら横徑に迷ひ込むのであります。迷ひだの悟りだのと言つた所で、二筋道ではない。本來古今に貫き渡る所の一本道より外ないのであります。然しながら立者孤危で、其大道に立つ所の者は孤危獨立であります。此天下の公道に立つ所の王公貴人、田夫野郎、牛馬犬猫、山川草木、國土瓦礫皆獨立であつて、更に他の支配を受けぬ。即ち花は花で獨立し、柳は柳で獨立して居る。紅は紅で獨立し、緑は緑で獨立し、立つた者は立つたなり、臥た者は臥たなりで獨立し、實に千差萬別であります。差別を亡ぼした平等の上に、復び差別現前する相であります。『法は見聞に非ず、言志迥絶す』法は大法であつて、能所を絶した所の絶對のものであるから、吾々の目で見たり、耳で聞いたりして、善い悪いのと批評すべからざるものであります。或は言語を以て説かんとして説き得ざるもので、又學解を用ひて思量能きざるものであります。即ち見聞言思を迥に超絶した、所謂絶對的のものであります。『若し能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開し、箇の穩密の

田地を得れば、諸天花を捧ぐるに路無く、外道潜に窺ふに門無し』荆棘は荆棘で、身を觸るれば身を傷つくるものであります。見聞言思は實に荆棘林であつて、大道を通行する者は、此荆棘の爲めに其の身を害されること、實に甚しいのであります。佛祖の縛は、佛見祖見のことで、佛祖が妄念煩惱を斷ぜよと言はれた言句に縛せられて、益々其妄想分別を盛んならしめ、能く之れを解き開く者が無い。即ち妄想分別の荆棘林を透過し、佛見法見の金鎖の難を解開して了へば、箇の穩密の田地を得るので、迷悟を超脱し得て、凡聖迷悟を絶した、眞實大安心の境に到達することが能きる。恡くてこそ諸天も花を捧ぐるに路なしであります。これは須菩提に就ての故事で、第六則『雲門十五前後』の頌、『空生巖畔花狼籍』の所に出て居ます。即ち須菩提一日巖中に坐して居ると、諸天花を雨降らして讚嘆した。尊者が、

『空中から花を雨降らして、讚嘆する者は誰れぞ。』

と問ふと、

『我れは帝釋天であるが、尊者の般若を説くを讚嘆する。』

と答へた。其處で尊者は、

『我れ未だ一字をも説かざるに、讚嘆することは要らぬ。』

と言ふと、帝釋天は、

「尊者無說、我れは無聞、是れ眞の般若なり。」

と言ふて、再び花を雨降らしたといふことであります。彼れ須菩提、般若を悟つたといふけれども、未だ諸天に窺はれるやうでは、眞の悟りではない。眞實箇の穩密の田地に入つて、證得したものならば、諸天に窺はれるやうな隙はない筈であります。又外道が如何に勝れてゐても、潜に窺ふ餘地がないのであります。「終日行じて未だ嘗て行せず、終日説いて未だ嘗て説かず」扱て彼の穩密の田地を獲得すれば、終日大道を行くも、更に其大道に痕跡を貽すやうなことはない。終日佛法を言思しても、更に言思の迹を止めない。實にサラリとしたものである。「便ち以て自由自在に啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ふ可し」此啐啄といふ文字は、面白い文字で、之れは親鶏が其卵を孵化させる時の事で、即ち殻中の雛鶏が、殻を破つて出やうとして、雛が殻中に在つてコツ／＼と啐く時、同時に親鶏が外に在つて、殻を破つて遣らうとて、又コツ／＼と啄く、實に其啐啄時を違へず同時である。今吾が宗門に於て師家が學人に接する時も、實に此啐啄同時の働きを見る事である。本則に此啐啄を眼目として居るから、圓悟も又自由自在に啐啄の機を展べて、機縁の熟した所を見抜き、殺活の劍を用ふべしと垂示されたのは、妙手腕である。殺活は前來出てゐた事であるから、重ねて言ふまでもない。殺人刀活人劍で、同一の劍の使ひ分けをする、之れも普通の者では能きぬ。實に此啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ひ得る者は、終日説いて而かも説かざる底の者でなくてはならぬ。見よ釋尊は、一代説き續け

に説法しながら、最後に於て一字不説と止めをさゝれたでないか。然しながら、圓悟は、言葉を一歩進めて「直饒恁麼なるも、更に須く、建化門中に一手擡一手擡有ることを知つて、猶些子に較るべし」と示された。縱令殺活自在啐啄同時の働きあればとて、衆生濟度の場合に於ては、須らく一手を擡げ一手を擡ふる大手擡手のあることを知つて、而かも學人に當らねばならぬ。「若し是れ本分の事上ならば、且得没交涉」然し納僧本分事上に於ては、前節に縷述したやうな、手ぬるい作略では到底駄目である。且得没交涉で、寄つても付けぬ孤危嶮峻である。「作麼生か是れ本分の事」然らば本分事とは如何なる事ぞ。「試に擧す看よ」

擧、僧問ニ鏡清、學人啐、請師啄。清云、還得活也無。僧云、若不活遭人怪笑。清云、也是草裏漢。

(訓讀) 擧す僧鏡清に問ふ、學人啐す。請ふ師啄せよ。清云く、還つて活を得るや也た無や。僧云く、若し活せずんば、人に怪笑せられん。清云く、也た是れ草裏の漢。

(講説) 鏡清といふのは、雪峰和尚の法を嗣いだ人で、本仁、玄沙、疎山、太原孚の輩と同時代であります。得法の後は、常に啐啄の機を用ゐて、後學の爲めにしました。他の一例を擧ぐれば、鏡清或る日衆に示して云々、

「大凡そ行脚の人は、須らく啐啄同時の眼を具し、啐啄同時の用を有つてゐて、初めて衲僧と稱することを得る。故に母啄せんとすれば、子は啐することを得ず、子啐せんと欲すれど、母啄することを得ざるやうでは不可ぬ。」

と、時に一僧あり出で、問ふ、

「母啄し子啐す。和尚分上に箇の什麼邊の事をか爲し得る。」

と。清云く、

「好箇の消息、善いことを聞いた。子が啄いたさうな。」

僧云く、

「子啐し母啄す。學人分上に於て什麼邊の事をか爲し得る。」

清云く、

「箇の面目を露はさず。さてく目のくりくした佳い子が出來た。」

と。其答へ振りは、如何にも自由自在である。故に鏡清門下に、啐啄の機ありといふのであります。

「擧す僧鏡清に問ふ。學人啐す、請ふ師啄せよ。」これは所謂藏鋒門で、此僧は鏡清の手並を見抜いてゐるから、啐啄を以て問ひかけたのであります。學人と指したのは、勿論問者自身のことでありまして、

「私は殻中にありて、コツ／＼啐いてゐます。最早一步といふところまで達しました。悟りは目前に來てゐます。願はくば和尚、私の爲めに啄して下さい。」

と。すると「清云く、還つて活を得るや也た無なや」で、鏡清は明眼であるから、弟子に頼まれて氣が付き、啐いて遣るやうな癡者でないから、則ち云く、

「お前は今啄を乞ふけれど、衲は疾うに啐いて置いた。」

と、小僧殺されずに健康で居たかといふやうな調子であります。圓悟は割と、一字以て著語を下しました。割は針を以て刺すことで、これが所謂頂門の一針であります。「更に帽を買ふに頭を相す」と著語して、頭相當な帽子を買はねば無益だが、此問答も問ひが問ひなら、答へも答へた。能く相應してゐると、鏡清の答へ振りを褒めてゐます。「僧云く若し活せずんば、人に怪笑せられん」此僧も一と通り坊主でないから、飽くまで喰つてかゝる。生きて居らないで何うしませう。和尚の啄で死んで了つたなど、言つては、夫れこそ世間の好い笑ひ草になります。能く／＼御目を明けて、この活き／＼した私の働き振りを、御覽願ひたいもので御座る。其勢實に驚くべしだ、和尚も善い弟子を持つたものだ。此世間から嗤笑されるなんぞと、如何にも恥を知つたかぶりの勢は、正に衝天の氣ありと言つて可い。けれども之れが俗に云ふ命知らずで、進むことを知つて居るが、退くことを知らない者ぢや。故に圓悟も「擔板漢」と抑え付けた。長い板を擔いで居る時は、道幅が狭いから、前方へは進ま

れるけれど、横に向くことは能きぬ。「清云く、也た是れ草裏の漢」此僧傍若無人の言を吐くから、鏡清も終に横面を撃つた。何ちやムサ／＼しい掃溜の中に居る癖に、啐啄同時はまだ／＼間がある。活した働きを見て呉れるとは能く出来た、自分免許は通用せぬぞと、手厳しく遣つたので、黙つて退いて了つた。圓悟も吾が笑壺に餓つたので「果然」と相槌を打つた。更に續けて「自領出去」と言つて居る。そんな粕悟りなら、矢張自分で背負つて歸るが可いと評したのも、亦圓悟の力でありませぬ。

古佛有家風、對揚遭貶剝、子母不相知、是誰同啐啄。啄、覺、猶在殼、重遭撲、天下衲僧徒名邈。

(訓讀) 古佛家風有り、對揚貶剝に遭ふ、子母相知らず、是れ誰れか同じく啐啄す。啄、覺、猶ほ殼に在り、重ねて撲に遭ふ、天下の衲僧徒に名邈す。

(講説) 「古佛家風有り」古佛とは過去七佛より釋尊に至り、釋尊より嫡々相承して、所謂西天の四七達磨より更に東土の二三の祖曹溪に至り、夫れより南岳、馬祖、百丈、黃檗等と引き續いた諸祖を總て古佛と指したのであるが、今は鏡清に見て可い。そして此の古佛各々家風あるけれど、其家風に共通した家風があつて、今に行はれて居る。然らば其家風とは如何なる家風かと云ふに、所謂啐啄の機を以て家風として居る、豈啐鏡清一人のみならんやである。「對揚貶剝に遭ふ」第一句で雪竇は

鏡清を頌し盡したけれど、第二句を以て、第一句を助けるのである。貶はおとし剝ははぐと訓す。對は應對、揚は舉揚であるから、師匠が弟子に應對して宗旨を舉揚し、其凡情を貶し、其厚顔を剝ぎ取つてやるのである。啐啄同時で其間髪を容れないけれど、其間に於て眞の善知識は、十分に貶剝する。今鏡清も此僧に對して、還つて活を得るや也た無なやと貶し、也た是れ草裏の漢と剝した。而かも此問答商量の間に於て、宗風を舉揚して居る所は、大善知識たる鏡清の手並である。「子母相知らず、是れ誰れか同じく啐啄す」母子相知らずで、殼内啐啄の雛は、殼外の親鶏の啄するを知らず、殼外の親鶏は殼内の雛が啄することを知らぬ。然しながら其啐啄同時で、雛が生れ出づる、之れ果して誰れが同時に啐啄せしめたのであらう。故に弟子が悟らせて貰はうとしても、悟らせて貰ふことも能きねば、師が弟子を悟らせて遣りたくとも、亦悟らして遣ることも能きぬ。只本有の光が開悟されるばかりで、其外に沙汰はない。知人が途上に逢ふ時同時に、ヤツと聲を掛ける、此ヤツと云ふ一刹那に消息を通じて了ふやうなもので、學問や智慧では開悟は能きぬ。「啄覺」の二字は一字一句で鏡清が還つて活を得るや也た無なやと啄すれば、僧若し活せずんば人に怪笑せられんと啄した所が覺した所で、此啄覺同時である。「猶ほ殼に在り」僧師の語に應じ電光石火に若し活せずんば人に怪笑せられんと、既に殼外に飛び出したかと思ひの外、雛は猶ほ殼中に在り、殼は破れたが、未だ皮離れがせないで、薄皮一枚被つて居る。「重ねて撲に遭ふ」彼れ丈け師に啄せられても、未だ殼を出でぬ故、重ね

て打ち撲られた。蹴飛ばされたでもよい。最う重ねて啐いて遣らぬ、蹴飛ばされた。之れも亦親鶏の慈悲深切である。也た是れ草裏の漢と、鏡清は撲したが、果して此撲に因つて殻を脱し得たりや否や。「天下の衲僧徒に名遜す」天下の衲僧は、徒に其状を説いて、此僧を殻を出でたの、殻を脱せぬのと、色々に言ひ立てるけれど、天下の衲僧には、容易に此僧の消息は分るまいと、最後に大衆に向つて警告したのであります。我が口眞似して、猶殻に在りだの、重ねて撲に遭ふだのと言つたとて、眞實此公案を得ねば、此僧の身の上は語られない。徒にガア／＼言へば鴉の難を免れぬぞ、能く能く注意して、此眞實を窺めなくてはならぬ。

第十七則 香林座久成勞

垂示云、斬釘截鐵、始可爲本分宗師。避箭隈刀、焉能爲通方作者。針割不入處則且置。白浪滔天時、如何。試舉看。

(訓讀) 垂示に云く、釘を斬り鐵を截ち、始めて本分の宗師と爲す可し。箭を避け刀に隈るれば焉んぞ能く通方の作者と爲さん。針割不入の處、則ち且く置く、白浪滔天の時如何ん。試に舉す看よ。(講説) 「釘を斬り鐵を截ち、始めて本分の宗師と爲す可し」釘、鐵は剛強の物を代表として擧げられたので、如何なる難透難關をも切り破ることを例示したが、初めの一句、堅き釘であれ、鐵であれ自由自在に斬り飛ばす腕前を有つて居る、所謂斬釘截鐵の機にして、始めて禪學の本分を全ふした宗旨として尊敬することが能きる。言ひ換へれば、迷ひの釘を抜き去り、悟りの鐵鎖を截つ底の者でなくば、話の相手には爲れぬ。「箭を避け刀に隈るれば、焉んぞ通方の作者と爲さん」此一節は前節の反面を擧げたので、先づ戰場へ出て、箭面を避け廻はつたり、刀の下に隈れ廻はつたりするやうでは

到底七通八達自由自在の力ある名將と稱することは能きぬ。即ち退嬰的態度では、法戦場の雄將として尊敬する資格はない。作家は作家と同意で、出格秀逸の者を呼ぶ稱號であります。「針割不入の處は則ち且く置く」針先で割し突く餘地もない、自分の正位、理事超越底の境界は且く別として差置き。「白浪滔天の時如何ん」白浪滔天は、大用現前の有様で、即ち狂瀾怒濤逆巻き返へし、白浪天をも衝かんとすばかりの有様、斯る時には轉身自在の働きがなくてはならぬが、此白浪滔天の時果して如何。「試に學す看よ」

舉、僧問ニ香林、如何是祖師西來意。林云坐久成勞。

(訓讀) 舉す、僧香林に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。林云く、坐久成勞。

(講説) 「香林」と云ふは、益州青城の香林禪院に住して居た澄遠禪師のことで、雲門大師に事ふること、正に十八年といふ根氣の善い人でありました。雲門大師は例の雲門宗の祖であるが、前後十八年間も、左右に待すとあつては、一寸鈍漢でもあるかのやうに聞えるけれど然うでない。後此香林院に住する四十年、八十歳にして遷化す、時に曰く、

「我れ四十年方に打成一片。」

と。又衆に示して曰く、

「人凡を行脚して知識を參尋せんには、眼を帯びて行かんことを要す、須らく縑素を分ち、淺深を看て、始めて得べし。先づ須らく志を立つべし、而かも釋迦、老子、因地に在りし時、一言一念を發して、皆是れ志を立つ。」

と。此立志の教誨實に難有いのである。世間には立志と云へど、我が佛法に於ては既に發菩提心と云ふ術語がある。或は之れを略して發心とも云ふけれど、之れが即ち立志であります。凡そ修養せんとする底の者ならば、當然此發菩提心あつて然るべきである。その發心なくしては、修養するも、其修行覺束なく、其功果固より收むることは能きぬ。假令一坐の提唱を聞くにしても、其處に必ず發心立志の根柢あつて、初めて其功德は現はれるのであります。「舉す僧香林に問ふ」一僧あり、來つて香林寺の澄遠禪師に問ふ。「如何なるか是れ祖師西來意」祖師西來の意とは、言ふまでもなく、祖師は達磨大師であつて、達磨が印度からノコノ震旦まで出かけて來た趣意は、一體何んであるか。此問題は支那佛教、殊に禪門に於ては、大問題であつたから、修養者は、大善知識に逢ふ度毎に、必ず此問題を提起して問ひを發す。故に古來此問題に對する答話は、凡そ百三十通りもある位。然し此答話が最も出格のものであるとの評を受けて居る。「林云く、坐久成勞」之れが祖師西來の意であります。坐久成勞は長い間坐つて居て疲れたと云ふこと。其處で大概の者は、達磨大師が、西天より支那に來り、武帝と一問答したのみで、嵩山の少林寺に立て籠り、九年間も面壁打坐して動かれなかつたといふ、

此九年面壁を持ち出して、今の坐久成勞を邪解して居るが、此答話は、そんな莫迦らしいことではない。詰り達磨は香林の肚の中に入つて、能く消化されてあるから、祖師西來の意如何と問はれた時、口を衝いで出たのが坐久成勞である。諸人又達磨を肚に入れて能く消化した後でなくば、亦此坐久成勞が分らぬであらう。要するに先づ達磨を我が肚裏の者とする必要がある。其上で此公案に参ずれば自づから興味津々として湧出する。扱て達磨はどんな面をして爲るであらう。今圓悟の著語を擧げて此處に多少の参考に供して置きたい。先づ祖師西來意の下に「大に人の疑著あるあり」とある。實際祖師西來意に就いては、武帝を初めとして、天下一般疑著する所であつた。百三十回も繰り返へされたと云ふことだけでも、如何に疑著されたかは想像するに難くない。然し圓悟の眼より見れば、此問題に既に解決されたと思ふに、今一僧出で、重ねて之れを問ふ。「猶ほ這箇の消息あることあり」まだ解らず屋が居るわいと冷笑の語氣である。坐久成勞の下では「魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ」香林が坐久成勞と遣つたが、早や跡がつく、噫今日は長談義で疲れたなど、眞似ても不可ぬぞよ、現前の大衆何んと答へて、香林をして好知音と云はしむるか。之れは人々に任して置いて、こんな事を問ふ者あらば、祖師西來意は此通りだぞと、横面をビシヤリ遣つて呉れ、ば可い。然し今の著語で見ると打つても不可ない、何にか言つたり、仕たりすれば、直ぐに其處に痕跡を留むる。魚が行くと水を濁し、鳥が飛べば羽を落し、何もしなければ、伏見人形で役に立たぬ。「狗口を合取せば好し」餘計

なことを啜えずと可い、臭ひ口を塞げと、暗に香林を抑えて居る。「作家の眼目、解稱、鈍」然し香林の如き作家の答話は、意深くして探り難いと稱揚し、之れを参究する者は、浮か々々と看過してはならぬと注意して居るのであります。

一箇兩箇千萬箇、脱却籠頭、卸角駄、左轉右轉隨後來、紫胡要、打劉鐵磨。

(訓讀)「一箇兩箇千萬箇、籠頭を脱却して角駄を卸す、左轉右轉後に隨つて來る、紫胡劉鐵磨を打たんことを要す。」

(講説)「一箇兩箇千萬箇、籠頭を脱却して角駄を卸す」一箇は一人と同じ、誰れでも彼れでも、此祖師西來意が分れば、大安心なものであります。丁度馬が籠頭を脱つて、角駄を卸したやうに、樂樂として、自由自在に原野を飛び廻はることが能きる。籠頭は馬の鼻面にかける籠のこと、角駄は馬に負はせる荷物のこと。今此坐久成勞の答話に依つて、權兵衛も田吾作も、誰れ彼れ言はず、勝手道具の鍋も釜も摺木摺鉢、何んでもかでも、重荷を卸して太平無事一切萬物ニコニコ然として居ると、坐久成勞を頌出したのであります。三句四句は餘裕で、「左轉右轉後に隨つて來る、紫胡劉鐵磨を打たんことを要す」之れは紫胡劉鐵磨を打つた故事を擧げたのである。紫胡は南泉和尚の弟子であつて、劉鐵磨は比丘尼ではあるが、當時却々峻峻の聞えある傑物であつた。一日紫胡が、劉鐵磨の到る

を見る、紫胡機先を制して、

「汝は劉鐵磨ではないか。」

「何う致しまして。」

「左轉か右轉か、右へ廻るか左へ廻るか。」

「和尚顛倒すること莫れ。」

語未だ終らざるに、紫胡禪師は打つた、餘計なことを言ひやがると、恚うだぞと言はぬばかりでありました。流石の劉鐵磨も此處では一本參つた。今亦左轉右轉後に隨つて來たる、祖師西來意に就いて誰れが恚う言つたの、彼れがあゝ言つたのと、迂路々々した揚句の果、何にか言ひでもして見ろ、紫胡の劉鐵磨に於けるが如く、ウンと言ふ程打ち据ゑて遣るぞと、雪竇が力んで居ます。が、之れ亦雪竇の大慈大悲であります。

第十八則 忠國師無縫塔

舉肅宗皇帝問忠國師。百年後所須何物。國師云、與老僧、作箇無縫塔。帝曰、請師塔樣。國師良久云、會麼。帝曰、不會。國師云、吾有付法弟子耽源。却諳此事。請詔問之。國師遷化後、詔耽源、問此意如何。源云、湘之南潭之北。雪竇着語云、獨掌不浪鳴。中有黃金充一國。雪竇着語云、山形拄杖子。無影樹下合同船。雪竇着語云、海晏河清。瑠璃殿上無知識。雪竇着語云、拈了也。

(訓讀) 舉す、肅宗皇帝、忠國師に問ふ。百年後須むる所何物ぞ。國師云く、老僧が與に箇の無縫塔を作れ。帝曰く、請ふ師塔樣、國師良久して云く、會すや、帝云く不會。國師云く、吾に付法の弟子耽源と云ふ者あり、却つて此の事を諳んず、請ふ詔して之れを問へ。國師遷化の後、帝耽源に詔して此の意如何と問ふ。源云く、湘の南潭の北、雪竇着語して云く、獨掌浪に鳴らず。中に黄金有りて一國に充つ、雪竇着語して云く、山形の拄杖子。無影樹下の合同船、雪竇着語して